令和４年度

第７１回　全道へき地複式教育研究大会

(全国へき地教育研究大会　北海道ブロック大会)

胆振大会研究記録

■大会スローガン■

産業豊かな多様性に満ちた胆振の地から

子どもたちに未来へ飛躍する力を

地球岬

胆振大会実行委員会

令和４年度
第71回 全道へき地複式教育研究大会
胆振大会

《研究主題》

主体的・協働的に学び、ふるさとへの誇りと愛着をもった人間性豊かな子どもの育成

～児童生徒一人一人が仲間とつながり、

地域とともに「生きる力」を伸ばす学校・学級経営と学習指導の充実をめざして～

【期日】　令和４年 ９月 14 日(水)・15日(木)

【会場】　１日目 全体会・講演・分散会　洞爺湖文化センター
２日目 公開授業・分科会　胆振管内4会場
〈両日ともにリアル開催ならびにオンライン開催〉

【主催】　北海道へき地・複式教育研究連盟

【共催】　全国へき地教育研究連盟

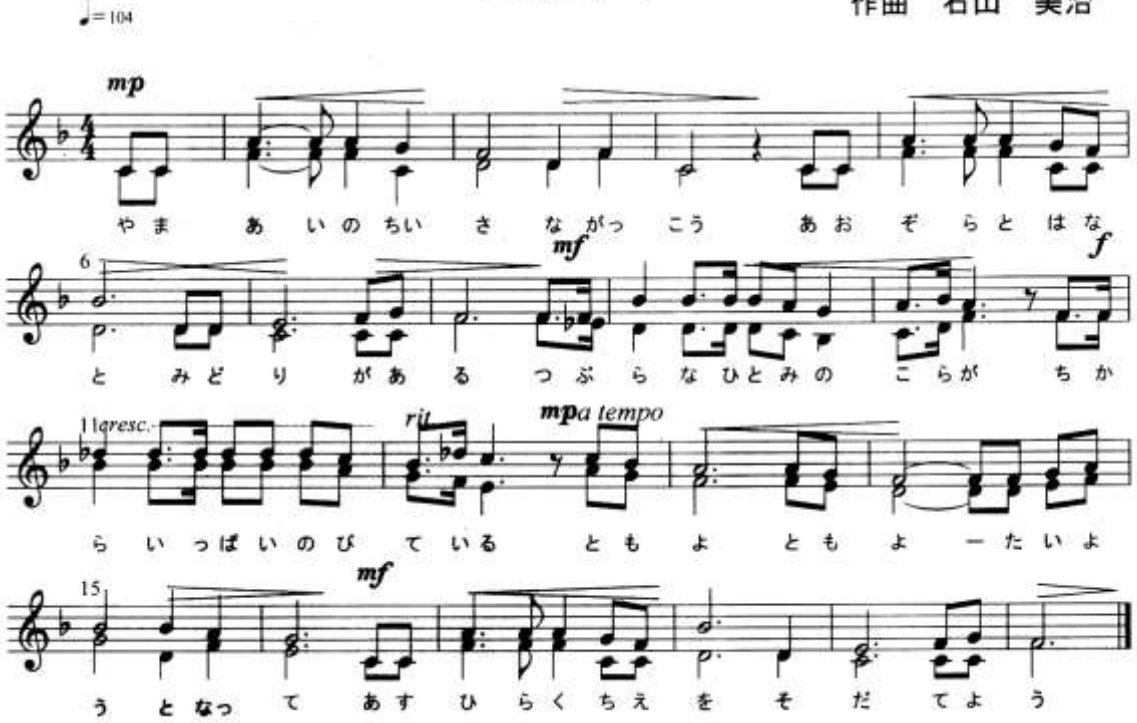
【主管】　胆振へき地・複式教育研究連盟

【後援】　北海道教育委員会 ・北海道教育大学・ 胆振管内教育委員会教育長協議会
洞爺湖町・SoftBank・苫小牧市教育委員会・室蘭市教育委員会・伊達市教育委員会
登別市教育委員会・豊浦町教育委員会・洞爺湖町教育委員会・壮瞥町教育委員会
白老町教育委員会・安平町教育委員会・むかわ町教育委員会・厚真町教育委員会
胆振管内校長会・胆振管内教頭会・胆振教育研究所
胆振西部 PTA 連合会・胆振東部 PTA 連合会

太陽となろう

～へき地教師のうた～

作詞　新渡戸　常晴
作曲　石山　美治



太陽となろう　～へき地教師のうた～

作詞　新渡戸　常晴
作曲　石山　美治

一、
山間の　小さな学校
青空と花とみどりがある
つぶらな　ひとみの子らが
カいっぱい　伸びている
教師よ　教師よ　太陽となって
あすひらく　智恵を　育てよう

二、
海辺の　小さな学校
潮風と波と光がある
明るい心の　子らが
カいっぱい　伸びている
教師よ　教師よ　太陽となって
あす築く意志を育てよう

三、
北国の　小さな学校
粉雪と　歌と　氷がある
元気な笑顔の　子らが
カいっぱい　伸びている
※教師よ　教師よ　太陽となって
あすつくる夢を育てよう

※くり返し

目　次

挨　　　拶

Ⅰ　胆振大会の開催について

大会開催要項・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

全体会（開会式・閉会式）次第・分散会一覧・・・・・・・・・・・・・・・2

公開授業校一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

Ⅱ　全体会の報告

１　記録写真・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

２　講演会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

３　分散会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

Ⅲ　分科会会場校の研究および配信方法

◇第１分科会　洞爺湖町立とうや小学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

◇第２分科会　伊達市立大滝徳舜瞥学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・42

◇第３分科会　白老町立虎杖小学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・66

◇第４分科会　苫小牧市立樽前小学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・86

Ⅳ　胆振大会を終えて

大会振り返り・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・114

活動報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・117

加盟校一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・122

実行委員会 組織図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・123

第 71 回全道へき複式教育研究大会胆振大会ファーストステージ
記録集の発刊にあたって

全道へき複式教育研究大会胆振大会ファーストステージ
大会実行委員長 前田 道弘
（胆振へき地･複式教育研究連盟委員長）

第 71 回全道へき地複式教育研究大会胆振大会ファーストステージ記録集の発刊にあたり、ご挨拶申し上げます。

本年度は、北海道へき地・複式教育研究連盟第 10 次長期 5 か年研究推進計画の 4 年次として、その研究主題である「主体的・協働的に学び、ふるさとへの誇りと愛着をもった人間性豊かな子どもの育成」に基づいて研究を進めて参りました。この研究成果を広く発信するために、開催地区として「産業豊かな多様性に満ちた胆振の地から　子どもたちに未来へ飛躍する力を」をスローガンに掲げ、洞爺湖町を全体会場に、講演会や分散会、管内 4 市町 4 会場で分科会を実施しました。

今大会は、全道へき地複式教育研究大会の在り方の変更を受け、従来のプレ大会実施の年度となる大会＝ファーストステージとして開催いたしました。したがって、本来的に集録を作成する計画とはなっていなかったものの、従来の本大会に近い研究推進、大会構成、参集の範囲、指導助言や支援の広範さ、また、今後への継承等を鑑み、記録集としてまとめることといたしました。

コロナ禍を受け、当初より参集及び会同とオンライン配信を念頭に置いたハイブリッド大会として、２年前より計画を進めて参りました。ICT を活用した授業研究や、限られた人材・器材による運営の工夫、開催直前までの複式授業配信の工夫等、新たな取組の構築も必要でしたが、これまでの道へき大会の積み上げや、多彩な支援・協力を仰ぐことで、当初の想定に近い大会を実施することができました。感謝申し上げます。あわせて、３年ぶりに参集を伴う大会となり、実際の協議が研究を深め、それを実感することができました。さらに、オンラインでの研究は、その技術習得のみならず、より広範囲で多くの参加を得られることも実感いたしました。

次年度は、これらの成果を一歩前進させるために、より多くの課題を克服することで、研究がよりよい方向に向かうことを目指して参りたいと思います。

結びとなりますが、ご参加いただいた方々はもとより、本大会開催のために尽力いただきました連盟の教職員の皆さんをはじめ、ご支援、ご協力いただきました北海道教育委員会、北海道教育庁胆振教育局、胆振管内各市町教育委員会、北海道教育大学、SoftBank、そして全国へき地教育研究連盟、北海道へき地・複式教育研究連盟等、管内外の教育関係機関の皆様に、重ねて感謝とお礼を申し上げると共に、次年度ファイナルステージへのご支援、ご協力をご期待申し上げ、記録集発刊の挨拶といたします。

第 71 回

全道へき地複式教育研究大会 胆振大会

Ⅰ　胆振大会の開催について

第１分科会　洞爺湖町立とうや小学校

全道へき地複式教育研究大会胆振大会（ファーストステージ）開催要項
＜全国へき地教育研究大会北海道ブロック大会＞

研究主題　『主体的・協働的に学び、ふるさとへの誇りと愛着をもった人間性豊かな子どもの育成』
～児童生徒一人一人が仲間とつながり、
地域とともに「生きる力」を伸ばす学校・学級経営と学習指導の充実をめざして～

開催趣旨　全国へき地教育研究連盟５カ年研究推進計画の研究主題及び北海道へき地・複式教育研究連盟５カ年研究推進計画の研究主題を踏まえて、胆振地区におけるへき地教育実践をもとに、北海道ブロックにおけるへき地教育の研究成果を交流するとともに、へき地教育の今日的課題について研究協議し、もってへき地教育の充実を図る

胆振大会スローガン　「産業豊かな多様性に満ちた胆振の地から　子どもたちに未来へ飛躍する力を」

１、主　　催　：　北海道へき地・複式教育研究連盟
２、共　　催　：　全国へき地教育研究連盟
３、主　　管　：　胆振へき地・複式教育連盟
４、後　　援　：　北海道教育委員会・北海道教育大学・胆振管内教育委員会教育長協議会
洞爺湖町・SoftBank・苫小牧市教育委員会・室蘭市教育委員会・伊達市教育委員会
登別市教育委員会・豊浦町教育委員会・洞爺湖町教育委員会・壮瞥町教育委員会
白老町教育委員会・安平町教育委員会・むかわ町教育委員会・厚真町教育委員会
胆振管内校長会・胆振管内教頭会・胆振教育研究所
胆振西部 PTA 連合会・胆振東部 PTA 連合会
５、期　　日　：　令和４年９月１４日（水）１５日（木）
６、会　　場　：　【全体会・分散会会場】洞爺湖文化センター（虻田郡洞爺湖町洞爺湖温泉 142-140
TEL.0142-75-4400）
【歓迎交流会】洞爺湖町内で実施予定
【公開授業・研究協議会場】
第１分科会：洞爺湖町立とうや小学校　第２分科会：伊達市立大滝徳舜瞥学校
第３分科会：白老町立虎杖小学校　　第４分科会：苫小牧市立樽前小学校
７、実施方法　：　【リアル開催】　　定数を決め、会場（全体会・分散会・分科会）にて実施
【オンライン開催】　ZOOM にてオンライン配信（全体会・分散会・分科会）
８、大会日程　：

１日目　１４日（水）　　OL：オンライン配信

12：30 ～13：00	13：00 ～13：40	13：50 ～15：00	15：10 ～16：40	16：50 ～17：10		18：30 ～20：00
受　付	開会式 OL	講演会 OL	分散会 OL	閉会式 OL		（歓迎交流会）※

※感染症拡大状況に応じて対応

２日目　１５日（木）

8：30～	9：00～ 9：45	10：00～ 10：45	11：00～ 12：00	12：00～ 13：00	13：00～ 15：00	15：00～ 15：30
受　付	授業公開 ①OL	授業公開 ②OL	開会式 研究発表 OL	昼　食	研究協議 OL	閉会式 OL

９、参 加 費　：　参集による大会参加　　３，０００円
オンラインによる大会参加　２，０００円

全体会（開・閉会式）次第・分散会一覧

【開会式】令和４年９月１４日（１３：００～１３：４０）洞爺湖文化センター：大ホール
（進行：胆振大会実行委員）

１開 式 宣 言　北海道へき地・複式教育研究大会　実行委員長　前　田　道　弘
２大会歌「太陽となろう」斉唱
３主催者挨拶　北海道へき地・複式教育研究連盟　委 員 長　温　泉　　敏
４来 賓 祝 辞　全 国 へ き 地 教 育 研 究 連 盟　会　　長　柿　崎　秀　顕　様
　　北　海　道　教　育　委　員　会　教 育 長　倉　本　博　史　様
　　胆振管内教育委員会教育長協議会　会　　長　安　藤　尚　志　様
５来 賓 紹 介　北海道へき地・複式教育研究連盟　事務局長　井　上　隆　一
６閉 式 宣 言　北海道へき地・複式教育研究連盟　副委員長　森　　広　明
※事務連絡

【講演会】（１３：５０～１５：００）洞爺湖文化センター：大ホール

■演題　「新学習指導要領の確実な実施とへき地複式教育に期待すること」

■講師　文部科学省　初等中等教育局教育課程課
教育課程企画室長　石　田　有　記　様

■講師 Profile
平成 11 年に文部省（現：文部科学省）入省。係長（教職員課、教育課程課、財務課、特別支援教育課）、千葉県市川市教育委員会教育次長、教育課程課教育課程企画室専門官、同課学校教育官等を経て現職。

【分散会】（１５：１０～１６：４０）
Ⅰ【学校・学級経営】　洞爺湖文化センター：第１会議室
Ⅱ【学 習 指 導 １】　洞爺湖文化センター：第３会議室
Ⅲ【学 習 指 導 ２】　洞爺湖文化センター：第２会議室

【閉会式】（１６：５０～１７：１０）洞爺湖文化センター：各分散会会場
（進行：道へき研究推進委員運営者）

１開 式 の 言 葉　北海道へき地・複式教育研究連盟　研究推進委員
２実行委員長挨拶　北海道へき地・複式教育研究大会　実 行 委 員 長　前　田　道　弘
３閉 式 の 言 葉　北海道へき地・複式教育研究連盟　研究推進委員
※事務連絡

【分散会一覧】

北海道へき地・複式教育研究連盟の長期研究推進計画に基づく実践研究の成果と課題について研究協議を行い、複式教育の充実・発展に資することを目的とする。

	分散会Ⅰ	分散会Ⅱ	分散会Ⅲ
課題	学校・学級経営（第1分野）	学習指導①（第2分野）	学習指導②（第2分野）
提言者	釧路管内 浜中町立浜中小学校 教諭 郡山美帆 氏	石狩管内 石狩市立浜益小学校 教諭 吉弘文人 氏	空知管内 栗山町立継立小学校 校長 土谷直樹 氏
発表題	【第1課題】 「自ら学び、心身ともに健康で、感性豊かな子どもの育成」 ～夢を求め 人に学び 里に生きる～	【第6課題】 「新たな学びを創造する思考力・判断力・表現力の育成」 ～各教科等の目標を実現するための言語活動の充実を通して～	【第5課題】 「主体的に学び、互いに高め合う子どもの育成」 ～ICT 機器等を活用し、交流することで学びを深める指導の工夫～
概要	①地域環境や地域の方から学び、心を耕し、ふるさとを愛する気持ちを育てていくための教育課程の工夫 ②小規模校児童の長所を伸ばしつつ、可能な限り課題の解消を図ることを目的とした、町内他校との交流学習の様子について。	①主体的で対話的な学びを創造する思考力・判断力・表現力を育成するために、各教科等の目標を実現させる言語活動の充実を図った指導過程の改善と工夫、その成果について。	①コミュニケーション力・人間力等の育成 ②教科指導（個に応じた指導）の充実に関わり、少人数であることを強みとした1人1台端末の効果的活用及び少人数指導の弱みを強みに変えられる教員の資質向上を目指した研修等について発表する。
討議の柱	へき地三特性を生かした地域に根ざした特色ある教育課程の創造と推進	主体的・対話的で深い学びの視点からの学習指導過程の改善と充実	1人1台端末の効果的な活用など学習効果を高める指導方法の改善と充実
司会者	十勝管内 音更町立東士幌小学校 校長 増田 覚	オホーツク管内 北見市立相内小学校 校長 堀田大次郎	根室管内 別海町立上風連小学校 校長 伊藤秀則
助言者	北海道教育庁胆振教育局 義務教育指導班主任指導主事 中尾育夫 様	北海道教育庁胆振教育局 義務教育指導班指導主事 渡辺浩輔 様	北海道教育庁学校教育局 義務教育課主任指導主事 富田 元 様

公開授業校一覧

第１分科会　洞爺湖町立とうや小学校　校長　山　下　文　人	
研究主題	単式でも複式でも使える「学びの質を高める」学習指導の探究
副主題	～少人数のメリットを活かした学習指導の改善と工夫～
分野・課題	【学校学級経営１、学習指導６】
教科等・年次	算数　「３年計画・２年次」
公開授業１	授業者：吉　村　　亮（担任） ３年生　算数　「あまりのあるわり算」
公開授業２	授業者：福　山　美　沙（担任） ４年生　算数　「割合」
助言者	北海道教育庁学校教育局義務教育課　主任指導主事　　富　田　　元　　様 音更町立東士幌小学校　校長　　増　田　　覚　　氏

第２分科会　伊達市立大滝徳舜瞥学校　校長　羽　根　秀　哉	
研究主題	未来を創る児童・生徒の育成
副主題	～少人数・複式学級におけるコミュニケーション力の向上を通して～
分野・課題	【学校学級経営１、学習指導５】
教科等・年次	全教科　「２年計画・１年次」
公開授業１	授業者：Ｔ１　木　村　あゆこ（担任：大滝徳舜瞥学校） Ｔ２　大　谷　真由美（担任：関内小学校） ２年生　道徳　「黄色いベンチ」 ※伊達市立関内小学校２年生との遠隔合同学習
公開授業２ （複式）	授業者：髙　橋　　淳（担任） ３年生　算数　「重さ」 ４年生　算数　「式と計算の順序」
助言者	北海道教育庁胆振教育局　義務教育指導班主任指導主事　中　尾　育　夫　様 北見市立相内小学校　校長　　堀　田　大次郎　氏

第３分科会　白老町立虎杖小学校　校長　関　東　英　政	
研究主題	共に高め合う児童を目指して
副主題	～児童の発達に応じた主体的・協働的な学びを通して～
分野・課題	【学校学級経営１、学習指導５・６】
教科等・年次	全教科「１年計画・１年次」
公開授業１ （複式）	授業者：Ｔ１　小　野　郁　恵（担任：虎杖小学校） Ｔ２　石　井　晴　香（担任：竹浦小学校） ５・６年生　道徳　「千羽鶴」Ａ(2)正直・誠実 ＊白老町立竹浦小学校５・６年生との遠隔合同学習
公開授業２ （複式）	授業者：古　村　瞭　汰（担任） ３年生　国語　「すがたをかえる大豆」 ４年生　国語　「ごんぎつね」
助言者	北海道教育庁胆振教育局　義務教育指導班指導主事　渡　辺　浩　輔　様 留萌市立港北小学校　校長　村　元　隆　一　氏

第４分科会　苫小牧市立樽前小学校　校長　深　松　一　宏	
研究主題	主体的に学び合い、ともに高まろうとする児童の育成
副主題	～リーダー学習の取組を通して～
分野・課題	【学校学級経営１、学習指導６】
教科等・年次	算数　３年次計画・１年次
公開授業１ （複式）	授業者：小保内　知　博（担任） ５年生　算数　「わり算と分数」 ６年生　算数　「円の面積」
公開授業２ （複式）	授業者：奈　良　美　里（担任） ３年生　算数　「かけ算の筆算（１）」 ４年生　算数　「わり算の筆算（２）」
助言者	北海道教育研究所研究部　研究研修主事　佐　藤　昭　彦　様 今金町立種川小学校　校長　黒　川　貴　功　氏

第 71 回

全道へき地複式教育研究大会 胆振大会

Ⅱ　全体会の報告

第２分科会　伊達市立大滝徳舜瞥学校

1　記録写真

2　講　演　会　概　要

■　演題

「新学習指導要領の確実な実施と
へき地複式教育に期待すること」
～未来の創り手となる子供たちの育成を目指して～

■　講師

文部科学省
初等中等教育局教育課程課
教育課程企画室長
石　田　有　記　様

■《はじめに－研究主題に寄せて－》

○昭和34年旧文部省発刊の「へき地教育」（編集協力;北海道教育庁学校教育課指導班)初等中等教育局長

『へき地教育とその振興方策(抄)』より

「教育は、教育者と児童・生徒との精神作用であり、心のふれ合いに基づくのでなければ、真の効果を期待することはできない」「へき地の学校においては、教育の本質的な基盤、人格と人格とのふれ合いという教育活動の基盤を作るという意味において、きわめて好条件にある」

○へき地・複式・小規模校の特性を生かす

キーワード　社会に開かれた教育課程　言語能力　ふるさと教育　主体的・対話的で深い学び　カリマネ　ICT端末　個別最適な学び、協働的な学び

分散会Ⅰ…ふるさと教育　Ⅱ…言語能力　Ⅲ…ICT

■1　教育課程とは何か－学校の役割を考える－

教育基本法－学校教育法－学習指導要領

第１章総則　第２イ「各教科及び各学年相互間の関連を図り、系統的、発展的な指導ができるようにすること。」

総則解説「学校で編成する教育課程については、（略)授業時数との関連において総合的に組織した教育計画である。」

■2「社会に開かれた教育課程」の実現と学習指導要領－豊かな人生を切り拓く、持続可能な社会の創り手の育成－

今向き合わなければならない社会と我が国の状況
産業構造の変化に伴う職業の変化
児童生徒の自己肯定感、社会参画に関する意識

○学習指導要領改訂の背景

子供たちに、情報化やグローバル化など急激な社会変化の中でも、**未来の創り手となるために必要な資質・能力**を確実に備えることのできる学校教育を実現する。

・我が国の学校教育が育む「人間ならではの強み」
・学校教育のよさをさらに進化

小学校学習指導要領　前文　／　全体構造

■3　ふるさと教育とカリキュラム・マネジメント
－経営実践に学ぶ－

○地域の実態を踏まえた上で、教育課程を意義あるものにするために、「教育目標」「教育課程」「教育活動」をつなぐ

■4　言語能力の育成とカリキュラム・マネジメント－高校入試問題を参考に－

○最近の入学者選抜→実生活・実社会との関わり

○PISA2018結果から

「自分の考えを他者に伝わるように根拠を示して説明することに、引き続き課題がある」

・実生活・実社会で生きて働く力の育成（教科等の指導の充実）
・教科等で学んだことを組み合わせて実生活・実社会に生かす（教育課程の充実）

■5　個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実－GIGAスクール構想－

○「真ん中に子供をおいて置きたい」

「複式学級の学習指導」昭和28年旧文部省発刊

○「間接指導の場は、自発的学習を育てるよりよい指導の場である（もしも適切な計画を立てて実施したならば）むしろ学習の本質的な場である。」

「単元内自由進度学習」

■6　へき地複式教育への期待－小規模学校の経営の確立－

○「教育実践（学校)」「学術研究（研究)」「行政施策（行政)」の往還…本大会で一堂に会している

○へき地複式教育の財産を耕す～少子化、小規模校化のパイオニアとして～

3　分散会

分散会Ⅰ　「学校・学級経営部会」

発表者	【釧路管内】浜中町立浜中小学校　教諭　郡山　美帆　様 （サポート）教諭　加茂　利佳　様
助言者	北海道教育庁胆振教育局義務教育指導班　主任指導主事　中尾　育夫　様
司会者	増田　　覚　道へき・複連研究推進委員（十勝）
記録者	河原　和範　道へき・複連研究推進委員（釧路）
運営者	黒川　貴功　道へき・複連研究推進副委員長（檜山）

1．発表概要

（1）提言主題

「自ら学び、心身ともに建康で、感性豊かな子どもの育成」

～夢を求め　人に学び　里に生きる～

（2）提言概要

児童の実態を踏まえ、学校教育目標達成のため、校長が学校経営計画やグランドデザインに「学校経営のキーワード『プラス思考の学校づくり』」と「教育活動を貫くキーワード『あたたか・その気にさせる』」の２つをキーワードとして示している。

そのキーワードに基づき、①「自己有用感」と「主体性」を育むために、一人一人を大切に子どもと豊かに関わる、②失敗体験から学ぶ環境づくりのために、「へこたれない力」を育て、「あたたかな環境」をつくる、③地域の教育力の活用、④特色を生かし、「夢・人・里」を育てる学校づくり、に全教職員・家庭・地域が連携・協働しながら「チーム浜中」として、教育活動に取り組んでいる。

「めざす子どもの姿『夢を求め、人に学び、里に生きる』」の実現に向け、「浜中町へき地複式交流学習」と総合的な学習の時間「夢人里の時間」の充実に重点をおいて、教育活動を展開している。

「浜中町へき地複式交流」の取組は、年３回程度、町内の複式校と交流学習を行っている。令和２・３年度は、オンライン形式で総合的な学習の時間などの学習内容を交流した。令和４年度はコロナの状況を見ながら、集合形式での交流を再開し、集合形式・オンライン形式の良さを生かしながら、小規模校児童の長所を伸ばしつつ可能な限り課題の解消を図ることを目的として取り組んでいる。この取組により、へき地・複式校児童の課題である「コミュニケーション能力」と「主体的に学ぶ姿勢」を育成し、同一学年集団での対話により、思考力や表現力を高め、深い学びを実現している。

総合的な学習の時間を「めざす子どもの姿」と関連付け、「夢・人・里」の時間として、児童に身に付けさせたい力を明確にし、４年間を見通して取り組んでいる。やってみる、やってみてどうだったか、次はどうするかのサイクルを大切にし、子どもたちの主体性を育成している。この取組により、ふるさとの良さを知り、自分ごととして捉え、地域の良さを見付けたり、発信力を高めたりしている。また、ふるさとの良さを生かして自分にできることを考え、実践し、自分たちの生活につなげ、ふるさとの発展に関わろうとする心を育んでいる。

学校経営の方針や方向性について、全教職員での共通理解と共有化を図った取組についての提言であった。

2．研究協議

＜討議の柱＞

〇へき地三特性を生かした地域に根ざした特色ある教育課程の創造と推進

＜グループ協議＞

・探究活動は、総合的な学習の時間で行われることが多く、時間はかかるが、校内の活動だけでなく、地域の人・物・事を結びつけるとともに、地域人材や関係団体外部を利用して、地域の

良さを実感できる教育活動にすると効果がある。
・学びの連続性が保証されなければ、資質・能力としての確かな力を子どもに身に付けることは難しい。学年間や小中連携など、学びの連続性を保証し、資質・能力として確かな力を子どもに身に付けるため、学習活動としてのカリキュラム・マネジメントが必要である。
・教員養成の段階で、教員免許の位置付けがはっきりしていないことが原因かもしれないが、総合的な学習の時間に関して、体験的な活動をデザインする力が身に付いていない。教員養成の段階で身に付けなければ、現場に出てから身に付けるのは難しいのかもしれない。
・オンラインによる授業が取り入れられるようになってきているが、対面することによる実感を伴う学びは、オンラインでは難しい。教育活動の場面やねらいにより、オンラインなのか対面なのか使い分けることが大切である。
・小規模校は、マイナスだけではなく、プラスのことがたくさんあるのではないか。地域の良さを知ることができるし、地域とのつながりを感じることができる。それを大切にし、外部講師の活用や小規模校ならではの訪問体験活動、地域のプロの方から学ぶことにより、地域の良さを知っていく。子どもに住んでいるところの良さに気付かせるには、赴任してきた教師が地域の良さを学び、知ることが大切である。
・小規模校では、集団が変わらないので、何も言わなくても分かる固定化された人間関係になってしまい、自己決定力を付ける機会が少ない。だからこそ、校長の経営方針から子どもにどんな力を付けたいか、どのようにして付けるか、そして、子どもが考える機会でサポートする教員であることが必要である。
・交流学習に関わって、意図的に交流する機会をつくらなければならない。どのような形で、どのような目的で、何を大切にするのかを事前に打ち合わせを行い、はっきりとさせることが大切である。
・小規模校の良さを交流する素晴らしい時間となった。

3　助言者から

組織的に、グランドデザインにある「自己有用感」や「主体性」を育むために、へこたれない力とあたたかな環境をつくる地域の教育力の活用というグランドデザインのキーワードが素晴らしい。複式の学校や小規模校のマイナス面だけをみると、その地域で育っている子どもだけでなく、教育をしている教師もへこたれることがある。「これがない」、「あれがない」、「これがうまくできない」、ではなく、「何ができるか」のアイディアがたくさんある提言だった。「チーム浜中」として、教師が教育活動を進める姿は、へき地・複式校のみならず、すべての学校が目指さなくてはいけない。

総合的な学習の時間の「夢・人・里」の紹介があった。キーワードを基盤として、１・２年生を含め、学年によって焦点を当てながら、全学年を通した取組を、教諭が説明できることが素晴らしい。学校経営や学級経営は、同じものであり、カリキュラム・マネジメントは管理職だけが行うのではなく、すべての先生がカリキュラム・マネジメントの視点をもち、めざす子ども像と重ね合わせた「夢・人・里」の時間を中心に教育活動を組み立てている取組である。

「へき地性」、「小規模性」、「複式形態」のへき地教育の三特性を生かした教育活動をとおして、「個に応じた指導の充実」や「地域資源を生かした体験活動の充実」、「問題解決能力の育成」に取り組むことが大切であり、へき地校だからこそできることがたくさんある。地域のつながりや教職員同士のつながり、子ども同士のつながりが強く、これらのつながりが、へき地・小規模校だからこそできることを広げている。その良さを生かし、さらに、三特性をどのように、効果的に教育活動の中に組み込んでいくかという視点で考えていただきたい。そして、教職員の共通理解と協働的な指導体制の構築など、へき地・小規模校の利点を整理し、生かしてもらいたい。

へき地・小規模の学校においては、その特性を生かしたうえで、地域の実態に応じたカリキュラム・マネジメントを進め、すべての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現に向けて、一人一人の児童生徒が自分の良さや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら、様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓く、持続可能な社会の作り手となることができるよう、資質・能力を育成する令和の日本型教育を実現していただきたい。

分散会Ⅱ　「学習指導①」

発表者	【石狩地区】石狩市立浜益小学校　教諭　吉弘　文人　様
助言者	北海道教育庁胆振教育局義務教育指導班　指導主事　渡辺　浩輔　様
司会者	堀田大次郎　道へき・複連研究推進委員（オホーツク）
記録者	岡山　　拓　道へき・複連研究推進委員（石狩）
運営者	髙橋　郁子　道へき・複連研究推進副委員長（日高）

１．発表概要

（１）研究主題　「新たな学びを創造する思考力・判断力・表現力の育成」

～各教科等の目標を実現するための言語活動の充実を通して～

（２）提言概要

石狩市浜益区は石狩管内の最北に位置している。恵まれた自然環境の中、協力的な保護者、地域に支えられた教育活動を展開している。過疎地ならではの「地域の教育課題」と向き合いながら、未来をたくましく生きる力を育む教育活動を進めている。少人数の学びから一変する高校での学びにおいても、臆せずに自ら考え、意見を交わし、ともに学び合える力を身に付けさせるべく、思考力・判断力・表現力を三位一体で育成することを目指し、主体的に学習に取り組む子どもの育成に向けた研究と教育実践を進めている。

具体的な研究内容を、①教科等のねらい、特性に即した言語活動の充実、②言語活動を通して思考力・判断力・表現力を伸ばす指導過程の確立、③思考力・判断力・表現力を生かすファシリテーション力の育成と整理した。その実現のため、①では「各教科等のねらいを達成する手段としての言語活動」「思考力・判断力・表現力その他の能力を育む言語活動」を、②では、「『まず話す、話し合ってから書く』思考力・判断力・表現力を育む指導課程の確立」「各教科のねらいを達成する１単位時間の言語活動と単元全体の言語活動の設定」を、③では、「思考力・判断力・表現力を生かすために必要なファシリテーション力の育成」「日常の話し合いや、活用するフレーム、コミタイムの実施等、ファシリテーション力育成のための訓練」を具体的な取組とした。

思考力・判断力・表現力を三位一体で育成する原点は「話し合いの中」にあり、その活性化が重要である。「話し合うことが楽しい」となるには話し合うスキルの習得が必要なことから、日常的に話し合い活動を実践している。また、その活性化のカギは教師の発問等にあると考え、話し合いを引き出すための発問等の工夫について研修している。また、自主公開研究会を毎年開催して本校の実践を示し、研究仮説の究明と研究の検証・改善に役立てている。

２．研究協議

＜討議の柱＞　「主体的・対話的で深い学びの視点からの学習指導過程の改善と充実」

（１）グループ協議

○浜益小の取組は、子どもにとってハードルが低い「話すこと」だから、よい切り口だと思う。ボイスレコーダーの活用は発達段階が考慮されたよい実践例。

○「話し合い」を活性化させるためのヒントとして、ファシリテーション力に着目したところがよい。子どもの能力を引き出すチャンスが広がる。

○一単位時間に子どもが何を学習すべきかはっきりしていれば、子どもは意欲的に学習する。その見取りではICTが活躍。全体の可視化により、相互閲覧、相互評価につながる。

○提言発表の「１５歳で独り立ち」という言葉が印象的。過疎地域における教育課題に挑戦する姿が素晴らしい。
○学習課題と日常とがうまく結びつけられるとよい。時々かけ離れているものを見かける。日常との関わりが明確だと、ふり返る意味が出てくる。
○ATR（子どもが厚真町を PR する活動）について、子どもと一緒に単元計画を作成している。ふり返りが自分の活動とつながってくる。ふり返る意義を持たせるのが大切。

（２）全体として

グループ協議では、討議の柱にそって各校の実践紹介や意見交流が活発になされた。若手教師の悩みに複数の参加者で助言する場面もあり、充実した協議となった。

３．助言者から

仮説１について、各教科のねらいを達成することや、個の特性に即した言語活動を充実させるために、子どもたちの経験や既習事項を踏まえた言語活動を実践することにより思考力・判断力・表現力・その他の能力が育まれ、新たな学びを創造する取組について学ばせて頂いた。仮説２について、まず話す活動を積極的に取り入れ、表現することに対する子どもたちの抵抗を減らすことにより、自由に話せるようになることが表現力の原点となる素地を育む取組について学ばせて頂いた。個人思考の前に話すことは「課題を見通す」という意味を持っている。そうすることで抵抗が減り主体的に話せるようになるという効果がある。仮説３について、日常の話し合いや活用するフレームの設定・工夫について発表があった。拡散・可視化・収束と、発達の段階を踏まえて目標を設定したファシリテーション力を育成することにより、子どもたちが、「話し合うことが楽しい、議論することが楽しい」と思えるようにする活動について学ばせて頂いた。私は、この仮説３がとても良いと思う。新学習指導要領では、「学んだことが実生活に生きて働く」そして、「生涯にわたって学び続ける態度を育む」ことが求められている。教科等で学んだことが子どもたちにとって生かされるためには、「学びたい・話したい・交流したい」という前向きな姿勢が大事になってくる。

令和の日本型学校教育において、実現すべき学びの姿として、個別最適な学び、協働的な学びをあげ、それぞれの学びを一体的に充実し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改革に繋げることが求められている。

以上を踏まえて１点目。個別最適な学びについては、指導の個別化、学習の個性化というふたつの視点に分かれる。特にふたつ目の学習の個性化においては、資質・能力を土台として子どもの興味関心に応じ、子ども自身の学習が最適となるように調整することとしている。浜益小の「話すという言語能力を高める指導の工夫」と「話し合いの技としてのファシリテーション力の育成」は、コミュニケーションを図るための資質能力を育成し、実生活において生きて働く力が向上すると大いに期待できる。

２点目は協働的な学びについて。個別最適な学びが孤立した学びに陥らないように、また、集団の中で個が埋没してしまわないように、一人一人のよい点や可能性を活かすことで、異なる考え方が組み合わさり、よい学びを生み出すこととしている。

最後に、共有したい学習指導のポイントは以下の通り。

①児童生徒の実態を踏まえた活動の推進
②指導と評価の一体化…学習課題を児童生徒と教師が共有
③ICT の活用は個別最適化や協働的な学びにおいて必要不可欠

分散会Ⅲ　「学習指導の深化・充実②」

発表者	【空知地区】栗山町立継立小学校	校長　土谷　直樹	様
助言者	北海道教育庁学校教育局　義務教育課主任指導主事	富田　元	様
司会者	伊藤　秀則　道へき・複連研究推進委員（根室）		
記録者	道下　誠　道へき・複連研究推進委員（後志）		
運営者	池田　幸則　道へき・複連研究推進委員（上川）		

１　発表概要

（１）研究主題　「主体的に学び、互いに高め合う子どもの育成」

～ＩＣＴ機器等を活用し、交流することで学びを深める指導の工夫～

（２）提言概要

空知管内の南に位置する栗山町立継立小学校は、全校児童５４名、３・４年生のみが複式学級となっている。そのため、複式教育をメインに研修を行うのではなく、研究主題のサブテーマにＩＣＴ機器等の活用を設定することで、少人数指導に複式教育指導を含めた研修を行っている。

今年度は３年次計画の１年次であり、研究内容については、「コミュニケーション力・人間力等の育成」「教科指導（個に応じた指導）の充実」の２点の両輪で進めている。詳しくは、次のとおりである。

◇ コミュニケーション力・人間力等の育成

①土曜授業の取組（地域人材を活用した授業）

②雨煙別学校と協働した授業

③ふるさとキャリア教育の実施

④他校との合同学習

◇ 教科指導（個に応じた指導）の充実

①指導過程・指導方法の工夫、デジタル教科書・１人１台端末を活用した授業

②デジタルドリルを活用した自主学習

今年度の研究の成果としては、全学級で毎日のICT活用が進んでいて、子どもたちもスムーズに授業で活用できるようになってきていることと、複式学級においてもＩＣＴを有効活用することによって、間接指導時や振り返り時などに高い教育効果を示すことが明らかになってきた。課題としては、タイピングの時間の長さが子どもによって大きく違うこと、今まで行ってきたノート指導との併用をどうするか、情報モラルに関する指導の充実をどのように図っていくか、などが挙げられる。

２　研究協議

＜討議の柱＞　「１人１台端末の効果的な活用など学習効果を高める指導方法の改善と充実」

（１）グループ協議

【Aグループ】

◎ＩＣＴの活用について

・ジャムボードは子ども同士が交流するのに便利で、体育の授業でも活用している。ロイロノートは足跡が残るので、１人学年においても活用しやすい。キーボードは別にあるが、画面

上をタッチした方が早い。

・活用の学級差については、年度初めの全校での取組によって解消している。職員間で、ジャムボードを使って簡単なゲームを行うことによって抵抗を無くした。

・１人１台端末が、町村間や小中間で違っていることが大きな課題である。異動によって端末が変わった場合、一から操作を覚えなければならないこともある。

◎AI ドリルについて

・町村によって契約している業者が違い、中には使い勝手が良くないものもある。

・経費は町村負担となっているが、へき地複式校は少人数のため、金額が少なくて済むことが利点である。

【B グループ】

・１人１台端末については町村によって違いがあるが、中には、学年の発達段階　によって機種を使い分けている場合もある。

・Wi-Fi 環境について、山間部の学校ほど脆弱な傾向にあり、一斉の調べ学習やオンライン学習の際に途切れてしまうことが多い。

・他校とのオンライン学習については、修学旅行の計画・まとめ、姉妹都市との交流などで行っていて、職員同士の打合せでも使っている。また、１人学年の対話的・協働的な学びを保障するためにも活用している。移動しなくても良いことと、お互いの場所を問わないことが最大のメリットである。

・コロナ対応のオンライン学習（ハイブリッド学習）については、特に複式学級での学習は担任１人で対応することが難しいし、オンラインでは子どものつまずきを正しく見取ることができない。また、オンライン学習は、子どもに自力学習の力が備わっていないと難しい。

・ICT スキル体系表については、十分でない学校がまだ多いと思うが、学校として整備して計画的に指導を進めていくことが重要である。

３　助言者から

授業で ICT を円滑に活用するためには、資質・能力の育成や教科指導を充実させることを目的にし、そのために必要な基礎的スキルを指導することが大切である。なお、情報モラル・情報セキュリティーについては、ICT を活用する場面のみの指導ではなく、日常生活の中で発達段階を踏まえて指導していく必要がある。主体的な学びにつなげる授業づくりの視点としては、「児童生徒が選択する場面はあるか（個別最適な学び）」「児童生徒が活動しているか（学習者主体）」がポイントとなる。また、ICT を活用することによって、ノートに書き写す以外の板書の保存方法や、挙手して発言する以外の表現方法も考えられるようになってくる。これらの方法は、授業以外に委員会活動の場面においても有効である。教員自身が日常的に ICT を活用することについては、校内研修で ICT 活用の実践交流を行ったり、ICT スキル体系表を自分たちで作って活用したりしていくことが大切である。また、ICT を活用し、校務の情報化を進めることにより、「業務の軽減と効率化」「教育活動の質の改善」が期待できる。さらに、授業実践等をクラウド上で共有したり、保護者とコミュニケーションの円滑化を図ったりする工夫も考えられる。

第 71 回

全道へき地複式教育研究大会 胆振大会

Ⅲ　分科会会場校の研究および配信方法

第３分科会　白老町立虎杖小学校

第１分科会

【研究主題】

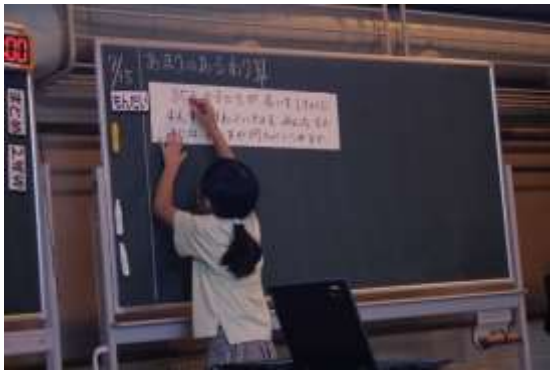
「単式でも複式でも使える「学びの質を高める」学習指導の探求」

～少人数のメリットを活かした学習指導の改善と工夫～

洞爺湖町立とうや小学校

授業の様子

【公開授業１：第３学年】



【公開授業２：第４学年】

第Ⅱ章　研究の概要

1　研究主題

「単式でも複式でも使える「学びの質を高める」学習指導の探求」
～少人数のメリットを活かした学習指導の改善と工夫～

2　研究主題設定の理由

（1）前研究の成果と課題から

①道徳科において、確かな指導観に基づいた一本筋の通った授業の展開を構想することで、本時のねらいに沿った発問やワークシート等の教材を用意でき、ねらいに沿った評価につながるという成果が得らえた。道徳科に限らず他教科にも広げていきたい。

②コロナ禍でしばらく積極的な話し合い活動が行えなかったことから、オンライン対面学習やオンライン児童交流など「対話的で深い学び」に関わる指導の工夫についても考えていきたい。

（2）本校の実情から

本校の児童数は各学年、毎年８名前後を推移している。特別支援対象の児童もいることを考えると、毎年単式学級で推移する可能性は低い。いつ複式学級で授業することとなっても児童・教師とも困り感なく学習を進められるような体制づくりの必要性がある。

（3）社会的背景から

①学びの質を高める学習指導の探求は、学習指導要領で求められている「児童生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」につながる。

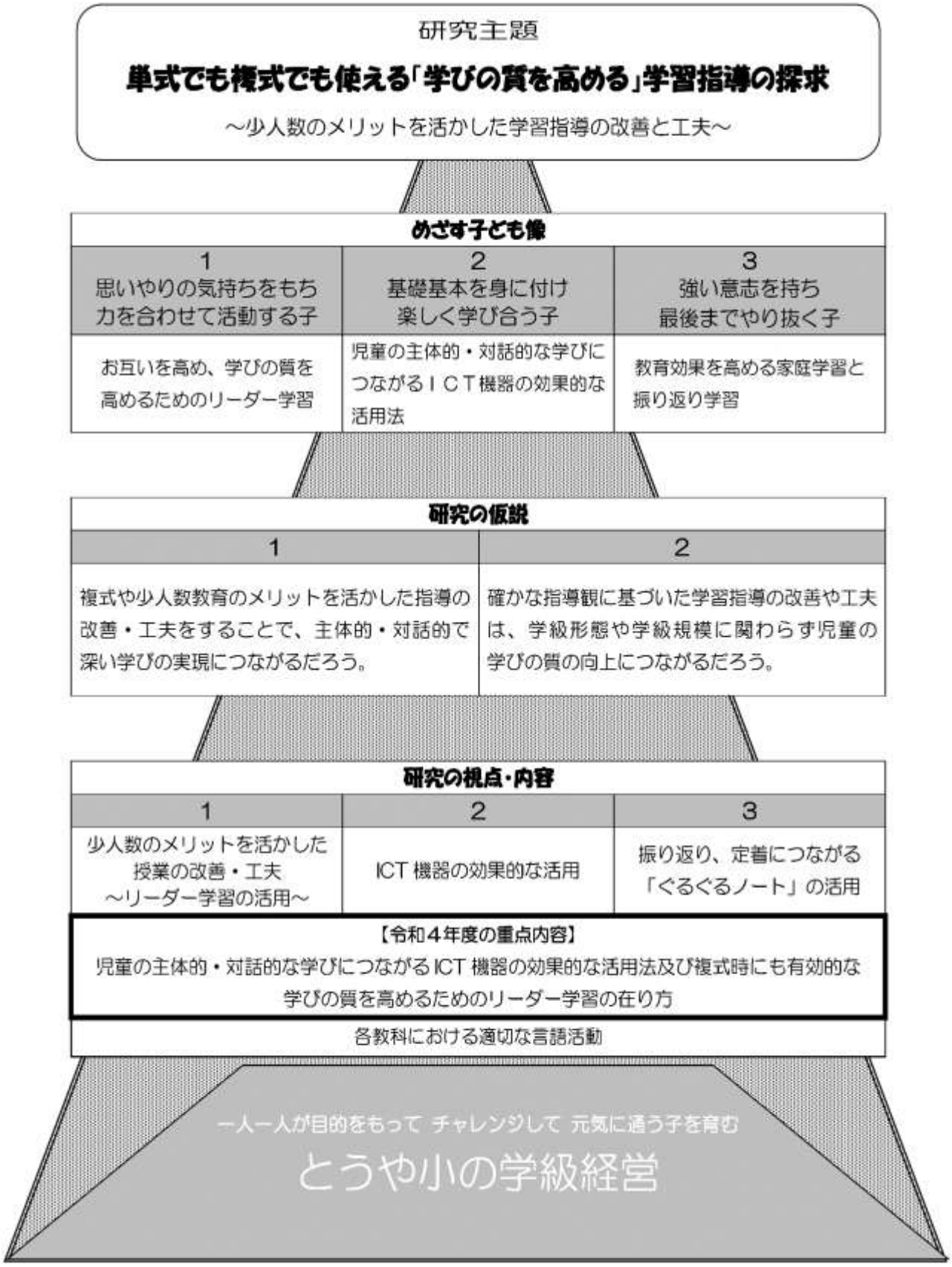
②洞爺湖町ＧＩＧＡスクール構想に基づいたＩＣＴ機器が順次配備されてきていることから、その効果的な活用方法を理解し共有する必要がある。

3　道へき複第１０次長期５か年計画研究推進計画との関連

【分野Ⅰ】　学校・学級経営の深化・充実
〈研究課題１〉『確かな経営理念の確立と、家庭や地域と連携した確かな学びをつくる特色ある教育課程の創造と推進』
○一人一人が目的をもってチャレンジし、元気に通う学校づくり ○洞爺湖有珠ジオパークを活用した学習の推進 ○地元の人材活用や地域に根差した教育活動による人材育成

【分野Ⅱ】　学習指導の深化・充実
〈研究課題６〉『 主体性を育てる学習指導過程の改善と充実』
○リーダー学習・少人数のメリットを活かした授業の改善・工夫 ○児童の主体的・対話的な学びにつながるＩＣＴ機器の効果的な活用 ○教育効果を高める家庭学習と振り返り学習

4　全体構造図


研究主題
単式でも複式でも使える「学びの質を高める」学習指導の探求
～少人数のメリットを活かした学習指導の改善と工夫～
めざす子ども像
1
思いやりの気持ちをもち力を合わせて活動する子
2
基礎基本を身に付け楽しく学び合う子
3
強い意志を持ち最後までやり抜く子
お互いを高め、学びの質を高めるためのリーダー学習
児童の主体的・対話的な学びにつながるＩＣＴ機器の効果的な活用法
教育効果を高める家庭学習と振り返り学習
研究の仮説
1
2
複式や少人数教育のメリットを活かした指導の改善・工夫をすることで、主体的・対話的で深い学びの実現につながるだろう。
確かな指導観に基づいた学習指導の改善や工夫は、学級形態や学級規模に関わらず児童の学びの質の向上につながるだろう。
研究の視点・内容
1
2
3
少人数のメリットを活かした授業の改善・工夫
～リーダー学習の活用～
ICT 機器の効果的な活用
振り返り、定着につながる「ぐるぐるノート」の活用
【令和４年度の重点内容】
児童の主体的・対話的な学びにつながるICT 機器の効果的な活用法及び複式時にも有効的な学びの質を高めるためのリーダー学習の在り方
各教科における適切な言語活動
一人一人が目的をもって チャレンジして 元気に通う子を育む
とうや小の学級経営

5　研究内容

（１）研究期間

３カ年計画（今年度は２年次目）

＜参考＞

令和４年度　町教研指定公開研究会兼へき複研全道大会胆振大会(ファーストステージ)

令和５年度　全道へき地複式研究大会　胆振大会（セカンドステージ）

（２）研究対象教科

算数科

（３）　研究仮説

①確かな指導観に基づいた学習指導の改善や工夫は、学級形態や学級規模に関わらず児童の学びの質の向上につながるだろう。

②複式や少人数教育のメリットを活かした指導の改善・工夫をすることで、主体的・対話的で深い学びの実現につながるだろう。

（４）研究内容

☆授業力・指導力を高め、児童が輝くための３本の矢

１の矢…ICT 機器の効果的な活用（クロームブック、MEET、デジタル教科書…）

①児童の主体的・対話的な学びにつながる ICT 機器の効果的な活用法

・ジャムボードを活用した対話的な学び

（自分の考えを、自由に表現し、学習の軌跡を残すことで、いつでも振り返りができる。）

・個人用デジタル教科書（算数）の活用法

（５，６年のみの導入により今年度は研修では扱わず）

②３年生からのタブレット学習につながる低学年の指導計画

・chromebook 活用に向けた google　application の導入「事例紹介」「実践発表」

２の矢…少人数のメリットを活かした授業の改善・工夫～リーダー学習の活用～

①学びの質を高めるためのリーダー学習

②「学習段階における児童の姿」とリーダー学習と ICT 機器利用との関連

③学習規律の定着と基本的な学びの学習過程の確立（スタ５との関連）

３の矢…振り返り、定着につながる「ぐるぐるノート」の活用

①本校の特色の一つとなっている「ぐるぐるノート」の活用実践例

②教育効果を高める家庭学習と振り返り学習

（５）研究主題と研究内容の関連性について

「単式でも複式でも使える「学びの質を高める」学習指導の探求」

～少人数のメリットを活かした学習指導の改善と工夫～

「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の３つが連動することで学びの質を高めることができます。実社会で役立つ資質・能力の 育成には，「主体的な学び」と「対話的な学び」が，身に付けた知識・技能の活用・発揮につながる「深い学び」に向かうような，確かな学びになっていることが重要です。

◎この３つの柱の中で、児童に期待する具体的な姿を示したものが以下の資料①である。

資料①

＜３つの視点における子供が思考・判断・表現する具体的な姿＞

「主体的な学び」の視点	「対話的な学び」の視点	「深い学び」の視点
･興味や関心を高める ･見通しをもつ ･自分と結び付ける ･粘り強く取り組む ･振り返って次へつなげる	･互いの考えを比較する ･多様な情報を収集する ･思考を表現に置き換える ･多様な手段で説明する ･先哲の考え方を手掛かりとする ･共に考えを創り上げる ･協働して課題解決する	･思考して問い続ける ･知識・技能を習得する ･知識・技能を活用する ･思いや考えと結び付ける ･知識や技能を概念化する ･自分の考えを形成する ･新たなものを創り上げる

（NITS 資質・能力の育成を目指す主体的・対話的で深い学びのイメージ図より）

上記の資料①にある３つの視点における児童に期待する姿を苫米地教諭と吉村教諭が整理した

【「学びの質」の共有に向けて　“学習段階における児童の姿（算数科）”】（提案済み）が、我々の研究を進める上での拠り所となるものである。これが基本！

更に ICT を有効利用できる場面で押さえておきたいのが

【「学びの質」の共有に向けて　“ICT を活用した学習段階における児童の姿（算数科）”】（提案済み）である。ICT を有効利用できる授業では、積極的に取り入れることで児童の学びの質は効果的に高まることが期待される。これが研究内容１の矢である『CT 機器の効果的な活用』である。

更に、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の３つが連動することで学びの質を高めるには、研究内容２の矢である『少人数のメリットを活かした授業の改善・工夫～リーダー学習の活用～』を研究していく必要があると考える。

リーダー学習の活用のねらいは、

①いつ複式学級で授業することとなっても児童・教師とも困り感なく学習を進められるような体制をつくること。
②リーダー学習の効果的な活用によって学びの質を高める。

といったことが本校では挙げられであろう。
　そういった研究を進める中で、授業の狙いに沿った効果的な活動形態やリーダーの役割、そして教師の出番といった【ぶれない指導観】を我々教師が培う必要があるだろう。

（６）研究内容に関わる資料編

★１の矢　ICT の効果的な活用法　に関わる追加資料（基礎・基本編）

資料①

文部科学省『算数・数学科の指導におけるＩＣＴ活用について』より抜粋

小学校算数科における ICT の活用例

◎表やグラフの作成・・・○多量なデータでも、目的に応じていろいろなグラフを一瞬で簡単に作成できる。

◎図形指導の充実　・・・○プログラミングで正多角形をかく。図形を動的に変化させる。
×小学校の段階では、3 次元の立体は、実際に作って体験する方が大切。

◎問題解決の流れの中で
・問 題 提 示・・・○問題を一瞬で配布できる。問題を拡大して見せることができる。
×初めて出会った問題に対しては、一瞬で配布しても多くの子供は理解できない。 演示の実施や絵・図の提示による工夫、一文ずつ丁寧に読み解くことが大切。
・自 力 解 決 時・・・○ノート、ワークシートの代わりに使用できる。教師はワークシートを前もって印刷する必要がなく、子供は何枚も自由に使うことができる。試行錯誤が可能。
×具体物が必要な内容や子供もいる。
・学 び 合 い 時　・・・○一瞬で記述内容が転送できる。一覧表示が可能。対話的な学びの充実。
×記述内容を配布されても、多くの子供はその考えを理解できない。読み解く ことを丁寧にすることが大切。
・まとめ・振り返り・・・○まとめ・振り返りの共有。振り返りの記述の蓄積。

◎学習内容の蓄積・・・○タブレットに書いた内容が蓄積される。ノートであれば何冊も必要となるところ、 タブレット一つで蓄積が可能。
◎個人の状況把握・・・○個人の問題解決の状況を把握できる。
◎知識・技能の伝達・・・○秤などの細かな目盛りを読む、コンパスの回し方などの動きを知る。
（○：ＩＣＴの活用が効果的な場面、　×：ＩＣＴの活用に留意が必要な場面）

★２の矢　少人数のメリットを活かした授業の改善・工夫　～リーダー学習の活用～
に関わる追加資料（基礎・基本編）

◆学習の活動形態についての押さえ

◎全体学習：○全体の意見や反応が確認できます。
△児童が発言しやすい環境づくりが必要になります。
△学習リーダーを育てていく必要があります。
◎グループ学習：○多様な考え方を少人数で検討できます。発言の苦手な児童にとっては全体学習よりも安心して自分の意見を述べやすくなります。
○司会を決めると進めやすいです。
◎ペア学習：○ペアとなる児童とお互いの考えを話し合ったり，学習状況を確認できます。
◎個別学習：○ひとりひとりの状況に応じて，じっくりと取り組むことができます。
△自分の考えが持てない児童生徒には，サポートが必要です。（教師の支援、ICT）

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業を展開するうえで、言語活動やペア学習，グループ学習などを取り入れる場面を整理し，授業進度の見通しを立てましょう。小規模校においても、意図的にペア学習やグループ学習を仕組むことは効果があると考えます。また、当然ですが１単位時間や単元全体の中で「教師が教える場面」をどこに設定するか考えましょう。

６　これまでの成果と課題（本研究主題の１年次目の反省より）

≪研究１年次目の成果と課題より≫

（１）【研究内容１】ICT 機器の効果的な活用

①「児童の主体的な学び」に関わって

◎ICT 端末を活用することにより、鮮明な画像や動画提示による効果的な導入、調べ学習における検索、文字や図形を用いた自分の考えや意見の整理が容易になるとともに、その共有や意見交流などを通して様々な学びを展開することができた。また、児童は、端末の操作方法や多くの機能を活用する力を身に付けることで、自主的に学びを進めたり、新たな事柄にチャレンジしたりしようとする意欲的な姿も見られるようになってきた。

▲学習のまとめを記録していく媒体は、ICT 機器よりもノートの方が良いと思われるが、今後の動向を注視する必要がある。

②「対話的な学び」に関わって

◎これまでの研究や実践を通して、「対話的な学び」の充実に向けて次の ICT 機器や機能が有効であることが分かった。

・Cast を活用した画面共有
・デジタルホワイトボード（Jamboard）の活用
・ファイルの共有
・ビデオ会議（Google Meet）の活用

③「教師の ICT 活用技能向上」に関わって

◎本校教職員による実技研修や ICT 機器の活用に向けた環境整備、ICT 端末の活用を意識した提案授業などを通して、教職員個々の ICT 機器の技能向上につながった。

▲デジタル教科書の効果的な利用法についての研究。

▲低学年児童の ICT 端末の活用について。

（２）【研究内容２】少人数のメリットを活かした授業の改善・工夫

①「自主的な学びにつながるリーダー学習」に関わって

◎手探りながらも全学年でリーダー学習をスタートできたことや、発達段階におけるリーダー学習の在り方を明確にすることができた。その中で、まずは「リーダー学習に慣れる」ことを優先して、２単元以上リーダー学習を取り入れた指導計画を立案し実践することができたことが大きな成果である。

▲リーダー学習が機能しやすい単元の設定。

▲話し合いの深まりを促す有効な手立ての模索。

②「学習ルールの確立や基本的な学びの学習過程の確立」に関わって

◎「よりよく学ぶために」「○○名人」は全学級統一した掲示の効果もあって児童の意識付けができた。これは、ICT 機器の効果的な活用やリーダー学習など研究内容を深めていくときの土台やすべての学習活動の基礎となる取組なので、確実に身に付くように今後も粘り強く指導していきたい。

▲児童に身に付けさせる手立ての交流や実態調査から考えられる手立ての模索。

≪令和４年度の研究２年次目に向けて≫

１年次目の成果と課題を受けて、２年次目は「ICT 端末を効果的に活用した授業づくり」に関する研修を進めていく。この取組に、「リーダー学習」や「学びの質の向上」を関連付けることで、「学びの質を高めるための道具としての ICT 端末の活用の在り方」を探っていくこととなる。

ただ、ICT 端末の活用となると、低学年向けの研究をしていく必要がある。

①第３学年からの円滑な ICT 端末の活用に向けた、第１・２学年の指導計画の改善・充実
②第３学年からの円滑な ICT 端末の活用に向けた、第１・２学年の育てたい資質・能力の明確化
③ICT 端末以外の ICT 機器の効果的な活用（例えば、デジタル教科書を活用したリーダー学習の在り方）
④低学年の ICT 機器の活用（ICT 端末や端末機能の活用も含めて）の在り方

7　指導案

算数科学習指導案

日　時　令和４年９月１５日（木）１校時
児　童　洞爺湖町立とうや小学校
３年生　８名
指導者　教諭　吉村　[illegible]

１．単元名「　あまりのあるわり算　」

２．単元設定の理由

（１）教材について

本単元は、学習指導要領の第３学年の２内容Ａ「数と計算」（４）に示された指導事項のうち、除数と商が共に１位数である「あまりのある除法」の計算を指導するために設定された単元である。

本単元の前（第３学年１学期初め）に「⑫わり算」で、九九を１回適用して求答できるわり算や答えが九九にない簡単なわり算など、いずれもわり切れる場合のわり算の学習をしている。

本単元では、既習のわり算の発展として、わり切れない場合「あまりのあるわり算」の意味やその計算の仕方などについて取り扱い、除法に関わる数学的活動を通して、除法についての知識、技能を身に付けていく内容になっている。

今後、本単元の学習は、第４学年「１けたでわるわり算の筆算」へと発展していく。

（２）児童について

本校の３年生児童は、前年度に九九を概ね習得していきている。１学期に行った「わり算」（あまりのないわり切れるわり算）では、わり算の意味、計算の仕方について学び、九九やかけ算の式を使って答えを出す技能を身に付けている。しかし、個人差があり、九九を間違ってしまう児童や、わり算の計算に時間がかかってしまう児童などもいるため、実態に合わせて、適度な補充問題を行っていったり、その学習のヒントをJamboard上に貼り付けたりしながら、児童の思考が止まらないように工夫していきたい。また、ICT機器や学習リーダー（ペア活動、グループ活動を含む）を上手く利用することでわり算に対する理解度を上げたり考えの交流を活発化させたりしていきたい。

（３）指導に当たって

①単元全体に関わって

本単元で、豊かにしたい数学的な見方・考え方は、わり算の意味についての見方・考え方である。「⑫わり算」では、あまりのないわり切れる場合の等分除と包含除の場面について学習しているが、本単元では、あまりのないわり算からあまりのあるわり算へとわり算の意味を拡張する。このような統合的・発展的な見方・考え方を大切にしていく。そのために、あまりのあるわり算の意味理解を図るための数学的活動を大切にしていき、言葉と操作、図と式を結び付ける双方向の活動を通してわり算の意味理解を確かなものにしていきたい。

②ICT機器の効果的な活用

本単元では、問題文から式を作り、「あまりのあるわり算」の解き方を考えていく活動が主である。そのために、既習事項を活用したり、具体物や半具体物を操作したりして、課題を解決していき、それを九九の活用に結び付けていくことであまりのあるわり算の解法を身に付けていく。その際の操作場面や課題解決時の交流場面においてICT（主にJamboard）を活用していき、ヒントを提示したり、先にできた子の考え方を参考にしたりすることで、自らの考えを確立させ、児童の理解度や達成感を高めていきたい。

③少人数のメリットを活かした授業の改善・工夫

児童はこれまでに、ペア学習やグループ学習、そして全体学習と様々な形態でリーダーを中心にした学習を経験してきている。リーダーが中心となって、学習を進め、それぞれの段階で教師側がしっかりとリーダーや困り感のある子をサポートしてきた。教師が進めるほうが効果的な場面においても、今後、複式形態で学習する際、間接指導時の学習を主体的に進められるように、意図を持って学習形態を仕組んでいる。本単元においても児童が課題意識をもって交流し合い、主体的に学習が進められるように、効果的にリーダー学習やグループ学習を取り入れていく。

３．単元の目標

あまりのあるわり算について、あまりの意味やその計算の仕方を理解し、わる数とあまりの大きさの関係をとらえたり、場面に応じてあまりの処理をしたりできるようにするとともに、生活や学習に活用しようとする態度を養う。

（知識及び技能）
あまりのあるわり算の仕方が分かり、その計算ができる。また、場面に応じて、あまりを的確に処理することができる。

（思考力、判断力、表現力）
わり算の意味に基づいて、あまりのあるわり算の答えの求め方を考えることができる。また、わる数とあまりの大きさの関係をとらえることができる。

（態度）
あまりのあるわり算の問題に進んで取り組もうとする。

４．指導計画（９時間扱い）

時	主な学習活動（★はリーダー学習）	ICT機器の活用	主な評価規準
1	・レディネステスト ・九九を用いて、わり切れるわり算のふりかえり	・わり切れるわり算のフラッシュ計算	【知・技】わり切れるわり算の立式や計算ができる。（観察・レディネステスト・ノート）
2	・１２個のあめを１袋に３個ずつ分ける場面から、元のあめが１３個あった場合の答えを求める活動をもとに、わり切れないときはあまりが出ることを知り、これからこのようなわり切れないわり算について考えていくという課題をつかむ。 ★包含除であまりのあるわり算の解き方を考え、意味を理解する。	・Jamboard上で、あめを袋に入れていく操作から、包含除であまりのあるわり算の意味を考え、発表させる。	【態度】あまりのあるわり算の場面に関心をもち、Jamboard上で図を操作することを通して、答えを求めようとしている（観察・発言） 【知・技】あまりのあるわり算の場面を式に表し、答えを求めることができる。（Jam・ノート・発言）
3	★わり算の意味に着目し、本文中の２人の計算を比べて、あまりはいつもわる数より小さくなることを理解する。	・教師用デジタル教科書を提示し、２人の計算を比べさせて、何が違うのかに着目させる。	【知・技】あまりはいつもわる数より小さくなることを理解している。（ノート）
4	★みかん１６個を３人で同じ数ずつ分けるわり算の問題を提示し、立式を考え、その答えを求め、確かめる。 ・等分除であまりのあるわり算の意味を理解し、適用問題に取り組む。	・Jamboardを用いて、立式、計算、答えを求め、みかんの図を操作することで答えの確かめを行う。	【知・技】あまりのあるわり算の立式や計算ができる。（ノート・Jam）
5	★23÷5の答えをブロック図操作で行う。 ・わり算の意味に着目し、あまりのあるわり算の答えを確かめる。	・Jamboardを使ってブロック操作を行い、元の数になるための操作を考え、発表する。	【態度】あまりのあるわり算の確かめ方を考えようとしている。（観察・発言・Jam） 【知・技】あまりのあるわり算の確かめができる。（ノート）
6	★練習問題に取り組み、答え合わせをしていく。	・答え合わせ時、教師用デジタル教科書を活用する。	【知・技】色々な場合のあまりのあるわり算の演習ができる（発言・ノート）
7 本時	★問題提示後、立式し、わり算の答えを求め、あまりの処理をどうすればよいかという点に着目し、課題を提示する。 ・あまりの意味を考え、あまりを切り上げて処理する方法を理解する。	・Jamboardを用いて、考えを提示し、交流する。また、イメージが付かない子へのヒントを提示する。	【思・判・表】問題文に合わせてあまりを切り上げて処理することを、図や式、言葉で説明することができる。（発言・Jam）
8	★問題提示後、立式し、わり算の答えを求め、あまりの処理をどうすればよいかという点に着目し、課題を提示する。 ・あまりの意味を考え、あまりを切り下げて処理する方法を理解する。	・Jamboardを用いて、考えを提示し、交流する。また、イメージが付かない子へのヒントを提示する。	【思・判・表】問題文に合わせてあまりを切り下げて処理することを、図や式、言葉で説明することができる。（発言・Jam）
9	★練習問題に取り組み、答え合わせをしていく。	・答え合わせ時、教師用デジタル教科書を活用する。	【知・技】あまりのあるわり算を演習し、ふりかえりの自己評価をする。（発言・ノート）

５．本時案

（１）本時の目標

問題場面に合わせてあまりの処理の仕方を考え、あまりを切り上げて処理すればよいわけを考えたり、説明したりしている。（思・判・表）

（２）本時の展開

時	主な学習活動（★リーダー学習）	支援活動（◆ICTの活用）	評価規準
つかむ 5分	３５人の子どもが、長いす１きゃくに４人ずつすわっていきます。みんなすわるには、長いすが何きゃく必要ですか。 ★問題文を読み、大事な数字、聞かれていること、キーワードを確認し長椅子の数を求める問題であることをつかみ、立式する。 【予想される児童の反応】 ・「今までの問題と同じ。」 ・「今までと違ってあまりを聞かれていない。」 ・「式と答えを求められる。」 ★式と答えをノートに書かせる。	・問題提示物を用意する。 ◆デジタル教科書での問題提示。 ◆大事な数字に○聞かれていることに波線、キーワードに線を引く。 ・思考が止まっている児童がいないか確認する。（机間巡視）	

見通す 8分	★式を発表させ、答えが出たかどうかを問う。 ・答えを求め、自分の出した答えでよいかどうか、問題文を確認し、考える。 【予想される児童の反応】 ・「8あまり3です。」 ・「答えは8脚です。」 ・「答えは9脚です。」 ・その他 ★[illegible] Jamboard を用いて35個をくくり、あまりが出ている図を作る。 めあて：あまりをどうすればよいのかを考えて、長いすの数を求めよう。	・児童の答えた式と答えを黒板に書く。 ・今までの問題と違い、あまりを問う言葉がないことに着目させる。 （違いが明確にならない場合は、[illegible]の問題と比較させる。） ・「あまりは」ではなく、「みんなすわるには」になっているのに着目させる。 ・あまりをどうすればよいかという疑問を児童から出させる。 ◆[illegible] ・座れない3人（3つのブロック）に着目させる。	【態度】あまりをどうすればよいかという本時の課題に興味を持っている。（観察・発言）
自力解決 10分	★めあてをみんなで読む。 ★時間を決めて Jamboard に考えを書く。（10分） ★5分経過後、友達の考えやヒントのページを見てもよいことを伝える。	・取り掛かりが遅い児童への支援。 ◆考えがまとまらない子のためのヒントページの準備をする。[illegible] ・5分後、教師による声かけを行う。	【態度】自分なりに課題を解決しようとしている。（観察）
集団解決 13分	★ペア学習でめあてについて考えたことを交流する。 （ミニリーダーの司会） ・全体で交流する。 【予想される児童の反応】 ・みんな座るには長いすがもう一つ必要なので、1たせばよい。 ・3人あるから1たせばよい。 ・答えが9なのでも。 ・その他	・Jamboard を使って2人の考えをお互いに発表し合い、交流する。 ・Jamboard をキャストかける。児童には[illegible] chromebook で見るように指示する。 ・ポイントとなる「みんなすわるには」に着目させ、1ふやすことを指導する。	【思・判・表】あまりを切り上げて処理すればよいわけを考えたり、説明したりしている。（発表・Jamboard）
まとめる 12分	・あまりの処理の仕方を理解する。 まとめ：あまりがある時には、問題に合うように考えて、答えを1ふやす。 ・まとめを読む。 ・まとめをノートに書く。 ・練習問題に取り組む。 [illegible]の問題を通してあまりを切り上げる練習に取り組む。 ★練習問題の答え合わせを行う。 ・今日の学習の振り返りをノートに書く。	・困っている子への支援。（机間巡視） ◆デジタル教科書で問題を投影する。 ・答えを板書し、提示する。 ・次時は別のあまりの処理の仕方について学習することを伝える。	【知・技】場面にあわせて、切り上げて、あまりの処理ができる。

6．本時の評価

問題場面に合わせてあまりの処理の仕方を考え、あまりを切り上げて処理すればよいわけを考えたり、説明したりしていたか。（思・判・表）

7．板書計画

9／15　あまりのあるわり算

問題　35人の子どもが、長いす1きゃくに4人ずつすわっていきます。みんなすわるには、長いすが何きゃく必要ですか。

めあて　あまりをどうすればよいのかを考えて、長いすの数を求めよう。

式　35÷4＝8あまり3　答え　8あまり3

こたえはこのままでいいのか？

「みんなすわるには」あまった子はどうする？

「みんなすわるには」残りの3人すわるにはもう1脚あるとすわれる。

答え　9きゃく

まとめ　あまりがある時には、問題に合うように考えて、答えを1ふやすことがある。

△式　11÷2＝5　あまり1　全部運ぶにはもう1回運ぶから6回　答え　6回

△　52÷8＝6　あまり4　全部読むにはもう一日必要なので7日　答え　7日

算数科学習指導案

日　時　令和4年9月15日（木）2校時
児　童　[illegible]立とうや小学校
4年生　10名
指導者　教諭　[illegible]

1. 単元名「割合」

2. 単元設定の理由

(1)教材について

本単元は、学習指導要領、第4学年の2内容C「変化と関係」(2)に示された、簡単な場合についての割合を指導するために設定されたものである。

児童はこれまでに、第2学年で、倍の意味、比較量を乗法で求めることを学習し、第3学年では、比較量が基準量の何倍かを除法で求めること、及び、基準量を除法で求めることを学習している。

そこで、本単元では、倍を割合という用語を用いてとらえ直すとともに、ある二つの数量の関係と別の二つの数量の関係とを割合で比べることについて学習する。ただし、割合についての学習は、第5学年で小数の乗除を学習して以降が本題となる。第4学年では、割合が2，3，4などの整数で表される簡単な場合を対象として、割合の意味理解を図り、数量関係の比較について考察する。

(2)児童について

[illegible]

(3)指導にあたって

①単元全体にかかわって

[illegible]

②ICT機器の効果的な活用

本単元では、ことば、図、式などを用いて説明させる活動を積極的に取り入れる。その際に、考えを交流する手立てとしてジャムボードを使用する。[illegible]

③少人数のメリットを生かした授業の改善・工夫

児童はこれまでに、[illegible]リーダー学習を行ってきた。[illegible]

3. 単元の目標

2つの数量の関係について、整数の倍で何倍になるかという割合を用いて比較したり割合から数量を求めたりすることを通して、割合の意味とそれを用いる場面について理解するとともに、生活や学習に活用しようとする態度を養う。

＜知識・技能＞

簡単な割合について、ある2つの数量の関係と別の数量の関係とを比べる場合に、割合を用いる場合があることを理解している。

＜思考・判断・表現＞

日常の事象における数量の関係に着目し、2つの数量の関係と割合を用いて比べて考察することができる。

＜主体的に学習に取り組む態度＞

割合を利用して、2つの数量の関係を比較しようとする。

4. 指導計画（5時間扱い）

時	主な学習活動（★はリーダー学習）	ＩＣＴ機器の活用	主な評価規準
1	★関係図を用いて、もとにする量の何倍になっているかを考える。 ・何倍にあたるかを表した数を「割合」ということを知り、ある2つの数量の関係と別の2つの数量の関係とを比べる場合に、割合を用いる場合があることを知る。	・デジタル教科書（問題・関係図・テープ図の提示） ・スライド（問題場面のイメージ） ・ジャムボード（意見交流・全体発表）	【態度】 ・数量の関係を関係図に表して考えようとしている。（観察・ノート） 【知・技】 ・割合について知り、割合を使って数量の関係

			を比較することができる。 （発言・ノート）
2	★割合を図に表して、わからない量を求める。 ・相当かの関係にある2量のうち、「比較量」が分からない場面で、関係図を用いて、その量を求めることができる。	・デジタル教科書（問題・関係図・テープ図等の提示） ・ジャムボード（意見交流・全体発表）	【思・判・表】 ・割合の関係を図に表して考えたり説明したりしている。 （ジャムボード・発言）
3 本時	★割合を図に表して、わからない量を求める。 ・相当かの関係にある2量のうち、「基準量」がわからない場面で、関係図を用いて、その量を求めることができる。	・デジタル教科書（問題・関係図・テープ図の提示） ・ジャムボード（意見交流・全体発表）	【思・判・表】 ・割合の関係を図に表して考えたり説明したりしている。 （ジャムボード・発言）
4	★割合をつなげた図に表して考える。 ・□×a×b＝cの場面で、□を求めるのに、線に考えたり、まとめて考えたりすることができる。	・デジタル教科書（問題・関係図・テープ図の提示） ・ジャムボード（意見交流・全体発表）	【思・判・表】 ・「□のa倍のb倍がc」という数量の関係を、図に表すことを通して、「□の（a×b）倍がc」という関係に気付いている。 （発言・ノート）
5	★相当になるかを考えてから求める。 ・□×a×b＝cの場面で、まとめて考えて□を求めることができる。	・デジタル教科書（問題・関係図・テープ図の提示） ・ジャムボード（意見交流・全体発表）	【思・判・表】 ・「□のa倍のb倍」が「□の（a×b）倍」として考えている。（発言・ノート）

5. 本時案

（1）本時の目標

相当かの関係にある2量のうち、「基準量」がわからない場面で、関係図を用いて、その量を求めることができる。

（2）本時の展開

時	主な学習活動（★はリーダー）	支援活動（◆ICT機器の活用）	評価規準
つかむ 5分	学習） ★問題の把握 Mサイズの重さの2倍がLサイズの重さ600gです。Mサイズの重さは何gですか。 ★問題文から、分かっていること・聞かれていることを整理する。 【予想される児童の反応】 「Mサイズの重さが分からない。」 「Mサイズの重さの2倍がLサイズの重さ」 「Lサイズの重さは300g」	★デジタル教科書で提示。 ◆ジャムボードを開き、問題文の分かっていることと聞かれていることに線を引く。 ・それぞれのイラストを用意し、児童の発言に合わせて分かっていることや聞かれていることを書きこんでいく。 （後の関係図やテープ図をかく際の手がかりとなる。）	
見通す 2分	・どのようにMサイズの重さを求めればよいかを考える。 【予想される児童の反応】 ・「関係図に表す。」 ・「図に表したら求めやすそう」 ・課題の把握 ②割合を関係図に表して、わからない量を求	・線分との違いを確認する。	
自力解決 15分	★問題場面を関係図に表して、Mサイズの重さを求める。	◆ジャムボードに関係図や式・答えを書き込ませる。 ・関係図や言葉の式、テープ図などの問題事項を掲示しておく。 ・図を使ってから式を導くように声をかけ、式の意味を説明できるようにする。 ◆ジャムボードの後ろのページに関係図をかくときのてがかりとなる、言葉の式やテープ図をヒントとして用意する。	
集	★考えたことを、友達と交流	◆ジャムボードを使って、友達と自	【思・判・表】

８　研究協議

【全体協議より】

◎授業者から

・吉村教諭

・キーマン二人　　：支援の仕方

・最後の時間調整　できていない子がいたので次の時間に回しました

・４月からクロムブック使用　～入力の時間などこれからも慣れさせていきたい
　　授業後にシートで定着を見取るのにも活用

・子どもたちの頑張り　～自分の考えを表現しようという気持ち

・福山教諭

・関係図をイメージして書く、式の理由を説明できることが目当て

・１時間分を２時間で実施

・ヒントページ使用せず

・練習問題にもう少し時間をかけたかった

・タブレットは３年生から使用　～４年生になり時間内に書ける、色などを使って考えをまとめられるなどできるようになってきた

・理由などを説明する力がついてきた

・友達のページを交流し、自信をもって発表につなげていた

・リーダーには、今後、臨機応変さを身に付けさせていきたい

◎助言者より

・指導主事　富田　元様

・ICT の基本的なスキルが身に付いていた、少人数のメリットを活かして丁寧な指導

・「数学的活動」　～子ども一人一人が

①問題を見出す場面・・・問題の何が問題なのかを焦点化させる問い返し
見通しを持つ：方法の見通し、答えの見積もりの見通し
→子どもから課題を引き出す問題提示

②自立的・協働的に解決する場面・・・課題の捉え方で活動が変わる
→数学的表現を使用し、考えを一般化させる（数学的表現を使って説明する、考える習慣をつける）工夫、問返し：教師が使い続けることも大切

③問題解決の過程を振り返る場面・・・数学的表現を用いて説明できているか
→どんなことに気を付けたら解くことができたの？～子ども自身が言葉にすることで見方、考え方を意識させるような振り返り

・音更町立東士幌小学校帳　増田　覚様
　・単式・複式のどちらも含めて考えているのが素晴らしい
　・リーダー学習：学習の進め方に子供の成長を感じる
　・学校全体、学級経営の環境が伝わってきた
　・自分の考えを自分の言葉で表現できるように育っている
　・教師が教えたいことを子供の学びたいことにする
　・ジャムボード～子供の脳をアクティブに動かしていく。子供の思考がどんどん出てくる。どんどん活用していきたいツールです

9　成果と課題

【協議の柱】
①ICT の効果的な活用がなされていたか。
②少人数のメリットを活かした課題解決がなされていたか。

3 年生授業協議

成　果

①機器トラブルへの対応・・・共有できるものと個々で操作できるものを用意しておくなど
①入力方法の選択・・・自分が早く表現できる方法が選べる
①ICT の利用・・・直感的に操作できることが理解につながるのでは
①交流することを意識した記入。
①同じ画面を共有できる良さを活かしていた。
①ICT になれている。
①Jamboard では、他の人の考えやヒントのページをいつでも見ることができる。(欲しい情報を取りに行っている)。
①図を一から書かなくていいので、考えを表しやすい。ペア学習に時間を残せる。

②リーダー学習→子どもが前に出ることに意味がある。(担任が後ろにまわって支援したりできていた)
②リーダーを育てることで、複式で担任が離れたときにも学習が進む。
②３年生のリーダーの進行はとてもスムーズだった。
②算数ノートがあることである程度書いてあるから、複式ではとても活用しやすい。
②ICT を取り入れるための時短として取り入れて、結果、時短になり、ICT の活用の方に時間を使えていた。
②日頃からのリーダーの進め方が生きていた。学年の系統性があると、中学校までつないでいける。
②少人数のメリットを生かして、個別指導が必要な子を見つけて声を掛けていた。

課　題

①Jamboard を使い、少人数なので、全員のものを共有したら良かった。

①ICT は視覚化に強いので効果的に使えるとよい。

①Jamboard では、ペア学習の時に書き換えることがあるので、はじめの考えが残らない。自分の考え（Jamboard に書いたもの）をどう物理的に残すか。

【改善点】教科や学習内容によって、残したり再び見たりする必要があるかどうかを教師や児童が判断していく。

①Jamboard を使った交流の後に、友達と自分の考えを比較してどうかという思考までいくといい。

②ペア交流に関わって・・・理解力（または説明する力）の差がある場合、交流の意図はどういうものになるか。

→共感・相違・疑問に着目させる（それぞれの実態に応じて）

→そもそも交流の機会を確保する点も

（授）自分の考えを修正するための気付きを得ることや、発表のための練習の機会

ジャムボードを使うことで、自力解決段階で友達の考えを参考にしやすいが、ヒントページに頼りがちの子供も

②自分と同じような意見であっても、自分の言葉で説明できることは大切

②思考の違いが算数の面白さで、それを活かせるのが ICT だが、最初色々な思考の違いがあった時に ICT を使い揺さぶりかけた方が、本時の課題が児童に落ちたのではないか。

②低位の子にとっては「答え」が今はなんの「答え」を聞かれているのか判断しにくい。

②複式を意識しリーダーに任せることも必要。（教師が）

②今は算数中心にリーダーをしている。今後は他の教科でも広げていく必要がある。（パターンは？）

②リーダーの段階ごとの到達目標を系統的に設定する必要がある。（全員にどこまで求めるのか。低、中、高の発達段階に応じて。台本を読む→自分の言葉で指示を出す）

②今年度から始めたので、これからの成長に期待する。

②複式になってからリーダー学習を始めるのが大変なので、低学年、単式の段階から始めることも大切である。

②リーダーが育つとリーダーが進めることができるが、まとめは担任にしかできないので、その時に、どのようにわたるか。

4年生授業協議

成果

①まっさらの状態よりはある程度用意されているジャムボードを使わせることで表現しやすかったし、説明もしやすかったのではないか。

①ICTにも慣れているので、自由交流でどんどん交流が進んでいた。

①関係図に絞った形でのJamboardの使い方だったので、関係図については理解しやすかった。

②リーダーは進行に慣れていた。

②指導者用デジタル教科書によってポイントを絞って考え方を確認したことで、最後の練習問題や振り返りの時にポイントを意識できていた。

②説明した後に、考えを比較することができるといい。

課題

①子どもたちの考えを画面に写した方が良かったのではないか。画面には問題がずっと写っていた。→視覚優位な子も多いので有効的。

①授業の最後、黒板に先生の書いたものしか残らなかった。(思考の過程が黒板に残っていなかった)

①振り返りを書けなかった子に対して…思考の過程が画面に残っていたら、違っていたのではないか。

①色んな図で考えたい子もいたかもしれないので、速く解けた子に対して、違う図での説明の仕方をさせてみても良かったかもしれない。

①考えを説明することに重点を置くのであれば、「他の問題でもJamboardを使って説明できるか」という方法もある。

他）なぜ３００÷２になるのかという説明ができる子供はどれだけいたか？割り算の反対は掛け算程度の理解が多かったのではないか？
□×２＝３００の式をくぐる必要があったのでは？

（授）まっさらの状態から関係図を作らせて課題解決する機会を設けたかった。
自分で関係図を作って立式して説明できるようになればよいと考える。

・１時間のものを２時間に分け、丁寧に１時間目を行ったため、子どもは本時の内容を理解しやすかった。

共通の成果

①成果が多かった。

①時短やスムーズな進行に役に立っていた。

①意見の交流の場面では、自分の意見に自信がもてない児童にとっては友達の意見を気軽に参考にできる環境はとても良い。

①ICTに慣れている。(特に４年生)

共通の課題

①交流だけに限らず、その他にどんなことに活かせるかを探るのが課題。

①Jamboard の用意など事前準備が少し大変。
①全体で取り上げたい考えを、少人数の子どもの中から見つけ出せるとよかった。
（Jamboard は）考えを消しやすいため、誤答も消してしまう。

【来年度に向けて考えられる研究の方向性について】

・ICT の更なる有効活用に関しての追求
（課題を見出す場面、解決場面、振り返りの場面など）

・授業における集団解決場面で、更に考えを深め、広げる方法についての追求
（児童の誤答を上手く利用する。教師からの効果的な揺さぶりを仕組む。など）

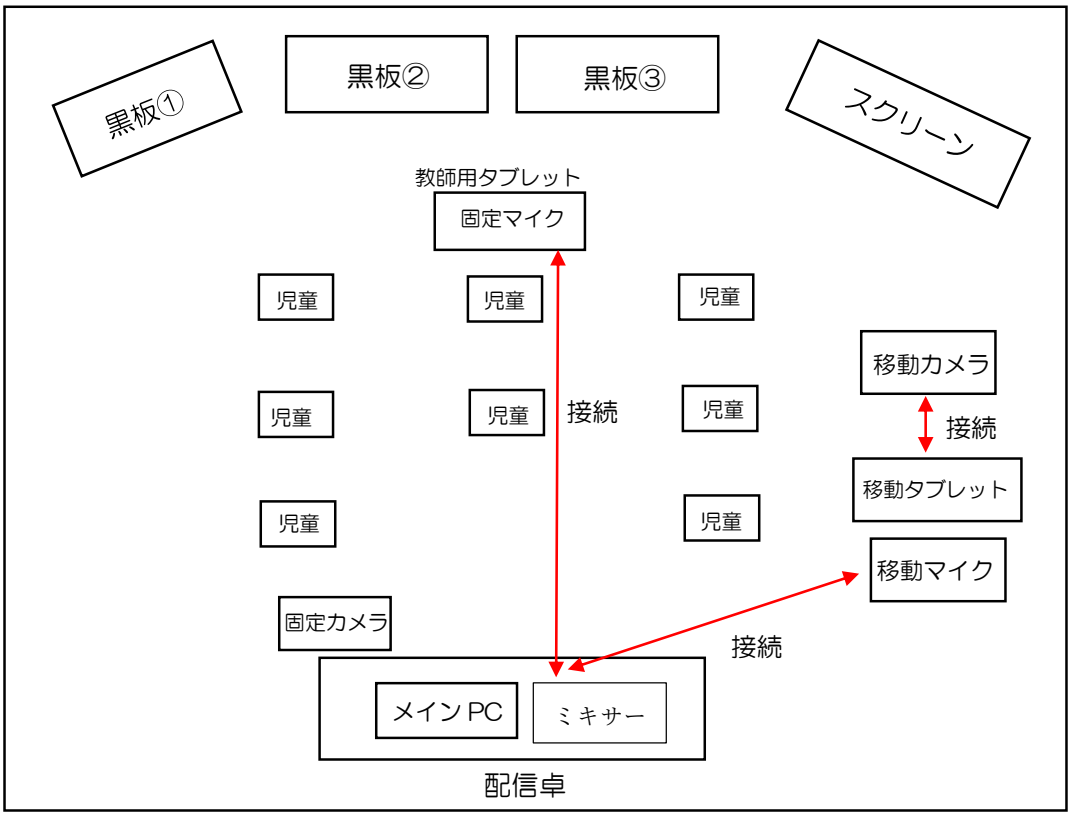
・児童の思考の流れを可視化する板書と ICT の効果的な使い分けについての追求

・リーダー学習の更なる深化と他教科での応用についての追求
（リーダーの段階ごとの到達目標を系統的に設定する必要がある。全員にどこまで求めるのか。低、中、高の発達段階に応じて。台本を読む→自分の言葉で指示を出す。）

令和４年度　洞爺湖町立とうや小学校　配信状況

（１）配信図

【体育館】３・４年生共通（下図は３年生）



（２）詳細（Zoom２画面配信）

① 配信卓

固定ビデオカメラ

キャプチャーボード

メインPC

ライブストリーミングミキサー

デュアルモニタ

・接続状況

【接続①】

メイン PC の USB 端子にキャプチャーボードを接続

【接続②】

キャプチャーボードの HDMI 端子からビデオカメラを接続

（ビデオカメラはミニ HDMI 端子）

【接続③】

メイン PC の USB 端子または C 端子からライブストリーミングミキサーを接続

【接続④】

メイン PC の HDMI 端子からモニターを接続

②メイン PC

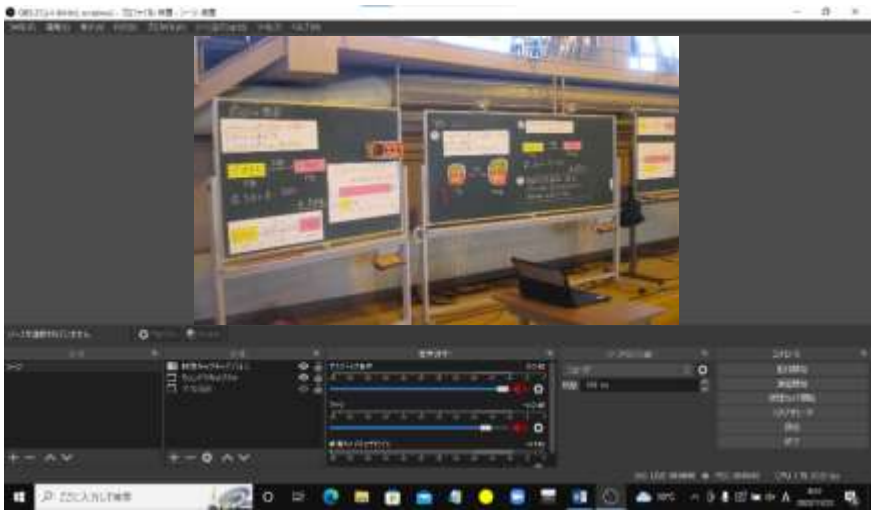
〇使用ソフト

・OBS Studio(オービーエススタジオ)～ストリーミング配信・録画ソフトウェア～

⇒固定カメラ映像と教師用端末映像を切り替えて映すため〇ＢＳを使用

アイコン

メイン画面

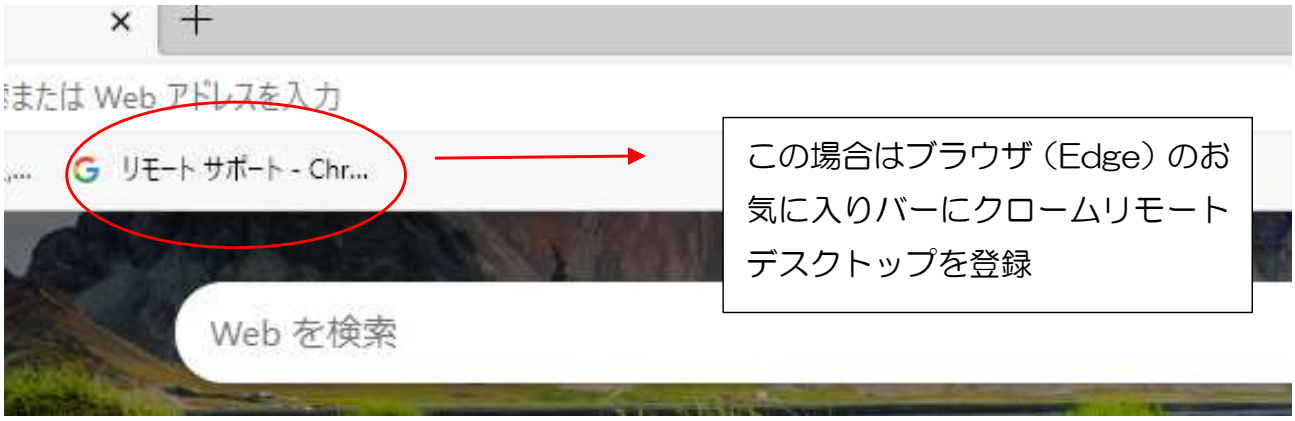


固定カメラ画面映像

（この枠内映像が Zoomの画面に映ります）

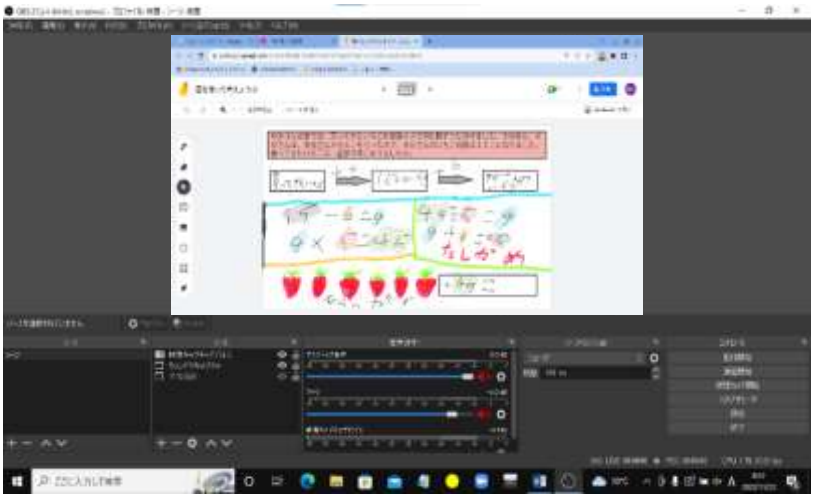
〇教師用タブレットとの画面共有について

・クロームリモートデスクトップを使用



この場合はブラウザ（Edge）のお気に入りバーにクロームリモートデスクトップを登録

クロームリモートデスクトップ起動後、別のパソコンに接続のアクセスコード欄に教師用タブレットでアクセスコードを生成し（後述）、この欄に入力。



OBS の詳しい使用方法は省略しますが、教師用タブレットと共有可能になると教師用タブレットの映像を映し出すことができます。固定カメラ映像と教師用タブレット映像を任意のタイミングで切り替えることが可能。

（ワンタッチ）

③ストリーミングミキサー

・固定マイクと移動マイクを切り替えて使用するためミキサーを使用
　今回は端子①に固定マイク、端子②に移動マイクを接続

④固定マイク（教師と児童の間に設置）

幅広く声を拾うことができる

⑤移動マイク（後方の児童が発表する時などに使用）

AD スタイルで移動

⑥デュアルモニタ

・OBS の画面と Zoom の画面を一台の PC で把握することが難しいため外付けモニタを使用。

⑦移動タブレット及びカメラ

予備のクロームブックを使用。（Zoom 接続時はオーディオ接続 OFF）
クロームブックの USB 端子にキャプチャーボードを接続。
キャプチャーボード(HDMI 端子)とビデオカメラ（ミニ HDMI）を接続。

移動カメラ専用バック（市販バック改造）

ビデオカメラ

クロームブック
収納

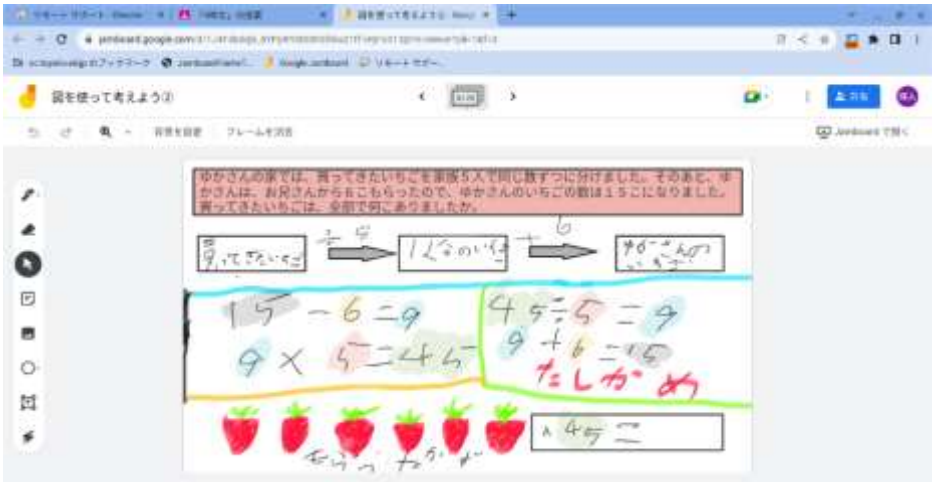
⑧教師用クロームブック

・画面共有について

基本的な操作はメイン PC と同様ですが、コード生成をクリック

コードが生成されたら番号をメイン PC のアクセスコード欄に入力

教師用タブレット端末側で共有を許可すると共有が開始されます



この画面がメイン PC 上にも投影されます

・画面共有時の注意事項

別添資料参照・・へき複研究大会に向けた画面共有について（授業者用）

・運用面での課題

当日の配信時、児童が一斉にタブレットを開いたときに共有が切れる場面や練習時、ふとした時に急に切れる場面があった。再接続で対応した。
現時点で、原因や対処方法は不明。

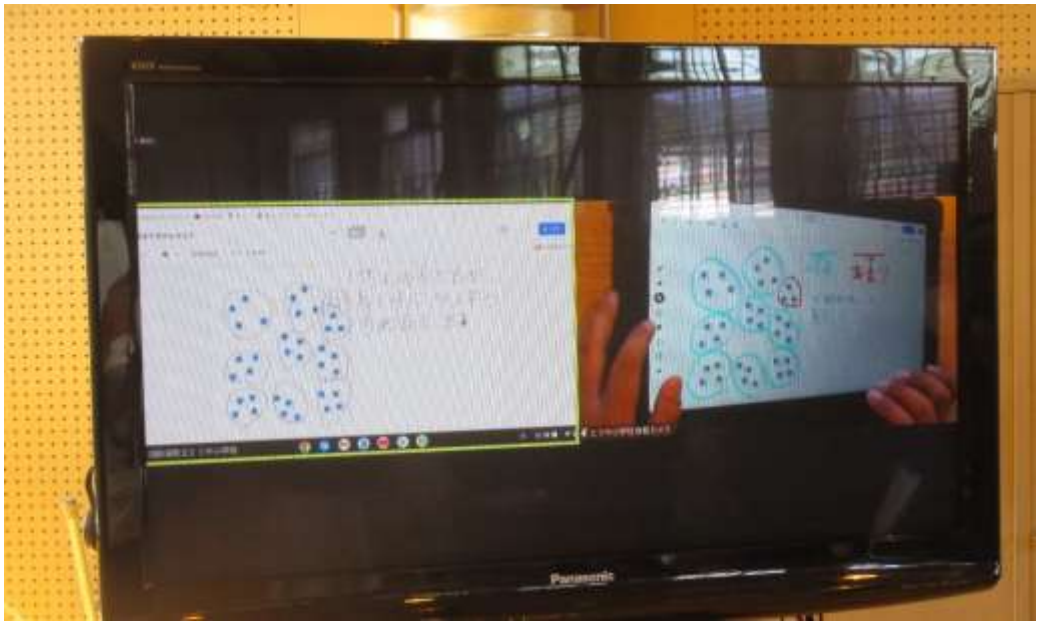
⑨ スクリーン

・当初はテレビ使用を予定していたが、画面が小さいため変更

用途①　授業者用端末の映像をクロームキャストで投影。

用途②　授業者用デジタル教科書の映像を投影。

（3）Zoom 画面



実際の Zoom 画面の様子。左がメイン PC の固定カメラ。右が移動カメラ。
この写真では左のメイン PC は教師用タブレットの共有画面。

（４）配信用機材

機材名	価格	備考
キャプチャーボード Cam Link 4K （メイン PC↔固定ビデオカメラ接続用）	２２,０００円 （令和２年購入）	
キャプチャーボード I-O DATA GV-HUVC/S （移動カメラ用端末↔移動ビデオカメラ接続用）	１９,８００円 （令和３年購入）	
固定マイク Audio-Technica　AT2050 （コンデンサーマイク）	２８,３８０円 （令和４年購入）	
移動マイク Audio-Technica　AT2020 （コンデンサーマイク）	１２,９８０円 （令和４年購入）	
ストリーミングミキサー YAMAHA　AG06　MK2	２７,５００円 （令和４年購入）	

※ビデオカメラ２台は外部マイク端子無しの普通のビデオカメラです。

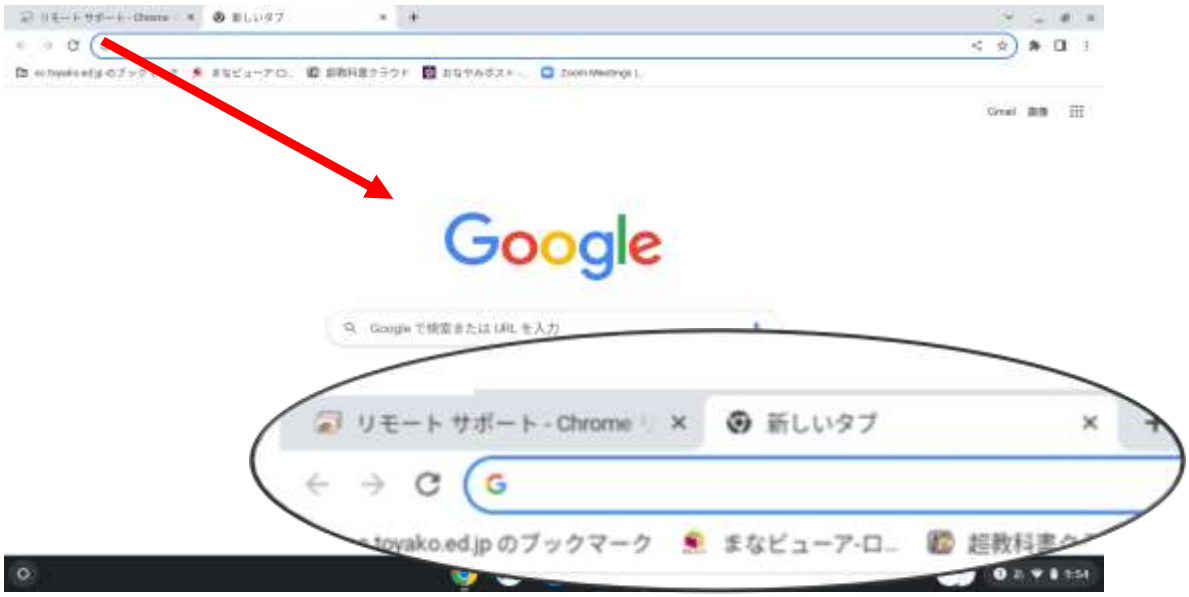
【別添資料】

へき複研究大会に向けた画面共有（クロームリモートデスクトップ）について

・授業者用の Chromebook の画面を Zoom 配信する時の注意点を 2 点あげます。

① リモートデスクトップのウインドウ（タブ）を終了しない。

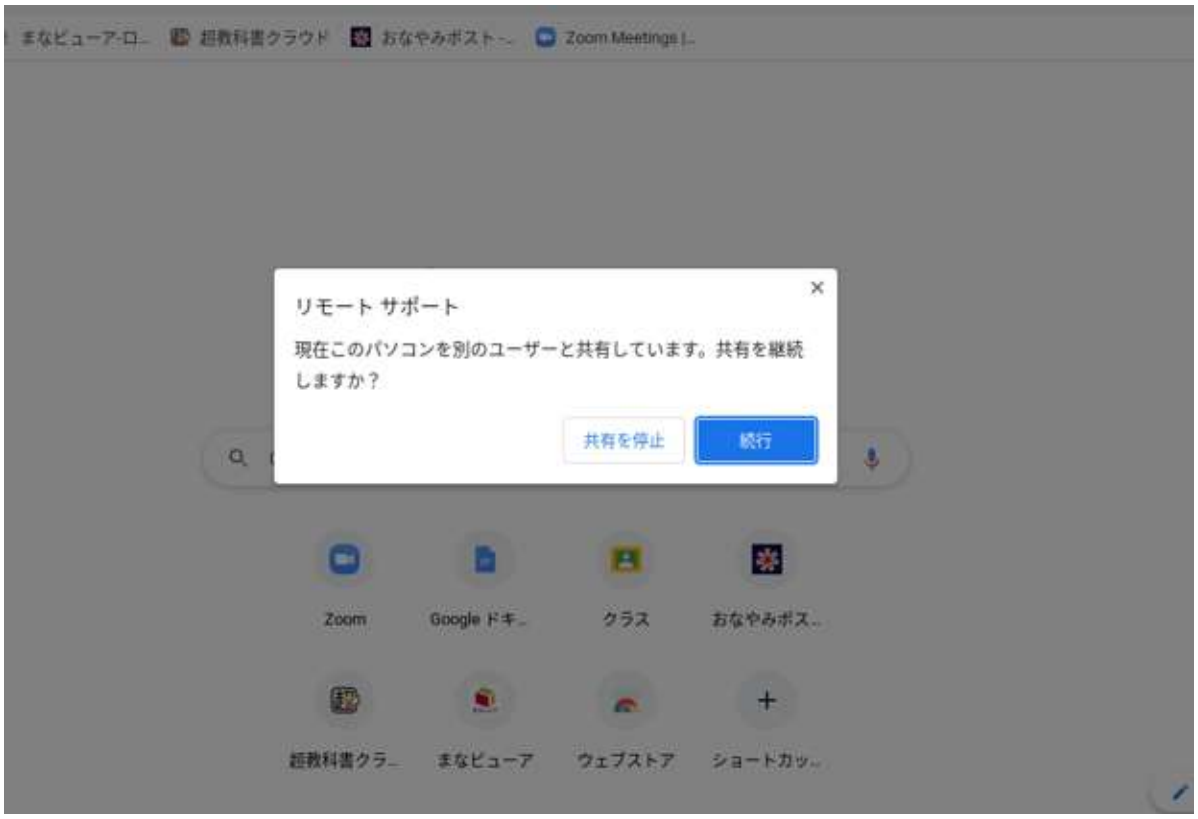
・クロームリモートデスクトップ起動後は新規ウインドウまたは新規タブで授業等をしてください



・リモートデスクトップウインドウの最小化は問題ありませんが、終了しないように注意してください。

② 画面共有の継続の選択

・画面共有後３０分経過すると引き続き継続するか画面が表示されます。



・Chromebook 使用中に上記の画面が表示されたら続行ボタンを押下してください。
Chromebook 端末の近くにいない時に表示が出た場合はこちらで対応します。

第２分科会

【研究主題】

「未来を創る児童生徒の育成」

～少人数・複式学級におけるコミュニケーション力の向上を通して～

伊達市立大滝徳舜瞥学校

授業の様子

【公開授業１：第２学年（関内小学校との遠隔合同授業）】

【公開授業２：第３・４学年】

研究の概要

1 研究主題

「未来を創る児童生徒の育成」
～少人数・複式学級におけるコミュニケーション力の向上を通して～

2 研究主題設定の理由

文部科学省の有識者会議においては、コミュニケーション能力とは「いろいろな価値観や背景をもつ人々による集団において、相互関係を深め、共感しながら、人間関係やチームワークを形成し、正解のない課題や経験したことのない問題について、対話をして情報を共有し、自ら深く考え、相互に考えを伝え、深め合いつつ、合意形成・課題解決する能力」と定義されている。また、話す・聞く・書く・読むといった言語活動のほか、非言語による伝達手段（イメージ、音、身体）も含めた広範な活動に関わるものである。このため、「コミュニケーション能力」の向上には、言語能力のほか、非言語能力の向上も必要である。

本校の教育目標である「たくましく未来を創る児童生徒の育成」を実現するためには、コミュニケーション力の育成が不可欠であると考えた。

児童生徒に行ったアンケートでは、インプットの領域である「読むこと」「聞くこと」に比べ、アウトプットの領域である「話すこと」「書くこと」に苦手意識を感じていること、教師側のアンケートでは、主体性・言語力・発信力といったコミュニケーション力に課題がある児童生徒が多いという実態が分かった。

1～8学年で行っている伊達市学力テスト分析からも「文章書きにおいて、句読点を打つタイミングがつかめていない。」「活用問題等の資料を分析し、自分の考えを作文することが苦手。」「文章を書く問題で無回答が複数あった。」「相手意識をもった『話す・聞く』『書く』『読む』（話し手はどのような意図をもって質問をしているのだろうか、聞き手はどのような情報をもっていてどのようなことを知りたいと思っているのだろうか、どのように説明すれば読み手に説得力があるのだろうか、など）が得意でないため、質問に正対した答えを出すことができない。」「書く力で見られる思考力・判断力・表現力等を身に付けていくことも課題」等、書くことを基にしたコミュニケーション力に課題があるという実態が分かった。

これまでの研修を通して、聞き方や話し方、授業の流れなどの学習スタイルの定着が児童生徒の主体的な学びにつながったという成果がある一方、複式学級での指導や学力差を考慮し学びを深める指導や交流の仕方、発達段階による指示や発問の言葉選び、反応を深める教師の声掛け等の指導力向上の課題、少人数や複式学級での話し合いの深まり、自分の考えとの違いに気付き言語化し伝える等の児童生徒に身に付けさせたい課題が残った。

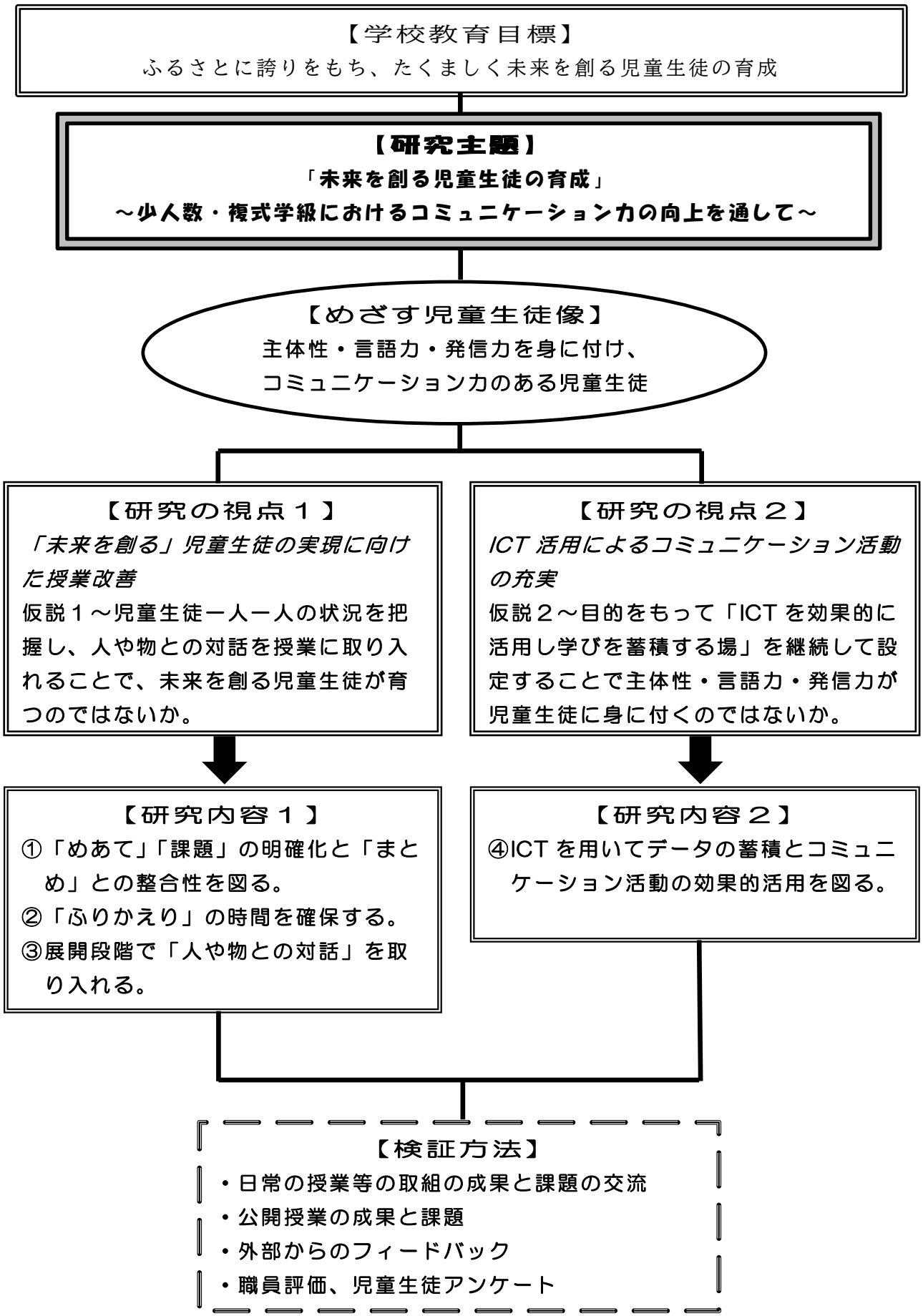
これらのことから、中央教育審議会答申（令和3年1月26日付）に「一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができる」とある資質能力を本校では「未来を創る児童生徒」と定義し、その育成のために少人数・複式学級におけるコミュニケーション力の向上を通して研修をおこなっていきたい。

3 道へき複第 10 次長期5か年計画研究推進計画との関連

Ⅰ「学校・学級経営の深化・充実」
　1 確かな経営理念の確立と、家庭や地域と連携した確かな学びをつくる特色ある教育課程の創造と推進

Ⅱ「学習指導の深化・充実」
　5 学ぶ意欲を高める指導方法の改善と充実

4　全体構造図


【学校教育目標】
ふるさとに誇りをもち、たくましく未来を創る児童生徒の育成
【研究主題】
「未来を創る児童生徒の育成」
～少人数・複式学級におけるコミュニケーション力の向上を通して～
【めざす児童生徒像】
主体性・言語力・発信力を身に付け、
コミュニケーション力のある児童生徒
【研究の視点１】
「未来を創る」児童生徒の実現に向けた授業改善
仮説１～児童生徒一人一人の状況を把握し、人や物との対話を授業に取り入れることで、未来を創る児童生徒が育つのではないか。
【研究の視点２】
ICT 活用によるコミュニケーション活動の充実
仮説２～目的をもって「ICT を効果的に活用し学びを蓄積する場」を継続して設定することで主体性・言語力・発信力が児童生徒に身に付くのではないか。
【研究内容１】
①「めあて」「課題」の明確化と「まとめ」との整合性を図る。
②「ふりかえり」の時間を確保する。
③展開段階で「人や物との対話」を取り入れる。
【研究内容２】
④ICT を用いてデータの蓄積とコミュニケーション活動の効果的活用を図る。
【検証方法】
・日常の授業等の取組の成果と課題の交流
・公開授業の成果と課題
・外部からのフィードバック
・職員評価、児童生徒アンケート

５　研究内容

「児童生徒に主体性・言語力・発信力を身に付けさせることで、コミュニケーション力が向上し、未来を創る児童生徒が育つのではないか。」という基本仮説を立て、今年度がスタートした。仮説にある「主体性・言語力・発信力」のおさえは、

○主体性…自分の意志や判断に基づき、責任を持って行動する態度

○言語力…言語を用いて思考し、その思考した内容を正確に伝える力

○発信力…自分の意見や考えをわかりやすく伝える力

であるが、この３つを児童生徒に身に付けさせたい。

今年度の研修で行うことは、大きく分けて４つである。「①『めあて』『課題』の明確化と『まとめ』との整合性を図る。」「②『ふりかえり』の時間を確保する。」も開校１年目から取り組んできた内容であるが、今年度は、「③展開段階で『人や物との対話』を取り入れる。」を重点１、「④ICT を用いてデータの蓄積とコミュニケーション活動の効果的活用を図る。」を重点２として研究を進めていく。

「研究内容１」「研究内容２」のおさえとしては次のとおりである。

【研究の視点１】

「未来を創る」児童生徒の実現に向けた授業改善

【仮説１】

児童生徒一人一人の状況を把握し、人や物との対話を授業に取り入れることで、未来を創る児童生徒が育つのではないか。

【研究内容１】

①「めあて」「課題」の明確化と「まとめ」との整合性を図る。

②「ふりかえり」の時間を確保する。

③展開段階で「人や物との対話」を取り入れる。

①　「めあて」「課題」の明確化と「まとめ」との整合性を図る。

「めあて(目標)」は、単元の導入段階で児童生徒に示す。単元を通して一つの「めあて(目標)」ということもありえる。単元で何がどのようにできるとよいのか、何が身に付けばよいのかを児童生徒に示すことで、主体的な学習を促す。

「課題」は、本時の導入段階で児童生徒に示す。その時間で何がどのようにできるとよいのか、何が身に付けばよいのかを児童生徒に示すことで、主体的な学習を促す。

「まとめ」は、本時の終末段階で、「課題」に正対する形で児童生徒に示す。児童生徒が本時で学習した内容を言葉などで表現しまとめる。

②「ふりかえり」の時間を確保する。

「ふりかえり」は、定着・今後の活用の見通しを持たせるために、児童生徒にアウトプットさせる。

○「身に付いたこと」「次に頑張りたいこと」「気付いたこと」「疑問に思ったこと」など児童生徒の言葉で記述させる。

○発達段階や教科の特性、単元内容などに合わせ「挙手させる」「記号で書かせる」「学んだことが身に付いているかテストし確認する」などの工夫も考えられる。

③展開段階で「人や物との対話」を取り入れる。

展開の段階で、付箋やホワイトボードなどを使って自分の考えを自身や他の児童生徒が確認する。

「人や物との対話」で考えられる活動

互いの考えを比較する
多様な手段で説明する
多様な情報を収集する
協働して課題解決する
思考を表現に置き換える
共に考えを創り上げる
先哲の考えを手掛かりとする

＜物との対話の例＞
・国語、英語→教材文、図書、新聞
・社会→資料、グラフ、地図
・算数、数学→ブロック、表、グラフ、式
・生活、理科→生き物、資料、グラフ　　など

「対話を通して学びを深める姿」

思考して問い続ける
知識や技能を概念化する
知識・技能を習得する
自分の考えを形成する
知識・技能を活用する
新たなものを創り上げる
人の思いや考えと結び付ける

【研究の視点２】
ICT 活用によるコミュニケーション活動の充実
【仮説２】
目的を持って「ICT を効果的に活用し学びを蓄積する場」を継続して設定することで主体性・言語力・発信力が児童生徒に身に付くのではないか。
【研究内容２】
④ICT を用いてデータの蓄積とコミュニケーション活動の効果的活用を図る。

④ICT を用いてデータの蓄積とコミュニケーション活動の効果的活用を図る。

単位時間での ICT 活用では、導入段階で「前時までの学習データをふりかえり、本時に生かす。」展開段階で「学習データを蓄積し、次時に生かす。」「学習データを修正し、次時に生かす。」など、短いスパンで蓄積したデータを活用することが考えられる。また、「人や物との対話」をする時には、昨年まで蓄積してきたデータを１人学級などで利用し、多様な考えを知るなど、長いスパンで活用することができる。

「ICT 活用の場の設定」
○導入段階　前時までのふりかえり、問題提示
○展開段階　グループや全体での話し合い活動
○終末段階　ふりかえり　　など

ICT を用いたコミュニケーション活動の効果的活用として、昨年度、伊達市立関内小学校の３年生児童と遠隔合同授業に取り組んだ。お互い児童数は少なく、本校児童が２名、関内小学校児童が６名であったが、特別活動における自己紹介や特別の教科道徳における発表など多様な考えを交流することができた。交流の手段としては、映像を通しての発表や Jamboard を共有しての発表などであったが、小規模校ならではの課題でもある多様な考えを交流するために、有効であった。今後も少人数の児童生徒への学びの手段として ICT を活用していく。

今年度は、令和４・５年度における２か年計画の１年目となるが、開校１年目から取り組んできた研究を踏襲しながらの取組となる。今まで培ってきた成果と課題を再確認し、コロナウイルスの関係で変化しつつある現状を見つめ、新たに取り組むべきことを共有しながら全職員で研究を進めていく。

６　これまでの成果と課題

今年度は、これまでに２度の研究授業に取り組んだ。１度目は、年間を通して複数回の実施を計画している今年度の研究副題でもある「少人数・複式学級におけるコミュニケーション力の向上を通して」の取組として、６月に第２学年で遠隔合同授業を行った。第２学年の人数は、男子１名、女子４名の５名（うち特別支援児童１名）である。当日は、伊達市内にある関内小学校との遠隔合同授業を実施したが、関内小学校の参加児童が１名、本校が４名であった。お互い少人数学級である。２度目は、同じく６月に行った第７学年による国語科の授業である。第７学年の人数は、男子１名、女子１名の２名であるが、やはり少人数である。

２度の研究授業のまとめとしては、「人や物との対話」を取り入れたことによって、「協働して課題解決ができていた」「互いの考えを比較できた」また、ICT を活用したことによって、「多様な考えの共有」「データの蓄積」「ふりかえりに有効」などが成果として確認できた。逆に課題として確認できたのは、「ICT 設置における問題点」「展開場面と終末場面の時間配分」などが挙げられた。

成果と課題の詳細については、以下の通りであった。

（第１回研究授業）

○日時：令和４年６月３日（金）　２校時

○児童：大滝徳舜瞥学校　第２学年４名

　　関内小学校　第２学年１名

○教科：特別の教科道徳

○成果と課題

【成果】

・担任がボードに質問事項を書いて、ビデオに映すことにより関内小児童が見やすい。（研究内容２④）

・タブレットの Jamboard に考えを書き込んでいた。共有することによって他の児童の考えを見ることができていた。（発表が苦手な児童も映像に映すことによって考えを共有できた。）（研究内容１③、研究内容２④）

・Jamboard の最初に「考えるためのヒント」を載せていたのでわかりやすかった。（研究内容２④）

・ビデオの前で児童一人一人が、考えを発表していたので、誰が発表しているかわかりやすかった。（研究内容１③、研究内容２④）

・感想発表（ふりかえり）で、一人一人が発表できていた。（研究内容１②）

【課題】

・めあてを板書したりボードを黒板に貼ったりするが、大滝徳舜瞥学校の児童からは、パソコンの陰になって見えづらい。（研究内容１①）

・パソコンを通すと、板書の範囲が狭い。（研究内容２④）

・オンライン機器の操作で、「児童の様子」と「板書」の映像を切り替えるために担当が１人必要であった。（研究内容２④）

（第２回研究授業）
○日時：令和４年６月２７日（月）　５校時
○児童：大滝徳舜瞥学校　第７学年２名
○教科：国語科
○成果と課題
【成果】
・スピーチを動画に残すことで、現段階での能力をデータとして蓄積することができていた。（研究内容２④）
・スピーチを動画に残すことで、ふりかえりの際に自分の話している様子をふりかえることができていた。（研究内容１②③、研究内容２④）
・スピーチのポイントを意識して「指摘」し合えていた。（研究内容１③）
・考察の中で、目的に沿った考察を考えることができる。（研究内容１③）
・「など」が多いために具体的な説明になっていないことに気付くことができた。（研究内容１②③）
・タブレットの活用が、授業内容の蓄積やふりかえりに生かされていた。（研究内容１①②③、研究内容２④）
・Jamboard の活用が、個の活動の保障になっていた。（研究内容２④）
・お互いに気付いた点や自分で気付いた点などを確認することができていた。（研究内容１③）
・自分たちの状況を理解し、パターンを選択していた。（研究内容１①）
・課題とまとめを生徒の言葉でまとめて整合性を図ることができていた。（研究内容１①）

【課題】
・「内容の工夫」か「スピーチの仕方」か、練習の観点が何かわかりづらかった。（研究内容１①）
・構成に２人の統一感がなかったので、工夫よりも構成に焦点を当ててもよかったのではないか。（研究内容１③）
・練り直しの時間がもっとあればよかった。発表から撮影だと客観的に見ることができるが、時間がかかる。（研究内容１③）
・タブレットの再生音が小さく、話し合いしにくいのではないか。（研究内容１③、研究内容２④）
・ふりかえりの時間確保が難しい。ふりかえりの時間を取ると、展開の時間が少なくなる。複式では、ふりかえりの時間で書くことが多くなる。言うのか書くのか、発達段階によって違ってくる。（研究内容１②）
・導入に相手意識の確認が必要だった。（研究内容１①）

7　指導案

道徳科学習指導案

日　時　令和４年９月１５日（木）　１校時
児　童　伊達市立大滝徳舜瞥学校　第２学年
男子０名　女子２名
伊達市立関内小学校　第２学年
男子１名　女子１名
計５名
指導者　（T1）木村　あゆこ（大滝徳舜瞥学校）
（T2）大谷　真由美（関内小学校）

１　教材名
「青色いベンチ」　【内容項目：Ｃ（１０）規則の尊重】

２　主題名
みんなでつかう　ものだから

３　主題設定の理由
（１）児童生徒観
大滝徳舜瞥学校の２年生について、道徳科に関わり、自分の身の回りの生活やそれまでの行いなどを振り返りながら、自分なりの考えをもつ姿が見られる。それを発言や話し合い等様々な手段で表現することついても比較的積極的に取り組んでいる。また、これまでの関内小学校との遠隔授業の中で、「〇〇くん（関内小児童）の得意なことが聞けて嬉しかった」という感想が出るなど、友達の考えを聞いて自分の思いをもとうとする姿勢が感じられる。一方、想像することが必ずしも得意ではなく、スムーズに教材の場面を理解したり自分事として考えを深めたりできるように、授業の流れや発問に配慮や工夫が必要である。
関内小学校の２年生について、指導者の話や発問をよく聞き、集中して考えることができる。自校の友達はもちろん、相手校の友達の意見も大切に聞くことができ、自分の考えと比較する様子も見られる。交流する場面では、緊張してなかなか声に出して発言しにくい場合もあるが、Jamboardに記入する手段であると落ち着いて考えて書くことができるなど、自分にできることを精一杯行おうとしている。
両校の児童にとって、「いつもより多くの友達と勉強できて良かった」と思えるような授業を心がけたい。

（２）教材観
児童が集団の中の一員として生活するために、集団や社会のさまざまな規範を身に付けていくための内容項目である。
集団の一員として生活するにあたっては、みんなが安全かつ安心して生活できるように、一人一人が公共の物を大切に扱う必要がある。しかし、自分の楽しさや利益を優先するあまり、公共の物を正しく扱えなくなってしまうことは、児童に限らず大人にもあり得ることである。
そこで、自分が思うままに行動するのではなく、みんなが気持ちよく安心して生活するために、公共の物や場所を大切に使おうとする実践意欲と態度を育みたい。
普段から、ボールなどの遊び道具やトイレ等、「みんなで使う物を大切にしましょう」という話をさまざまな場面で聞いたことがあるかもしれない。本教材を学習するにあたり、その大切さを自分以外の人との関わりで考えられるよう促していきたい。

（３）指導観
たかしとてつおは近くの公園へ、おもちゃの飛行機を飛ばしに行く。靴のままベンチに上って飛行機を飛ばし始めるが、遊びに夢中でベンチを汚していることに気付いていない。その後ベンチに、女の子とおばあさんが来る。汚れたベンチに腰をかけ、洋服を汚してしまった女の子と、汚れを拭くおばあさんの言葉を聞いて、２人は顔を見合わせた。
身近な場面から、公共の物を使うときに大切なことは何かを考えられる教材である。
少人数という両校の児童にとって、集団生活の中で体験しながらさまざまな規範を学ぶ機会は、もしかすると大きな規模の学校に比べて少ないかもしれない。しかしながら、「みんなが使う物の扱い方」「自分勝手に扱うと、自分以外の人がどう思うか」に触れることは、生活規模の大小に関わらず必要なことと考える。公園のベンチのような身近な場面から、児童自身の経験を踏まえつつ、公共の物を使うときに大切なことは何かを考えさせたい。時には、教材のように「分かってはいるけれど、楽しさを優先してしまう」ことや、「きまりがあることを知らずにやってしまった」という場合もあるかもしれない。そのような人間らしさを共感的に捉えつつ、「そうしたときは、どうしたら良いだろうね」と揺さぶりをかけることができたら、もう一歩深い学びとなるとも思われる。また、普段は互いに異なる学校で生活を送っているが、環境が違っても大切にするべききまりは同じように存在するのだということを、遠隔授業を通して両校児童が感じられる良い機会としたい。

４　ねらい
小学校学習指導要領より、道徳科の内容項目において、今回の教材は「Ｃ　主として集団や社会とのかかわりに関すること　（１０）規則の尊重」と位置付けられており、生活する上で必要な約束や法、きまりの意義を理解し、それらを守るとともに、自他の権利を大切にし、義務を果たすことに関する内容である。第２学年という発達段階を鑑み、「約束やきまりを守り、みんなが使う物を大切にすること」について、約束やきまりはみんなが気持ちよく安心して過ごすためにあることを理解し、守るとどんな良いことがあるかを考えること。そして、自分の身近な場面と結びつけながら、みんなが使う物や場所をどのようなことに気を付けて使うと良いかについて考えを深めることが主として目指すところである。

５　【内容項目：Ｃ（１０）規則の尊重】に関わる指導計画（１・２年生時）

時	主な学習活動（教材名と主題名）	ねらい
１年生時	「どうしてこうなるのかな」 きまりをまもって	学校の中で起こりうる問題を描いた絵を通して、どうしてきまりや約束があるのかについて考えさせ、きまりや約束を守り、みんなが使う場所や物を大切にしようとする実践意欲と態度を育てる。
１年生時	「みんながつかうばしょだから」 みんながつかうばしょでは	きまりを破って校庭でボールを蹴ってしまったしんじ君の姿を通して、みんなで使う場所で気を付けなくてはならないことについて考えさせ、約束やきまりを守り、みんなが気持ちよく安心して過ごせるようにするための判断力を育てる。
２年生時	「どうしてきまりがあるのかな」 きまりをまもって	町の様子が描かれている絵を通して、きまりはどうして守らなければならないかについて考えさせ、きまりをしっかりと守ろうとする実践意欲と態度を育てる。
２年生時 本時	「青色いベンチ」 みんなでつかうものだから	公園のベンチに土足で立って遊んだたかしとてつおが、後からはっとする姿を通して、みんなで使う物を使うときに大切なことは何かについて考えさせ、みんなが使う物を大切にしようとする実践意欲と態度を育てる。

６　研究に関わって
〇「未来を創る」児童生徒の実現に向けた授業改善
児童生徒一人一人の状況を把握し、人や物との対話を授業に取り入れることで、未来を創る児童生徒が育つのではないかという仮説１について、以下のように授業改善を行いたい。
まずは、ねらいに沿って自己を見つめ、自らの考えをもったり深めたりしやすくなるように、話の流れを邪魔しない簡潔な発問や声かけを心がけ、集中して考えられるような時間を設けたり、考えようとしたこと自体を賞賛したりすることを念頭におく。その上で、発問に対し口頭あるいは記述で伝え合っていく際には、互いの考えを聞き合う意識をもち、相手の考えを知る良さや互いの頑張りを認め合うとともに、自分なりの考えを自分の出来うる手段で伝えられたことに喜びを感じられるような声かけを心がけたい。

〇ICT活用によるコミュニケーション活動の充実
目的をもって「ICTを効果的に活用し学びを蓄積する場」を継続して設定することで、主体性・協働力・発信力が児童生徒に身につくのではないかという仮説２について、以下のように取り入れていきたい。
遠隔授業を行うにあたって、お互い離れた場所にいながらしてともに学習するという機会に恵まれ、コロナ禍における新しい学習形態への変革に驚くとともに、へき地校としてはコミュニケーション手段の選択肢が増えたことに大きなメリットを感じている。これまでに４度の遠隔授業を経て、いずれも画面を通して相手校の友達の顔を見ながら挨拶をしたり、道徳における考えや感想を交流したりしてきた。また、ホワイトボードやタブレットのJamboard機能を使い、自分の考えを記入したり、記入したものを互いのタブレットで見せながら伝え合ったりすることができた。本時においても同機能を活用する予定である。
今回は遠隔授業５回目ということで、児童にとって「回数を重ねてタブレットの扱いに慣れてきた」という感覚のその先にある、「ミートやタブレットを使うと、まるで同じ教室にいるように考えを交流できたり共有できたりする」という経験をもって活用することが、主体性・協働力・発信力の高まりに繋がるのではないかと考える。そのために、授業の中でタブレット使用にスムーズに移れるような支援・互いの学校の児童の発言を分かりやすく橋渡しする工夫（音声の聞こえにくさに関わって）など、児童がICTを円滑に活用して学べる環境を整える必要がある。

７　本時の展開

段階	〇主な学習活動	・留意点
つかむ ５分	みんなで使う物には、どんな物があるかを話し合う。 〇みんなが使う物には、どんな物がありますか。また、それを使うときには、どんなルールがありますか。 （見取：大滝） みんなでつかうものを　つかうときに、大切なことは、何でしょう。	・カメラの前で話す。 ・みんなが使う物や、それを使うときのルールについて振り返らせ、教材を自分との関わりで捉えられるようにする。

考える 20分	「青色いベンチ」の原稿を聞く。 （T1,T2が、それぞれの教室で本文を原稿。その間、Meetのマイクをオフにする。） 話の内容を簡単に確認する。 発問① ○たかしとてつおは、どんな気持ちでベンチに上ったのでしょう。 （先発：関内） 発問②中心発問 ○「はっ。」として顔を見合わせたたかしとてつおは、どんなことを考えたでしょう。 （先発：関内）	・イラスト等使い、視覚的に補助する。 ・カメラの前で答える。 ・次にベンチを使う人の迷惑になることに気付けずに、遊びに夢中になっている2人の気持ちを共感的に捉えさせる。 ・カメラの前で答える。 ・自分勝手にベンチを使い、女の子やおばあさんを困らせてしまった2人の後悔や反省の気持ちを想像させる。 ・二人が立っていたベンチに女の子が座ったことで、評価を消してしまったということを共通理解させておく。
深める 15分	発問③ ○学校で、みんなが使う物を使うとき、どんなことに気を付ければよいでしょう。 Jamboardに書いたことを交流する。 （先発：大塚）	・Jamboardに記入。（タッチペン） ・身近な公共物の使い方について考えさせる。難しい場合は、具体的な物を挙げ、その使い方について考えさせるという方法もある。 ・カメラを通して発表する。聞き手は、Jamboardを見ながら聞く。
		・学校が違っても、公共物を扱うときに大切にするべききまりは、同じようにあるのだなと感じられるようにする。 ・公共物の使い方に気を付けると、どんな良いことがあるかなど、肯定的な考え方につながる声かけをする。
ふりかえる 5分	今日の学習の感想を発表する。 接続終了後、各校で「学びの記録」に記入する。	・カメラの前で発表する。

算数科学習指導案

8　研究協議

（１）授業者から

【２年生】

木村　あゆこ　教諭（大滝徳舜瞥学校）

・関内小学校との遠隔授業を通して、いつもより多くの友達の考えを聞けた、顔を見ながら声を聞けたということが子ども達の笑顔となって現れていた。
・子ども達は、当初、画面を通して対話ができることは、不思議な感じだと思っていた様子。
・画面を見ながら会話をしたり、ジャムボードで互いの考えを交流したりするなど子ども達は、進歩している。
・道徳の授業としては、子ども達の思考を遮らないような指示や発問の出し方に努め、自由に考えたり表現したりしてもらいたいと思っている。
・遠隔授業を通して、関内小学校の児童に見られた成長も素晴らしかった。

大谷　真由美　教諭（関内小学校）

・男子は、新しいことに対して緊張する性格のため、当初、乗り気ではなかった。女子は、休みがちである。
・徐々に慣れてきて、話をできるようになるなど、成長が見られた。
・ジャムボードの扱いにも慣れてきたが、他の子の画面にいたずらするようなことも出てきた。
・途中で音声が乱れるなど、遠隔授業における問題点などをこの後の協議の中で話し合ってほしい。

【３・４年生】

高橋　淳　教諭（大滝徳舜瞥学校）

・３年生も４年生もまとめまで行かず、見通しが甘かった。

（３年生）

・３年生の指導案検討の時に盛りだくさんだということで、多少削った。
・３年生の指導案で違ったところは、実際に使っている文房具の方がいいかと思い変更した。興味を持ってもらうことはできた。
・課題をつかんで実際に比べていくときには、長さよりも水のかさを思い出させる方が分かりやすいと思ったが、時間がかかってしまったので、進め方には、強引さが出てしまった。
・任意単位ということで、１円玉を使用せず、個数を変えたかったので、色々な物を用意した。結果的に個数が違うことが確認され、重さが違うからだという事につながるようにした。
・次時は、スクールタクトを使いながら想起させていく。

（４年生）

・４年生は、時間を余すのではないかと予想していたが、スタートの準備問題で苦労していた。計算問題は、しっかりできていたが、文章題に時間がかかった。

・準備問題ができていれば、課題にスムーズに入れたのではないかと思ったが、結果的に課題を押さえさせることができなかった。
・タブレットに書かせたが、何を書いてよいのかしっかりつかめていなかったので、時間がかかってしまった。
・２つ目の問題では、悩むだろうと予想していたが、やはり時間がかかっていた。
・本時の目標が達成されていないので、評価もできなかった。
・ふりかえりでは、何が分からなかったのか、どこが難しかったのかを子ども達に確認させたかったので、書いてもらった。
・研究主題のコミュニケーションの部分では、書いたものを隣同士で交流するという時間が欲しかったが、残念ながら時間がなかった。

（２）協議内容

協議の柱１　「『未来を創る』児童生徒の実現に向けた授業改善」について ☆展開段階での「人や物との対話」について

Ａグループ（２年生授業中心）
（成果）
・遠隔ではあるが、うなづいたり拍手をしたり温かい雰囲気であった。
・他校との違いを感じることによって、お互いの刺激になっていた。
・最初は緊張気味であったが、次第に慣れて話せるようになってきて子どもの成長を感じられた。
・遠隔授業の今後の未来が見えた。
（課題）
・画面越しということでたくさんの声が聞こえず、一人ずつしか聞こえない。
・生にはかなわない。
・お互いの話し合いがもっとあればよいのではないか。
・うなづきなどのアクションについて、２校で統一したルール作りがあると良い。
（改善策）
・学校内で話し合ったことを伝え合う。
・デジタルとアナログのバランスを今後考えながら活用していく。

Ｂグループ（２年生授業中心）
（成果）
・聞いているからこそ自分の考えを話すことができていた。
・多様な考えに触れる機会や場になっていた。
（課題）
・教師が端末を見て話す時間が長かった。
（改善策）
・目と目を見て話をする時間を確保する。立ち位置を工夫する。
・発表が不安な子もいるようなので、話している子ども達へのうなづきや挙手ボタンの使用などリアクションをすると対話につながる。

Ｃグループ（３・４年生授業中心）
（成果）
・具体物を使っての操作が良かった。不便さを実感できるのが、導入としてこれからの学習に結びつく。
・間接指導の学びの仕方が身に付いている。
（課題）
・重さを比べる方法が、前時までの学習に結び付けられるとよかった。
・児童間の交流をもてるとよかった。
（改善策）
・間接指導時に学習リーダーが進める。
・学習の流れを示して、型を作って進める。
・個人ではなく、共同で作業すると対話が生まれ、色々な考えが出たのではないか。時間短縮にもつながる。

協議の柱２　「ＩＣＴ活用によるコミュニケーション活動の充実」について
☆ＩＣＴを用いたデータの蓄積とコミュニケーション活動の効果的作用について

Ａグループ（２年生授業中心）
（成果）
・遠隔の準備でそれほど時間がかからなかったので、今後も時間をかけずにできる範囲で活用していく。
（課題）
・低学年では、発達段階を考慮して、ICT なのかノートなのかなど、どのような手段で入力することが良いのか教師側で目的をはっきりさせながら対応していくとよい。
・音声の途切れなどあったので、生には勝てない。
・ジャムボードのルールの徹底を行うこと。
・T1、T2 の偏りが出てしまう。
（改善策）
・実物投影機とのバランスを考えた活用を考える。
・発達段階に合わせたタブレットの打ち込み方法を考える。
・例えば、片方の教師が１年生、もう片方の教師が２年生の授業をすることで、複式の解消につながるのではないか。

Ｂグループ（２年生授業中心）
（成果）
・違った地域でつながっても、また、違う考えが出てくると思うので、今後遠隔授業としての可能性がある。
・ジャムボードについては、色々な使い方ができるので、活用の仕方についての有効性が導ける。

（課題）
・低学年は、書くことが難しい。
（改善策）
・発達段階や実態を踏まえつつ書く活動を加えて活用していく。
・個に応じた使い方として、実態を把握し、使えるものはフル活用してコミュニケーションをとる工夫をする。

Ｃグループ（３・４年生授業中心）
（成果）
・スクールタクトの活用。それぞれ入力したものが比べられる。
（課題）
・文字や記号の入力の仕方が分からなかった時の対応。
・端末とノートを目的、利点によって使い分けるべき。
・市町村によって使用機材が異なるので、異動時にまた学ぶ必要がある。
（改善策）
・写真の共有は、タブレットを活用しやすい。
・ジャムボードの活用で、共有しやすい。
・ワークシートを取り込むこともできる。

（３）参観者の声
オンラインも含めたアンケート結果からの抜粋
１．公開授業について
○遠隔の音声の調子が良くなくて残念でした。今日は、いつもより関内の子どもたちが頑張れたと思います。何度も練習したこと、木村先生の温かい声掛けがあってのこと、感謝してます。
○２年生の道徳の授業では、関内小との遠隔合同の学習により、少人数の学校でも協働的な学びの充実を図る先進的な取組で大変勉強になりました。３・４年生の算数では、ICT を活用した間接指導の充実やわたりやずらし、見通しとふりかえりも含めた１時間の授業等複式授業の素晴らしい指導を見せていただきました。
○ICT が活用され、子ども達もその使用に慣れていることに驚きました。手書きしたものが共有できるのは､ローマ字打ちに不慣れな低学年児童にも有効だと感じました｡また、データの蓄積により、評価にも使えるのではと感じました。今後、ICT を活用して、子ども同士が説明したり、見せ合ったり、疑問を投げかけ合ったりできるとよいと思いました。
○遠隔での道徳など、時代に合った新しい取組にチャレンジしていることに頭が下がります。本当にお疲れさまでした。
○他校とつないでの遠隔合同授業等、へき地、小規模校の課題解決の糸口となる授業を参観させていただくことができ、参考になりました。
○ICT の様々な使い方や遠隔授業のやり方などを学ぶことができました。
○どちらの授業も見ていて面白かったです。２年生の授業では、音声が途切れ途切れの中

でもしっかりフォローをしつつ、時間通り終えられていたことがすごかったです。３・４年生では、時間内では終わらなかったものの、子どもを焦らせずに進めていたことが良かったです。
○２学年、３・４学年２つの授業を見ることができ、良かったです。日頃なかなか複式の授業は見られないので貴重な時間でした。
○関内小２年２人では、なかなか深まらないので、特に道徳は少しでも多人数で学んだほうが良いと思います。遠隔合同は、意義があると思いました。

２．研究内容について
○ピクトグラム見やすかったです。
○義務教育９年間を見通した教育活動の充実について、研究の軌跡も含めて大変参考になる内容でした。コミュニケーション力の育成について複式の授業の中での取組や ICT の活用、未来を創る児童生徒の育成についてとても分かりやすい提言発表で、自校の実践にもぜひ取り入れていきたいと思いました。
○９か年を意識した教育活動、研究されていると感じました。児童生徒の実態を丁寧に分析されていて、職員間で共有が図られているのだなと思いました。授業デザイン（紀要18）を活かした授業研究が、授業で何を学ばせ、どんな姿を目指すのかがわかりやすいと感じました。１つの授業内で、もう少し絞れると教師の狙いがはっきり（明確化）するのではないかと感じました。
○わかりやすかったです。本校に持ち帰って研修に生かしていきたいです。アウトプットする力は、小規模校の課題ですよね。
○子どもの実態に合った研究となっており、大変勉強になりました。
○「社会に出た後に乗り越える力」本当に大切ですよね。日常の授業や生活で何気なくやっていることが、これにつながっているんですが、意識することが大切。いい研究主題だと思いました。
○時代に合った研究の視点で、取組や工夫を互いに学ぶ機会となりました。
○小規模校にてコミュニケーション力を高めることは、なかなか難しいと日々感じます。そのような中「言語力」に焦点をあてて研究を進めていることが素晴らしいと思いました。（言葉で表現することが苦手な子が多いので）

３．その他（大会運営全般含む）
○少ない人数で大変だったと思います。本当にお疲れさまでした。お弁当おいしかったです。（キノコ汁も）
○会場校、大会運営に関わる皆様、本大会の開催大変お疲れさまでした。ありがとうございました。
○紀要や授業づくりなどお疲れさまでした。管内だけでは学べない、地域性や学校力の違いに気付く貴重な体験となりました。また、研究協議では、明るくざっくばらんに話される先生方に元気を頂きました。他校、他管内の私でも話しやすい雰囲気でとても楽しかったです。ありがとうございました。１１/２９に NIE 地区セミナーを本校で開催します。Zoom 配信となります。（宣伝でした）

○たくさん学ばせていただきました。研究討議で色々交流できたのもありがたかったです。討議はどちらの授業の話し合いをするのか、できれば事前に知りたかったです。計画的に付箋書きます。
○お弁当、きのこ汁とてもおいしかったです。ありがとうございました。
○グループ分けのところに、A・Bは２年生、C・Dは複式と見やすいところに書いておくとわかりやすいですね。授業や大会準備お疲れさまでした。
○基本は２日通しての参加と考えていたのですが、なぜ、開閉会式が２回ずつあるのかわかりませんでした。子どもたちに主体性を求める今、我々の研修の進め方や在り方を考える必要がある時期だと様々な場面で感じています。現場の先生が、もっと参加しやすくなるには・・。と考えました。地域もりあげ隊の温かさにも感謝申し上げます。
○お疲れさまでした。

（４）助言者より
【北海道教育庁胆振教育局　義務教育指導班主任指導主事　中尾育夫　様】
《授業の振り返り》
（仮説１に関して）
・２年生の授業では、ジャムボードを使って見える化していた。道徳科のねらいで大切な多面的、多角的という面で、人や物との対話が実現されていた。
・３・４年生の授業では、単元に対する子ども達の気持ちがすごく高まった。緊張して対話できなかったこともあったが、そういう場面を設定することが大切。
（仮説２に関して）
・主体性と対話は切り離せない。
・２年生の授業では、今までの遠隔授業の積み重ねが生きていた。話せなかった子が話せるようになったなど、子どもの成長が見られた。児童の考えや交流の場面で、ICT を活用していたが、その場を設定することが大事。
・３年生は、自分での学びを進めていく場面だったが、最後に教師が比較をし、全員が見ることができるようにタブレットに落とし込み、それが記録として次の時間に生かされる。データの蓄積である。蓄積されたデータをどう活用していくかは、今後研究を深めてほしい。
・４年生は、スクールタクトを使って自分の考えをまとめる時間を設定していた。今後交流に生かしていけるような時間を教師が設定していってほしい。
《今後研究を深めてほしい点》
（協議の柱１に関して）
・「人や物との対話」で大切なことは、考える時間を保障すること。子ども達が頭を働かせている瞬間を教師が見取ってほしい。これが「人や物との対話」を伸ばす第一歩である。
（協議の柱２に関して）
・データの蓄積は、無限にできるが、整理するのは人間である。ICT を活用して何を子ども達に身に付けさせたいかを明確にする必要がある。
・「情報活用能力」というキーワードを各学校において、どのようにとらえて、どのように育成していくかということを明確に組織的に進めていくことが大切。

【道へき研究推進委員　北見市立相内小学校　堀田大次郎　校長】
・「学校・学級経営の深化・充実」という分野では、充実した教育環境で子ども達は育っている。
・「学習指導の深化・充実」という分野では、遠隔授業における ICT の活用など学校間交流に役立っている。へき地・複式の現状をクリアしていくには、良いツールになっていく。
・ICT の活用は、ツールであって、子ども達の学びにどう効果的につなげていくかが大事。次年度に向けて、より一層効果的に活用できればと思う。
（研究内容の視点１に関して）
・個別最適な学び、協働的な学びを実現するためになくてはならない視点である。子ども達の状況を把握して、対応できていた。
・指導案にピクトグラムを使用しているが、視覚的に見やすいので続けてほしい。
・子ども達同士で対話する場面があっても良かったのではないか。
・「『めあて』、『課題』の明確化と『まとめ』との整合性」について、ゴールが明確であったり模造紙などで可視化したりすることが良いのではないか。
・「ふりかえり」について、できればその時間内にできればよいが、時間がない時には、家でもできる。
・「物との対話」については、イメージしにくい部分もあるが、物との対話がどう効果的だったか共有できると良い。
（研究内容の視点２に関して）
・自治体によって端末が違うが、教員間で情報を共有し、必要な物を自治体にアピールできると良いのではないか。
・ICT の活用をいかに子ども達の学びにつなげるかが大事であるが、教師の負担にならないようにと思っている。普段から子ども達に触れさせたり、教師間の情報を共有するなどが考えられる。

９　成果と課題

《視点1》「未来を創る」児童生徒の実現に向けた授業改善
☆展開段階で「人や物との対話」を取り入れる
【成果】
○「めあて」「課題」の提示により、児童生徒が身に付けるべき学習内容を明確化させることができた。
○「ふりかえり」の時間に、適用問題に取り組んだり、学習について感じたことを発表したりすることで、学習内容の定着や今後の活用の見通しを持たせることができた。
○他校との遠隔授業は、児童が多様な考えに触れることができる一つの方法として有効であり、自分の考えを形成し表現することもできていた。
○ジャムボードを使ってそれぞれの考えを共有することで、多様な考えを知ることができていた。

【課題】
○「ふりかえり」の時間の確保が難しい場面があったため、授業改善を通して時間を生み出せるよう

にしていく必要がある。
○多様な考えに触れたり共有したりする場面を持つことはできたが、話し合いのような考えを深めていく場面を設定できなかった。自分と人の思いや考えを結びつけることで学びを深めることができるようにしていく必要がある。

《視点2》ICT 活用によるコミュニケーション活動の充実
☆ICT を用いてデータの蓄積とコミュニケーション活動の効果的活用を図る
【成果】
○クラスルームを用いた遠隔授業やジャムボードの活用を行い、コミュニケーション活動における効果的な活用を図ることができた。
○スクールタクトやジャムボードの活用により、お互いの考えを比較する場面を取り入れることで、書くことを基にしたコミュニケーション活動の充実の一助となった。

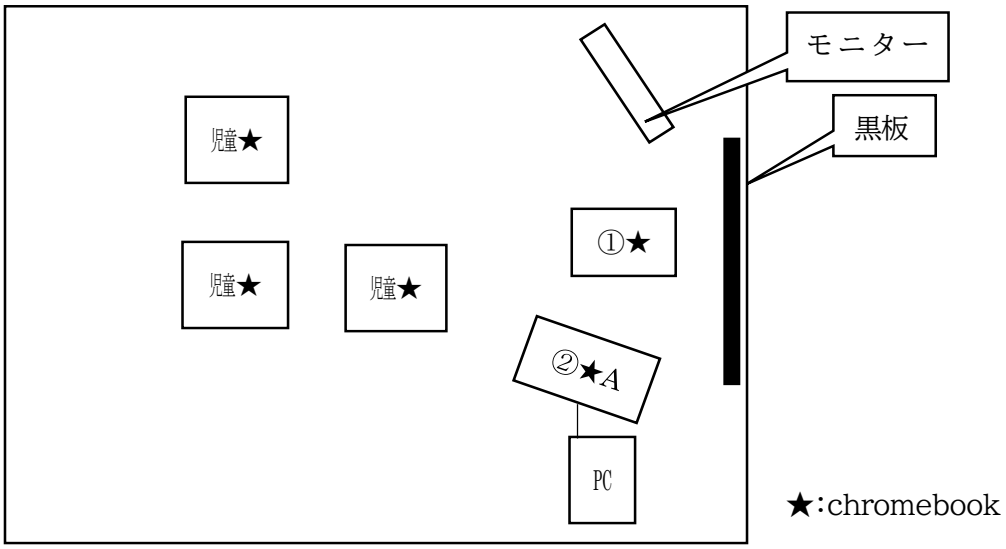
【課題】
○データの蓄積と活用については、どのような方法で行い活用するのかを明確にしていく必要がある。
○ICT の活用場面を選定し、児童生徒により効果的に活用できるようにしていく必要がある。
○遠隔授業では、ICT トラブルが起こらないような工夫が必要である。
○端末とノートを目的や利点によってどのように使い分けるか考慮する必要がある。
○ICT 使用時において、文字や記号の入力の仕方が分からない場合の対応やルールの徹底を行う必要がある。

伊達市立大滝徳舜瞥学校　配信状況

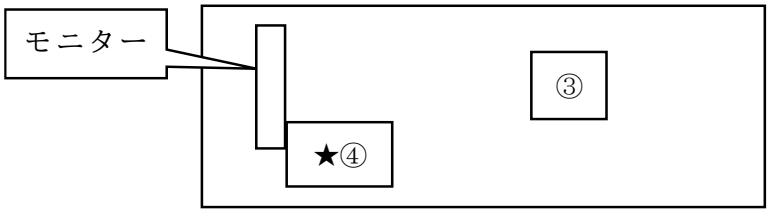
1　2年生道徳授業(関内小との遠隔授業)

(1)配信図

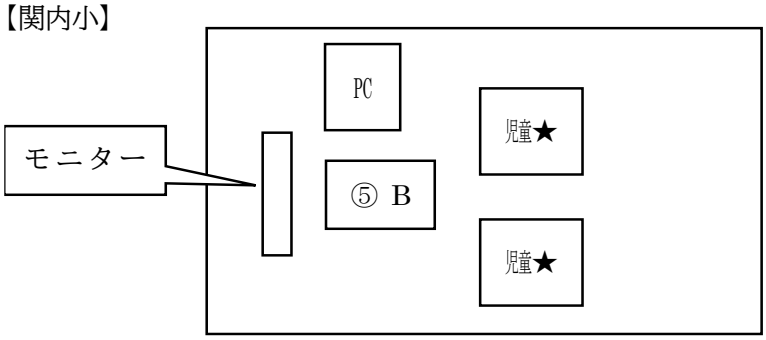
【教室】



【別室】

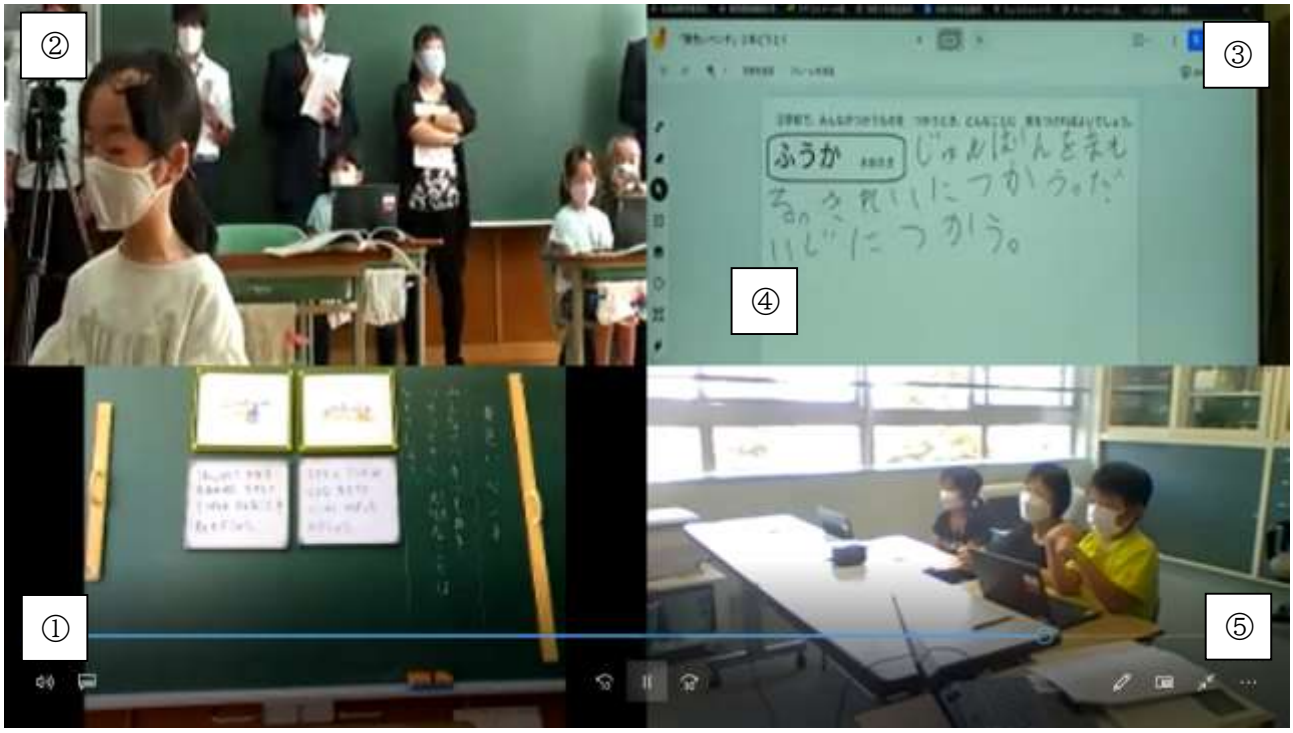


【関内小】



(2)授業配信内容・機材

記号	撮影内容	機材
①	板書	GoPro＋chromebook＋キャプチャーボード＋マイクロケーブル(GoPtro 用)＋GoPro ミニ三脚
②	大滝徳舜瞥　発表児童及び全体	PC(zoom ホスト)＋chromebook＋キャプチャーボード＋HDMI ケーブル
③	発問内容や児童 5 名(関内 2 名、大滝 3 名)の chromebook 上のジャムボード書き込みを映し出したモニター	Chromebook＋キャプチャーボード＋ビデオカメラ＋chromecast＋HDMI ケーブル(ビデオカメラ用)
④		Chromebook(児童 jamboard モニターへ送信用)＋chromecast
⑤	関内小児童の様子	キャプチャーボード＋ビデオカメラ＋三脚



(3)遠隔授業・機材

記号	撮影内容	機材
A	大滝徳舜瞥　発表児童及び全体 関内小モニター映し出し用	PC＋ビデオカメラ＋キャプチャーボード＋三脚＋chromecast
B	関内小　発表児童及び全体 大滝徳舜瞥モニター映し出し用	PC(zoom ホスト)＋chromebook＋キャプチャーボード

(4)配信方法および状況

・ZOOM で配信する。PC がホスト、タブレットはゲストとなる。4 画面配信。

・ホスト(会場者)が4つの画面をスポットライトで強制固定することで、クライアント(参観者)には4つの画面が表示され、必要なものをダブルクリックすることで拡大可能。但し、4つの音声が同時に配信のため、聞きづらい状況が発生する可能性がある。

・タブレットのスピーカーを切ることで、ハウリングを回避する。

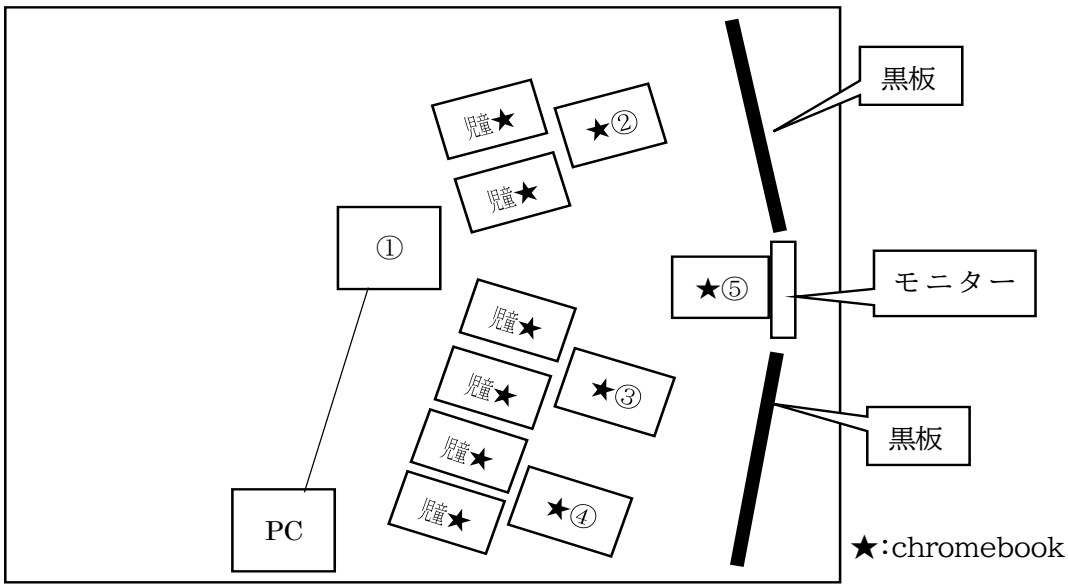
・カメラをキャプチャーボードにつなぎ、PC と接続する。

・オペレーターは、教室 PC 確認(不具合時対応)1 名、教室カメラ操作(授業者や黒板ズーム等)1 名、別室でカメラ操作および jamboard 画面切替 1 名で合計 3 名が担当する。

2　3･4年生算数科授業

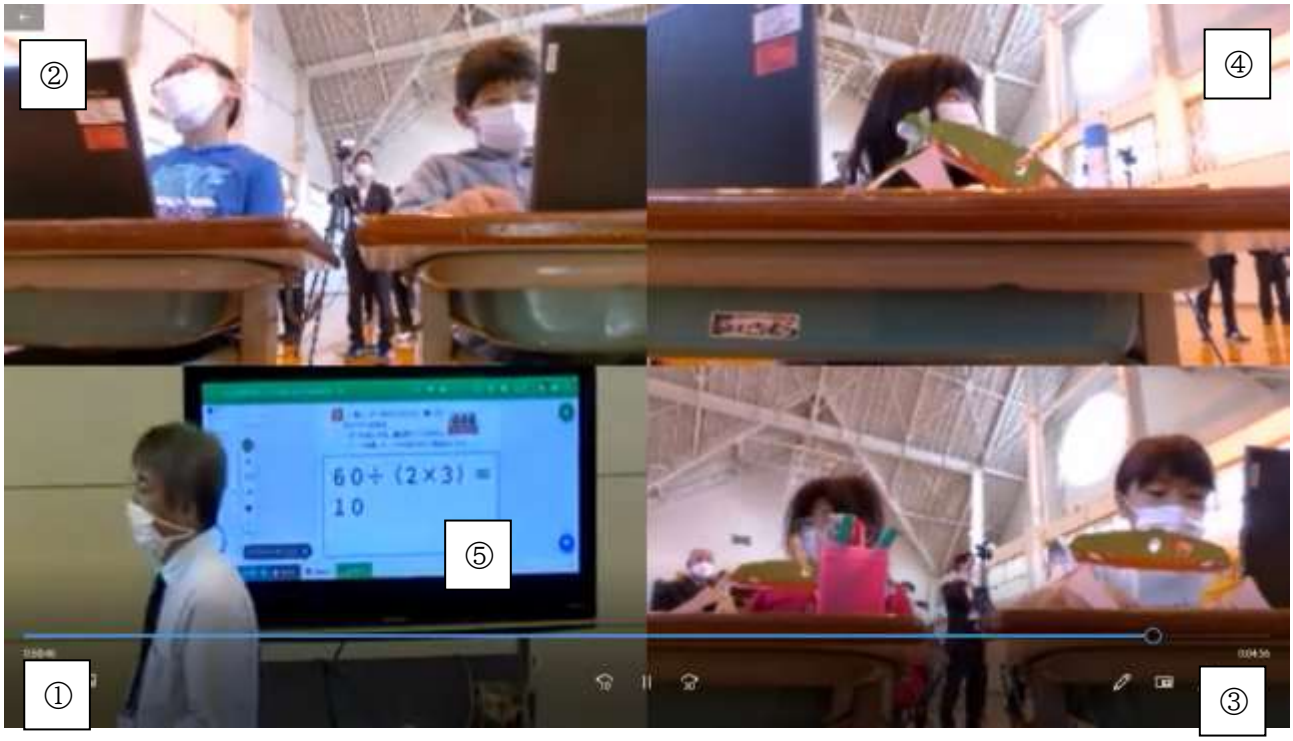
(1)配信図

【体育館】



(2)授業配信内容･機材

記号	撮影内容	機材
①	板書やモニター	PC(zoom ホスト)＋ビデオカメラ＋キャプチャーボード＋HDMI ケーブル(ビデオカメラ用)＋三脚＋ピンマイク受信機
②	4年生児童	Chromebook
③	3年生児童	Chromebook
④	3年生児童	Chromebook
担任 ⑤		ピンマイク発信機 Chromebook(児童 jamboard モニターへ送信用)＋chromecast



（3）配信方法

・ZOOM で配信する。PC がホスト、タブレットはゲストとなる。4 画面配信。

・児童の前にタブレットを設置し、様子や声を拾う。

・マイク受信機をカメラと接続、授業者がマイク発信機を装着、授業者の音声は常に発信される。

・ホスト（会場者）が4つの画面をスポットライトで強制固定することで、クライアント（参観者）には4つの画面が表示され、必要なものをダブルクリックすることで拡大可能。但し、4つの音声が同時に配信のため、聞きづらい状況が発生する可能性がある。

・タブレットのスピーカーを切ることで、ハウリングを回避する。

・オペレーターは、PC 確認（不具合時対応）1名、カメラ操作（授業者や黒板ズーム等）1名で合計2名が担当する。

第３分科会

【研究主題】

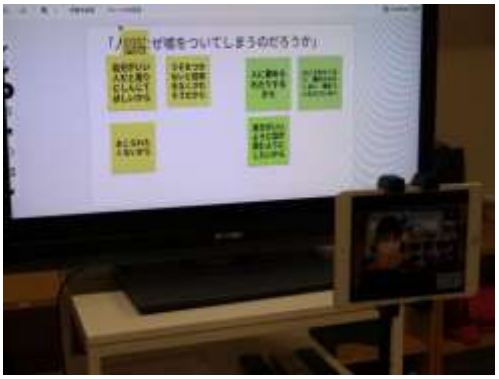
「共に高め合う児童を目指して」

～児童の発達に応じた主体的・協働的な学びを通して～

白老町立虎杖小学校

授業の様子

【公開授業１：第５・６学年（竹浦小学校との遠隔合同授業）】



【公開授業２：第３・４学年（同時間接授業）】

研究の概要

1　研究主題

共に高め合う児童を目指して
～児童の発達に応じた主体的・協働的な学びを通して～

2　研究主題設定の理由

本校は昨年度まで「自ら考え学ぶ子を目指して」を掲げ、国語科に始まり全教科・領域において、「児童に学ぶ見通しをもたせること」「指導事項の明確化」を中心に授業改善を行ってきた。具体的には、児童が「単元計画」や「一単位時間」の学ぶ見通しをもち、単元や授業の「ゴール」を提示し、児童自身が授業を通して何を学んだら良いのかを理解することで、児童が主体となった授業展開を目指し、取り組んできた。

これらの実践により、児童自身が「単元」「一単位時間」に対し、課題解決意識をもって学習に臨む姿が多く見られるようになった。また教師側も、児童に身に付けさせたい力が明確となり、指導事項の軸から外れることなく、学習内容の焦点化・スリム化を図ることができた。

その一方で、実践に取り組んでいく中で課題も多く見られた。特に「話す・聞く・書く」コミュニケーション能力やグループ・学級全体で課題解決に向けた対話を重ねたり、試行錯誤を繰り返したりするなど、仲間と共に協働的に学習を進めていく力の乏しさが課題としてあげられる。そこには、支援が必要な児童に対しての指導方法の在り方に課題があることも関係している。知識・技能を確実に習得できていないことで、意欲的に学び合いに参加することができない児童が見受けられるのが現状である。

これらのことから、本校が目指す児童の姿の実現に向けて、「知識・技能の確実な習得」「知識・技能を活用して課題を解決する力の育成」を目指す学習指導過程の工夫・改善に努めるとともに、自己の考え方に基づいた主体的・協働的に学ぶ学習活動を通して「個の学びを広げ・深める」ことを実感できる授業を目指し、授業改善を続けることが不可欠であると考え、この主題を設定した。

3　道へき複第10次長期５か年計画研究推進計画との関連

Ⅰ「学校・学級経営の深化・充実」の１

<u>児童生徒一人一人の個性や能力を生かし、多様な体験を重視した教育活動の充実</u>

◎学校間交流：竹浦小学校との遠隔合同授業、幼小連携事業、白翔中学校区連携
○地域素材・人材の活用：地域人材を講師とした放課後補習（寺子屋虎杖浜）
鮭の放流、採卵体験
○伝統や文化に関する教育：全校ウポポイ見学、越後踊りの体験、ふるさと学習

Ⅱ「学習指導の深化・充実」の５

<u>学習効果を高める個別化・集団化などの指導方法の改善と充実</u>

◎学習リーダー：リーダーガイドを用いた授業づくり
○個別化、集団化：４段階学びの中で、「一人学び」「グループ学び」の実施
○ノート指導：学びガイドによる全校で発達段階に応じたノート指導
○学習習慣と学習規律：家庭学習の充実、学びガイドを基にした、全校で統一した学習規律の徹底
○合同学習、集団学習、交流学習：竹浦小学校との遠隔合同学習、異学年交流学習

Ⅱ「学習指導の深化・充実」の６

<u>主体的・対話的で深い学びの視点から、児童生徒一人一人の多様な考え方や個人差・学年差に即した学習指導過程の改善と充実</u>

◎主体的・対話的で深い学び：個人思考・集団思考の時間の確保
◎リーダー学習：リーダーガイドを基とした授業づくり
◎ガイド学習：４段階「つかむ」「考える」「まとめる」「深める」の授業形態
◎同時間接指導：ガイド学習の徹底
○個に応じた学習：同時間接授業の中で机間巡視を重視
○意欲をもたせる課題：児童自ら学習を調整できるよう授業の「ゴール」の提示
○学習形態の工夫：授業に合った段階が提示できるよう段階カードの充実
○間接指導と直接指導のバランス：全体を看取れるような立ち位置、発問の工夫

4　全体構造図

学校教育目標

たくましく　やさしく　のびゆく子
～虎のようなたくましさ　人を支える心の杖～

目指す子ども像

○課題解決に向けて、主体的に判断し行動することができる子供
○仲間と共に考え、自己の考えを広げたり深めたりすることができる子供

研究主題

共に高め合う児童を目指して
～児童の発達に応じた主体的・協働的な学びを通して～

研究内容

（１）主体的な学びを支える授業づくり
①一人一人が学び方を身に付けることのできる授業
②課題解決へと向かう力を高める学習活動
③児童の発達の支えとなる学習指導過程の充実

（２）協働的な学習を通して、個の学びを「広げる・深める」授業づくり
①学ぶ楽しさや達成感を感じられる授業
②友達との学びを自分の考えに生かそうとする姿が見える授業

研究を支える土台

○ 授業の流れの統一
○ 学習リーダーを中心とした同時間接授業（ICT の活用）
○ 見通し・振り返りの視点
○ 宿題・家庭学習の効果的活用
○ 遠隔合同学習（ICT の活用）
○ デジタル教科書の活用

検証計画

○ チャレンジテストや全国学力学習状況調査、CRT 標準学力調査を用いた検証
○ 児童の振り返り（どんな力がついたのか、どんなことがわかったのか）
○ 参観者の振り返り
○ 児童アンケートの結果・分析

5　研究内容

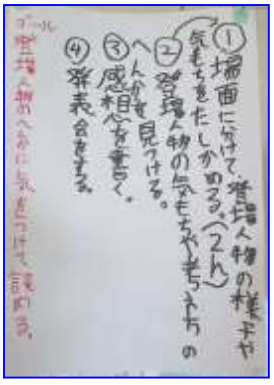
本校では、「課題解決に向けて、主体的に判断し行動することができる子供」、「仲間と共に考え､自己の考えを広げたり深めたりすることができる子供」を目指している。そのために、「一人一人が個で学ぶ力や仲間と共に学ぶ力を身に付けることで、学ぶことへの楽しさや達成感、自己の学びを広げ・深めることを実感できるだろう。」と研究仮説を立てた。
仮説を達成するために今年度の研修では、下記の内容に取り組んできた。

（１）主体的な学びを支える授業づくり
　① 一人一人が学び方を身に付けることのできる授業
　② 課題解決へと向かう力を高める学習活動
　③ 児童の発達の支えとなる学習指導過程の充実
（２）協働的な学習を通して、個の学びを「広げる・深める」授業づくり
　① 学ぶ楽しさや達成感を感じられる授業
　② 友達との学びを自分の考えに生かそうとする姿が見える授業

それらを更に細分化し、以下の８つを中心に研究を行った。
○　リーダー学習をベースとした授業づくり
○　同時間接授業
○　ゴールを明確にした授業づくり
○　振り返りの視点
○　ＩＣＴ機器を活用した授業づくり
○　遠隔合同授業に向けた竹浦小学校との合同研修

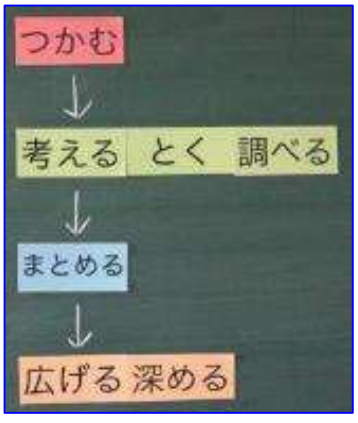
【リーダー学習をベースとした授業づくり】

リーダー学習を行っていくために、国語科を中心として、単元計画を児童が中心となって作成し、本時だけでなく単元全体の見通しをもてるようにしている。また、授業終了ごとに学習の記録を「まとめ」として、教室内に掲示をし、学習内容の積み上げを可視化している。さらに作成した単元計画は翌年に繰り越し、次年度の学年の児童や教員が参考にできるようファイルに綴っている。



【同時間接授業】

同時間接授業を行うために、リーダー学習を行っていくために学習ガイドを作成し授業の流れを可能な限り固定化し、児童自ら授業を進行できるようにしている。



課題として大きく２点ある。

１点目は、児童の発達段階に応じた対応が必要となること。そこで本校では、右のように低学年用の学習ガイド（算数科用）を作成した。しかしながら、他教科への派生などまだ課題は残っている。

２点目の課題としては、リーダーを輪番制にすると、児童により授業の進め方に違いや、進めることの難しさがあることである。解決策として教科別リーダーの指名や長期スパンでの輪番制など、様々な方法を試しているところである。

さんすうのすすめかた
【さんすうリーダーガイド】

1．もんだいをよみます
せーの「（みんなでもんだいをよむ）」

2．めあてをよみます
せーの「（みんなでめあてをよむ）」

3．しきとこたえをかいてください
しきとこたえあわせをします
しきは「（にっちょくがいう）」
こたえは「（にっちょくがいう）」
？にっちょくができていなかったら、だれかにあてる

4．ひとりまなびをはじめます
○○をやります。
じかんは、なんぷんひつようですか。
□ふんにします。
はじめてください。

5．グループでのまなびあいをはじめます。
じかんは、なんぷんひつようですか。

6．はっぴょうをします。
○○チームはっぴょうしてください。
つぎに、□□チーム発表してください。

7．まとめをします。
（ぜんせいがまとめをかく）

8．ひろげる（ふかめる）をします
○○をします。
なんぷんひつようですか。
はじめます。
こたえあわせをします。

9．ふりかえりをかいてください
ふりかえりをはっぴょうします。

【ゴールを明確にした授業づくり】

右記のような４段階をベースとした授業づくりをおこなっている。その中で授業の軸がぶれないように「ゴール」の提示を行い、授業での見通しを児童がもちやすいようにしている.

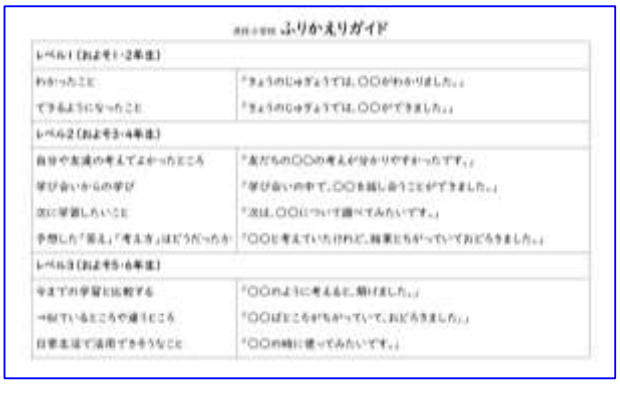
【振り返りの視点】

振り返りの充実を図ることで、学習が定着しているのかの一つの指針となる。

児童の視点：「書きたい」との思いより達成感・充実感のある授業 教員の視点：習熟度の確認を行うことができる

児童が学習内容を理解できているのかを確認するためにも、振り返りの視点に一単位時間での軸となる部分を示すようにしています。その基準となるのが、ふりかえりガイドである。（例：「○○を簡単に解くコツ？」「○○で学習したことが日常生活でも使えそうなところは？」など。）を提示している。

【ＩＣＴ機器を活用した授業づくり】


ふりかえりガイド

レベル1（おおそう1・2年生）	
わかったこと	「きょうのじゅぎょうでは、○○がわかりました。」
できるようになったこと	「きょうのじゅぎょうでは、○○ができました。」
レベル2（おおそう3・4年生）	
自分や友達の考えてよかったところ	「友だちの○○の考えが分かりやすかったです。」
学び合いからの学び	「学び合いの中で、○○を話し合うことができました。」
次に学習したいこと	「次は、○○について調べてみたいです。」
予想した「答え」「考え方」はどうだったか	「○○と考えていたけれど、結果どちがっていておどろきました。」
レベル3（おおそう5・6年生）	
今までの学習と比較する	「○○のように考えると、思けました。」
つながっているところや違うところ	「○○はところがちがっていて、おどろきました。」
日常生活で活用できそうなこと	「○○の時に使ってみたいです。」

ア）ＩＣＴ機器の整備と活用

ＩＣＴ機器を授業の中で効果的に活用していくことを目指し、教員だけでなく、児童自身も活用できるよう指導しているところである。

イ）学習ソフト「ｅライブラリ」の活用

朝学習や授業の習熟で活用し、児童一人一人に合った内容、レベルの問題を選択することで、「知識・技能」の向上を図っているところである。

ウ）デジタル教科書の活用

国語科「デジタル教科書」が導入され、活用を含めた授業づくり研究が進められている。現段階では、下記のような活用の仕方をしている。

○デジタル教科書の設定の仕方
上記にあるアイコンを選択することで、ルビ入れや背景色の変更など、個に合った設定を行うことができる
○道具機能
一番シンプルで使いやすいか機能である。教科書に文字を書き込んだり、線を引いたり、付箋を貼るなどができる機能。
○学ぶ機能の「漢字」
漢字フラッシュカードや筆順の復習は空き時間など短時間でできる。
○学ぶ機能の「ワーク」
教科書の挿絵や下部にある挿絵の説明や参考資料などが一覧で表示される機能で確認することができる。
○学ぶ機能の「思考ツール」
この機能は使い方が高度である。人物の相関図を考えたり、キーワードの整理に活用したりできる。
○学ぶ機能の「マイ黒板」
デジタル教科書の横に黒板画面を表示できる機能。手書きで書き込むことや教材文を切り抜くこともできる。

【遠隔合同授業に向けた竹浦小学校との合同研修】

ア）遠隔合同授業による授業づくり
特に研修している３点は以下の通りである。
○遠隔学習の実施時間である。今年度は、日課の変更ができなかったため、遠隔の授業時間を固定して行った。
○授業の組み立て方である。両校で授業の組み立てが若干違うので、両校の研修を活かしながら授業の型を決め、授業を進めた。
○機器の効果的な接続方法についてである。機器をどのように接続していくとよりよい遠隔合同授業ができるのか考えながら行った。

イ）遠隔で学習する際に必要な学習ルールについて
遠隔授業を行っていく上で、下記のような学習ルールを設定し、授業を行っている。

遠隔合同学習のルール
・フリートークの時は、挙手ボタンを押す。
・子どもの発表に対し、拍手やチャットで反応する。
・チャットの言葉遣いを正しく使う。
・発表の話型の設定をしている。

6　これまでの成果と課題

（１）主体的な学びを支える授業づくりに関して

【成果】

○同時間接授業を行うことで、授業はリーダーを中心として進行していくので、個に対応した学習指導ができている。

○学習ガイドに沿った授業づくりを意識して行うことで、日頃より子どもたちが学習に見通しを持ち、自ら授業を進めていけるようになってきている。

○４段階「つかむ」「考える・調べる・解く」「まとめる」「深める・広げる」の学習に「ゴール」基づいて授業を進めることで、児童が学習の見通しを立てやすくなっている。

○ガイド学習の徹底を図るため、低学年のうちからガイド学習の学びをできるようになってきている。

○授業の終末のふりかえりで視点を示すようにすることで、児童が学習したことを確かめたり、深めたりすることができるようになってきている。

○デジタル教科書等の ICT 機器を用いた授業づくりを進めている。

【課題】

●ガイド学習では、児童によっては授業を進めることに対して難しさを抱いている

●ゴールを提示することで、児童が見通しを立て学習することはできるが、「ゴール＝めあて・課題」となってしまっている部分がある。

●タイムマネジメントが難しく、授業が時間内に完結しないこともある。

●授業内での習熟の時間の確保が難しく、技能・定着が確実に定着していない。

（２）協働的な学習を通して、個の学びを「広げる・深める」授業づくりに関して

【成果】

○遠隔合同授業の推進をすることで、個の学びを広げられるようになってきている

○学習段階「考える」の部分で「一人学び～グループ学び～発表」という基本形を作ることで、児童が学習にあった形態で学習できるようになってきている。

○集団学びをする際に、視点を示すことで、活発な話合いができるようになってきている。

【課題】

●グループでの集団学びでの交流学習では考えを「深める」よりも「広げる」授業になってしまっている。

●学校間交流での合同授業がなかなか進まない現状が続いている。

授業実践を行った中での成果と課題は以下の通りである。

（授業実践①）遠隔合同授業

日時：5 月 17 日(火)　２校時

児童：竹浦小学校　５年生４名　６年生５名

　　虎杖小学校　５年生６名　６年生５名

教科：国語科「季節の言葉」

成果：色々な作品に触れることができて、児童に充実感があるように感じた。

　　授業者の指示が明確で、授業の流れがスムーズだった。

課題：音声だけでなく、表情や様子が見えた方が相手意識をすることができる。

　　ジャムボードに感想を書くところまではいけない子が多かった。

　　『ふりかえり』をタブレットではなく、ノートに書いてもよかった。

　　Meet のチャット機能で、「○○がいいね！」などと感想を伝えてもよい。

（授業実践②）遠隔合同授業
日時：6月21日(火)　2時間目
児童：竹浦小学校　５年生４名　６年生５名
　　虎杖小学校　５年生６名　６年生５名
教科：道徳科「なれなかったリレーの選手」　　A　節度、節制
成果：相手意識を持った言葉遣いでコミュニケーションをとれるようになってきた。
　　子どもの発言を教師側で入力し、記録をつけていったのはよかった。
課題：打ち込みに一生懸命で発表を聞けていないのではないか。
　　ネット環境の関係で全員の表情が映っていない。
　　発言するまでのタイムラグがある。

（授業実践③）遠隔合同授業
日時：7月12日(火)　2時間目
児童：竹浦小学校　５年生４名　６年生５名
　　虎杖小学校　５年生６名　６年生５名
教科：道徳科「子ども会のキャンプ」　　C　よりよい学校生活、集団生活の充実
成果:いつもは一人一ページでジャムボードにしていましたが､共有したらよかった。
　　遠隔を一度切って教材を読む方が、集中できている。
課題：タイムマネジメントと学習の深まりのバランスが難しい。
　　ふりかえりの視点をいれたが、道徳科の内容項目に迫るような振り返りに届かなかった。
　　遠隔での授業では、進めることに精一杯で変更が難しい。
　　指名の仕方をどうしたらベストなのか。

（授業実践④）同時間接授業
日時：7月14日(木)　５時間目
児童：虎杖小学校　３年生　５名　４年生５名
教科：３年生　国語科　生活の中で読もう「ポスターを読もう」
　　４年生　国語科　集めるときに使おう「要約するとき」
成果：日常の実践から経験の積み上げがなされ、リーダー学習の流れができている。
　　ねらいに沿った振り返りを児童一人一人ができている。
　　児童の学習状況に合わせて、個の学びからグループ学習に切り替え、ゴール達成に向けた学びができていた。
　　リーダー学習によって学習が進んでいる状態から、教師が全体を見通して、個への学びがしやすい状況が生まれていた。
課題：授業の見通しを丁寧に扱うことで、児童が主体的に学習できたのではないか。
　　個の学びを頑張っていたが、活動内容が難しかったため、グループ学習による助け合いのタイミングを少し早く仕掛けるべきだった。
　　個の学びからグループ学びへと移ったときに、学ぶ視点を児童と共有することによって、学びの支援がよりできるようになる。
　　個の学びを大切にしたい授業者の思いや、もっと自分で考えたいという児童の思いなどにより、与えられた時間が延長されてしまう。

7　指導案

小学校第５・６学年　道徳科学習指導案

日時　９月１５日（木）２校時
児童　虎杖小　５年生　６名（特別支援１名）
　　　　　　　６年生　５名（特別支援１名）計１１名
　　　竹嶋小　５年生　４名（特別支援１名）
　　　　　　　６年生　５名　　　　　　　　計　９名
授業者　[illegible]（虎杖小）　[illegible]（竹嶋小）
　　　　[illegible]（虎杖小）　[illegible]（竹嶋小）

１，主題
　誠実に生きる　Ａ（２）正直誠実
２，教材
　「手品する」光村図書　５年道徳
３，ねらい
　友達との約束に対して、うそをついてごまかしてしまった南の姿を通して、誠実に生きるにはどんな心が大切かを考えさせ、後ろめたさを感じることなく誠実に明るい心で生活しようとする心情や態度を育てる
４，多角的・多面的に考えるための指導工夫
　・竹嶋小学校との遠隔合同授業　　・ジャムボードへの記録，meet を通した意見交流
　・交流前に各校で教材文解釈と個人の学びの準備
５，展開（本時案）

	学習活動	指導上の留意点　☆評価
つかむ５分	１．はじめのあいさつ（虎杖小日直） ２．めあて 誠実に生きるには、どんな心が大切なのだろう。 ３．「誠実」とはどのような意味でしょう？	・クラスルーム「道徳５・６年」で meet 接続 ・マイクオフ、ビデオオン
考える２０分	４．教材文を読む ５．内容確認 ①南は、なぜ約束を守れなかったのか？ ②「急に熱が出た」となぜ言ったのか？ ③黙っていればわからないのに、なぜ南は悩んでいるのか？ ④南は正直に言ったと思うか？だまったままだと思うか？ ６．誠実に生きるにはどんな心が大切なのでしょう？	・児童 meet 退出 ・画面共有用は接続維持 ・場面スライドを活用 ・短時間で要点のみ確認する ・ワークシートに記入後、meet 接続 ・発表した内容をジャムボードに記録（北野Ｔ） ・児童は、友達の発言に対して拍手をしたり、チャット機能を使うことで反応する。 ☆誠実に生きていくためにどんな心が大切かを考えることができたか（ワークシート・発言）
広げる１０分	７．つなげよう うそをつくのはいけないとわかっているのに、人はなぜうそをついてしまうのだろうか？	・meet を活用して話合い活動を行う ・児童の発言をジャムボードに記録する（北野Ｔ）
まとめる１０分	８．ふりかえり 【視点】 誠実に生きるためにこれからの生活で大切にしたいことは？ また、誠実に生きることで自分にとってプラスになることは？ ９．おわりのあいさつ（竹嶋小日直）	・教科書の学びの記録に記入 記入後発表 ☆これからの生活の中で今日の学びを生かしていこうとしているか。 （教科書：学びの記録／ワークシート） ・あいさつ後、児童 meet 退出

６，板書計画（ジャムボード）

１ページ
手品する
めあて
「誠実に生きるには、
どんな心がたいせつなのだろうか」

２ページ
[illegible]

３ページ
[illegible]

４ページ
[illegible]

５ページ
[illegible]

６ページ
[illegible]

７ページ
「人はなぜうそをついてしまうのだろうか」

８ページ
ふりかえり
「誠実に生きるためにこれからの生活で大切にしたいことは？」
「また、誠実にいきることで自分にとってプラスになることは？」

３・４年生　複式用　本時の指導計画

３年生学習内容	備考・評価	動き	段階	備考・評価	４年生学習内容
①授業の導入 既習した「こまを楽しむ」の「はじめ」との違いを確認する。 はじめを読んでみて、今までの説明する文章と違うところはあるかな。 （問いがないことに気付くようにする。） ②ゴールの提示 ゴール：「はじめ」に書かれていることを整理し、問いを入れるとしたら、どこにどんな問いをどこにいれるとよいのかをまとめる。 ③児童による課題検討 めあて：「はじめ」を整理し、「はじめ」のどこにどんな問いをいれるとよいかを考えてみよう。	・授業内容のねらいがぶれないようにする。		つかむ	・授業内容のねらいがぶれないようにする。	①授業の導入 ・どんなお話でしたか。 （これまでのまとめを活用して話の流れを整理する。） ②ゴールの提示 ゴール：ごんと兵十の気持ちの変化を想像してまとめる。 ③児童によるめあての検討 めあて：ごんと兵十の気持ちの変化を想像してまとめよう。
④「はじめ」に書かれていることを整理する （一人→グループ確認） ・デジタル教科書にキーワードとなりそうな文や言葉をチェックする。 ・段落ごとにどんなことが書かれているのかを整理していく。 ※2/15 の学習内容をヒントに整理していく。 ⑤「問い」を入れるとしたら、どこにどんな問いを入れるのか考える （一人学び→グループ学び） ・問いを入れるとしたらどこに入れるのかを考える。 ・そこにどんな問いを入れるかを考える。 ※どうしてそのように考えたのか、相談後で書けそうな様子が見られれば、そこまでの指示を出す。 ・グループ学びでは、一人学びで考えた「問い」から良さそうなものを話し合ってまとめる。 ⑥グループごとに発表をする ・友達の意見で「よいな」なるほどと思ったことがあればノートに書く。	・机間巡視で児童が学習内容を理解できているか確認する。 ○「はじめ」の書かれ方について考え、文章全体の「中心」となる話題に気付くことができる。（発言・ノート）		考える	・机間巡視でこれまでの学習を生かしているか確認をする。	④教科書３１ページの視点を２つ確認する ・「ごん」が「兵十」について、思ったり考えたりしたこと ・「兵十」が「ごん」のことを表すときに使った言葉 ⑤登場人物の行動や気持ちがわかるところを確認する。 ・デジタル教科書の線を引いたところをたしかめる。 ⑥教科書３１ページの２つの視点を参考にし、ごんと兵十の気持ちの変化を考え、まとめる。 （一人学び→グループ学び） ※登場人物の気持ちが変化するポイントが抑えられていればＯＫ ⑦グループごとに発表する。
⑦問いを入れるにはどこにどんな問いがよいかをまとめる ・発表したことを参考にし、不足分がある児童は、追加でノートに記入する。 例：問いを大豆の説明の前に入れると、大豆を食べる工夫をもっと知りたくなる。			まとめる	○登場人物の気持ちの変化や性格を情景や場面の移り変わりと結び付けて、想像している。（机間巡視・ノート）	⑧登場人物それぞれの気持ちの変化をたしかめる。 ・発表したことを参考にし、不足分がある児童は、追加でノートに記入する。 例：ごん→兵十と仲良くしたい高ぶった気持ちから、お詫びしたい沈んだ気持ちになった。 例：兵十→兵十をこらしめたい怒りの気持ちから、ごんを倒してしまったという沈んだ気持ちになった。
⑧ふりかえりをする 視点：「はじめ」に「問い」があることでどんなよさがありますか。			深める		⑨ふりかえりをする 視点：登場人物の気持ちの変化をまとめ、どんなことを感じましたか。

8　研究協議

【５，６年生】

（１）授業者から

小野　郁恵　教諭（虎杖小学校）

・５、６年は進んで発表する子が少ないが、今日は自分から発表していた。
・竹浦小の子も挙手マークが多く、自ら発言したいと思っている子が多かった。
・子どもたちの意欲に応えようと思いながら授業を進めた。
・授業としては意見の広がりを促す進め方に反省点があった。

石井　晴香　教諭（竹浦小学校）

・遠隔合同授業のメリットは、多様な考えに触れるということである。
・発問に対する意見を、竹浦小では思いはもっていてもなかなか意見を出せないでいたが、虎杖小の児童から出た意見に、ハッとしてその後、素直な意見を出せるようになった。
・授業の中で変容が見られた子がいた。
・デメリットは、一人目と二人目の発言につながりが見られないこと。
・それぞれが自分の考えを述べるにとどまった。
・考えを広げるための教師側の引き出し方を今後考えていきたい。

（２）協議内容

②グループ発表

Ａグループ

・遠隔授業ができていた竹浦小学校の様子も見てみたかった。ジャムボードはＴ２が打ち込んでいて良かったのだが、現実的ではない。
・Ｔ１が二人いるなら役割分担すると良いのではないか。
・授業としては、考え議論する道徳として考えは出ていたが、議論は深まりがなく、残念だった。
・板書がなく議論しづらかったのではないか。
・児童が自分事として捉えて意見がたくさん出ると更に良かった。

Ｂグループ

・主体的な学びという点でチャットの活用は言葉で言うのが苦手な子も発表しやすく効果的と感じた。
・ＩＣＴ活用では低学年のうちから行うことで技能もあがるのではないか。
・ＩＣＴの使いどころ、例えばＩＣＴとワークシートの使い分けを考えたらどうか。
・協働的な学びとして有効な遠隔だった。普段の日常でも活用すればより上手になる。
・ふり返りで順に発表するだけでなく、深まりがあると良い。
・誠実という難しい題材だったが子どもたちよく考えていた。
・教材文を途中で止めて考えさせても良かった。
・小分けにして議論させると良いのではないか。

Ｃグループ

・遠隔の操作や授業展開に慣れており、タイムロスがなかった。
・先生方のチームワークが素晴らしい。
・道徳は心の人間ドックであり、自分を振り返ることが大切。
・両者の役割演技をして、ファシリテーション力を付けるともっと深まる。
・話し合う時はスタンディングで行うことで活発化する。
・コンデンサーマイクを使うことをおすすめする。

Ｄグループ

・主体的な学びを支える授業だった。
・自分事として考えられていた。
・ジャムボードの活用が有効的だったが、広げる深めるための足かせにもなっていた。
・１対１でつなげるだけでなく、小グループでつなげると広げ深められたのではないか。
・授業の流れに固執することなくガイドの使い方を選択できるようにしてはどうか。

（３）参観者の声

●論点をもっと絞り込んで板書を生かして深める授業づくりも可能だと感じた。
●教師主導の働きかけは極力減らし、児童のつぶやきや考えを膨らませるような発問が提示されると、その後の遠隔交流もよりよいと考える。
●つなぎ方の工夫をするとよりよい遠隔交流になるような気がします。
○竹浦小学校との遠隔合同授業は、意見交流拡大の面からもこれからの複式の授業の可能性を広げる授業でした。
○小規模校間での交流学習における meet やジャムボードの等の活用がとてもよかった。
○オフライン・オンラインの使い分けする方法がとてもよかった。
○タブレットでチャットを使い、様々な機能を活用していてすごいと感じた。
○Ｔ１とＴ２の先生の連携がとてもよかった。

【３，４年生】

（１）授業者から

古村　瞭汰　教諭（虎杖小学校）

・発問の内容が悪く、気付いてほしいところに気づかせることができず、ヒントを使う状況になってしまった。
・グループ発表でも言いっぱなしで終わってもったいなかった。
・授業の構成をもっと工夫すると良かった。
・児童のふり返りを確認すると、本時のゴールには達していたように感じた。
・登場人物の気持ちの変容の部分をもう少し厚くすると良かった。
・時間配分を含めたタイムマネージメントに課題があった。
・ふり返りも教材文を通した読み取り方法が身に付いたかという視点で見ると、精査が必要だったかもしれない。

（２）グループ発表

Ａグループ

・リーダーが育っているので、安心してみられた。
・先生がぐっとがまんして声を掛けないことができていた。
・学習の足跡が見えるデジタル教科書の使い方をしていた。
・ゴールがしっかり示されていて子どもたちが進めやすそうだった。
・ゴールを「問いの良いところはどんなところか」にすると良かったのではないか。

Ｂグループ

・児童がめあて・課題・ゴールを具体的にわかっていたのか。
・まとめることがゴールではない。
・同時間接授業が主体的協働的な学びにマッチしている。
・子どもたちの主体的な姿が見られたが、４年生は学習内容がちょっと多かった。

Ｃグループ

・タイムマネジメントが良かった。
・発問、指示が抽象的に話をしてしまっていたので、具体的じゃないと児童は動けない。
・子どもたち自身でゴールを設定するとモチベーションがあがるのではないか。
・単元の１時間目に答えの出ないような課題を設定するなどの方法がある。

Ｄグループ

・複式としてスムーズだった。
・国語科の単元計画として１時間目に単元の終わりにどんな力を付けさせたいのか、１時間目に児童にとってリアルなものにしていけると自分事として学んでいけるのではないか。

（３）参観者の声

●教師が介入のタイミングは難しいですよね。

●子どもの思考を「広め」「深める」学習に向けて、よりよい授業づくりをしていけることを期待しています。

●児童がタイムマネジメントをどうしたらうまくやっていけるのか考えることも必要かもしれませんね。

●主体的な学びと協働的な学びを両立させていくことは難しいですよね。

●話してから書く（逆の発想）を試してみてもよいかもしれませんね。

●ゴールを達成するための活動を児童自身が見出せるとよりよいと感じました。

●１時間にゴール・課題・まとめ、本当に必要なのか。

○複式の授業では、学習リーダーの存在やわたり・ずらし、直接指導・間接指導などとても参考になりました。

○児童の実態を把握し、それに合わせた支援や自力解決の場面の設定ができていた。

○両学年とも間接指導時の学習の進め方がしっかり定着しており、子どもが主体的に学習を進めていく姿が見られた。

（４）助言者より

【北海道教育庁胆振教育局　義務教育指導班主任指導主事　渡辺　浩輔　様】

（研修全体について）

・ここまで授業改善に努めたことで、子どもたち、先生方の力･慣れが現れていた。

・令和２年の秋に遠隔の相談を受けた時から構想があり、今結実しているのだろう。

・今後も授業改善に対する研究の充実をお願いしたい。

・合同遠隔、同時間接の取組を引き続き継続してほしい。

（道徳科）

・とても力のある教材。

・５、６年の誠実の内容項目のポイントは自分自身に対する誠実さ。

・もやもやにどう向き合うかが今日のメインであり､「誘惑に勝ったり負けたりすること、主人公は一度勝っているが次の誘惑には負けた。そういうことはあるよね。それに対して皆さんどうでしたか」と問うことによって自分事で考えたのではないか。

・授業の流れのシステム的には完成されている。

・交流場面の充実が課題･ブレイクアウトルーム（小グループ）活用をすると更によい。

・次年度深める授業が大事と言っていたが、一つ例を挙げるならば、最後の２コマ目「どうしようわたし。…だけどー」のダッシュを考えさせるとどうでしょう。

（国語科）

・言語活動が明確で素晴らしい。

・単元のまとまりで課題を見通すことはとてもよい。

・教室に児童が書いた課題とまとめが掲示され、ふり返りに効果的である。

・学びの足跡を示すことで次の見通しを持たせる手がかりになる。

・指導要領では学んだことを生活に生かす、更なる学びにつなげることが大切と示されているが、意欲を喚起する工夫が随所にあった。本時のゴールを示しそれを元に進めた。

・見通しを与えるという点で５、６年になったら子どもたちだけで課題を作るようになれれば子どもたち自身が主体的にはどんな規模の学校でも変わらない。

・登場人物の心情がどこで変化したのと聞くと、俯瞰的に読むことができるようになる。

（今後さらに深めてほしいこと）

・評価規準や評価方法について。児童の実態を踏まえた時に適切であるかどうかを検証してほしい。

・学びの系統性について。学年ごとの系統性を校内で統一していくことの検証をしてほしい。

・ＩＣＴ端末の積極活用をして、適切な教師の介入を行っていってほしい。

【道へき研究推進委員　留萌市立港北小学校　村元　隆一　校長先生】

・ＩＣＴの活用を日常的に使っていることが姿から感じられ、活用のねらいが明確であった。
・ＩＣＴの活用が複式の困難性の克服に資する活用のされ方であり、使用すること自体を目的としてしまいがちだが、何のために活用するのか立ち返って活用することが大事だと感じた。
・同時間接はリーダーの育成、ＩＣＴ活用とセットで受け止めることができていた。
・子どもたちに高いレベルの学ぶスキルを求めていくことが大事である。
・ＩＣＴでなければできないことをやっており、ＩＣＴでなければ伸ばすことのできない力を伸ばしていた。複式の可能性を大きく広げる授業だった。
・複式の授業づくりには、様々な歴史があり、半世紀以上の試行錯誤を経て今になっているが、今がゴールではない。
・端末が整備されたからこそ、これからの形も求められる。本日の虎杖小の授業もそのひとつを示してくれた。

9　本年度の研究における成果と課題

①目指す子ども像の検証

○主体的に判断し、行動し、児童がリーダーとなり、学習活動を行うことができるようになってきている。
●仲間と共に考える部分に関しては、児童同士が支え合ったり、助け合ったりし、課題を解決していく習慣はついてきている。今後も発達段階を踏んで、指導に努めていきたい。
●自己の考えを「広げる」ことは、集団学びや交流の発表を通してできるようになってきているが、自己の考えを「深める」ことができるような研究をしていく必要がある。

②研究内容に対する検証

○個で学ぶ力が、児童によっては差があり、見通しを立てて学ぶことが難しい児童がいるので、学びの保障を行っていく必要がある。
○課題解決へ向かう力を高めるために単位時間の「ゴール」を提示することで、見通しを立てて児童が学べるようになってきているので、今後も継続していきたい。
○学習指導過程は、児童に身についてきているので、このまま継続して、経過検証をしながら、発展、改善を進めていきたい。
○楽しさや達成感を感じる授業づくりのために、めあて・課題の設定を子どもたちが行ったり、ガイドに沿って授業をリーダーが行ったりしているので、今後も継続していきたい。その中で、より一層楽しく、達成感ある授業にしていくための検証を今後も行っていきたい。

③今後の方向性

○抽象的な指示を脱却し、具体的な視点やポイントを伝えていける学校での基準づくり

→ふりかえりガイドのように、児童が見てもわかるような視点ガイド・カードのようなものを作成するなどの研究をしていきたい。

○個に対応した授業づくり

→同時間接授業のより一層の充実を図り、個別の支援を必要とする児童へのサポートを行っていけるようにしてきたい。

○広げる授業から深める授業への発展

→グループ学びの充実を図っていけるように、発問の工夫や授業展開の工夫など研究を重ねていき、「深まる」授業づくりを行っていきたい。

○誰でも使いたい場面で使える ICT の環境づくり

→使い方をリスト化するなどし、児童・指導者にとってわかりやすく、効果を実感できるような使い方を研究し、整理していきたい。

○効果的かつ効率よくできる遠隔合同授業の実施をできる環境づくり

→現状では、遠隔合同授業を行う際に負担感があり、充実した学習活動ができていないので、この点に関して環境の整備や効果的な授業づくりを研究していきたい

○わかりやすく、伝わりやすい授業配信

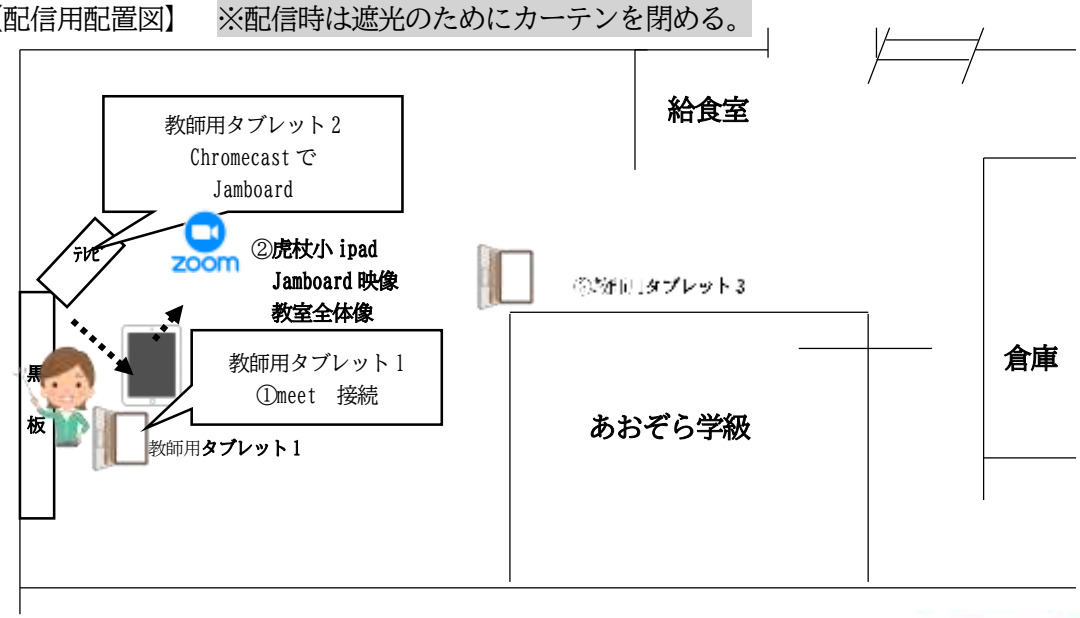
→音声が伝わりにくかったり、映像がわかりにくかったりする部分があったので、今後配信の仕方や技量を向上していけるように研究していきたい。

白老町立虎杖小学校　配信状況

1　5･6年生道徳授業(白老町立竹浦小学校との遠隔授業)

(1)配信図

【配信用配置図】　※配信時は遮光のためにカーテンを閉める。



ZOOM 接続・２画面
道へきより ZOOM アカウント（有料）を借り受け。
参加者はカメラオフ・マイクオフすることで、
授業画面のみ放映することができる。
チャンネルは以下の通り
①meet 動画　→３・４年生教室で meet 接続し、テレビ放映。
その画像を ZOOM で撮影。
②虎杖小カメラ・Jamboard テレビ画像　→ZOOM で撮影。

３・４年生教室で ZOOM を受信。ホスト ZOOM 動画を YouTube でそのまま配信。

児童・授業者：meet 接続
・ヘッドセット着用
授業参観方法
・教室で参観。遠隔の手立てはわかりやすい。授業はヘッドセット着用のため、竹浦小の音声は聞こえない。
・２年教室で参観。テレビに ZOOM 映像を流す。全体の流れや音声がわかりやすい。
・遠隔で参観。ZOOM または YouTube にて個人で参観。
・教室での参観者には、ハウリング防止のため、携帯電話の電源を切るか、教室内に持ち込まないよう事前に伝えておく。
ＹｏｕＴｕｂｅ配信
・３・４年生を配信基地。ZOOM 動画を YouTube に配信。

(2)授業内容･機材

記号	撮影内容	機材
①	指導者と児童	Googlemeet(虎小-竹小) chromebook(Googlemeet)＋chromecast
②	活動の様子(Jamboard)	chromebook(Jamboard)＋chromecast＋TV

(3)配信内容･機材

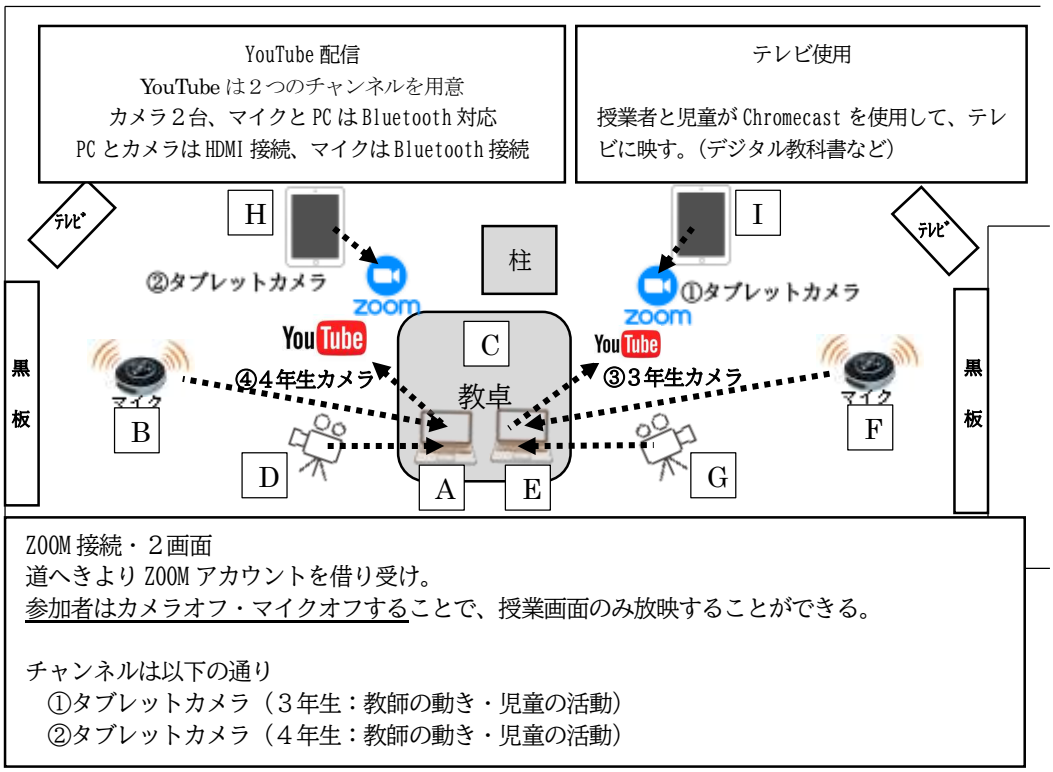
配信に関しては、3･4年教室を配信の本部として行った。そのため、配信に関しては、3･4年生の同じ項目を参照してください。

2　3･4年生国語科授業

(1)配信図

【3･4年教室】

※配信時は遮光のためにカーテンを閉める。



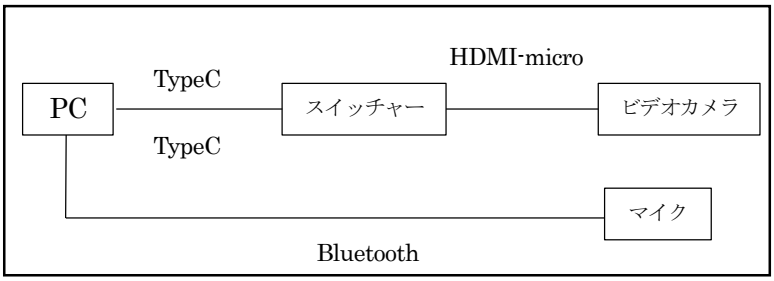
(2)授業内容･機材

記号	撮影内容	機材
①	教師、児童の様子	ipad
②	教師、児童の様子	ipad
③	3年生授業全体	ビデオカメラ
④	4年生授業全体	ビデオカメラ

(3)配信内容･機材

≪YouTube≫

A　4年生側 PC(Macbook)
B　4年生側マイク(EPOS)
C　スイッチャー(ATEM　MiniPro)
D　4年生側ビデオカメラ
E　3年生側 PC(NotePC)
F　3年生側マイク(EPOS)
G　3年生側ビデオカメラ

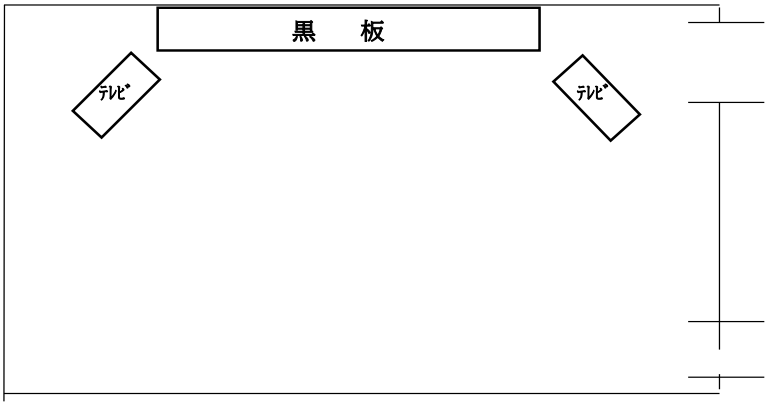


≪Zoom≫

H　Zoom のアカウントでライブ配信
I　 Zoom のアカウントでライブ配信

3 参観会場

１１．参観会場（２年生教室：ＹｏｕＴｕｂｅ配信会場）



授業公開①
・テレビは１台
・中央に設置
授業公開②
・左側が３年生映像
・右側が４年生映像
※机と椅子は
１年生教室へ収納
※接続は
管理職か配信担当が
行う

4 遠隔授業･機材

本校が遠隔授業や授業配信を行う上で、下記の機材を購入、使用している。(すべてを使っているわけではない。)

種類	品名・型番	数量
デジタルビデオカメラ	SONY　HDR-PJ630	1
デジタルビデオカメラ	Panasonic　FULLHD　HC-V480MS	1
ビデオカメラ用指向性マイク	SONY　ECM-GZ1M	2
スピーカーマイク	EPOS　SP30+	2
Bluetoothスピーカー	JBL　Charge５	1
スイッチャー	ATEM　MiniPro	1
キャプチャーボード	HD　VIDEO　MOODEL:EC289	1
キャプチャーボード	AverMedia PLUS AVT-C878	1
モニター	FUNAI　50インチ　FL50U3130	4
ディスプレイスタンド	UTS-S8718S黒	4
クロームキャスト	Google　ChromeCast	3
プロジェクター	EPSON　EB-FH52	1
スクリーン	ウチダ　KFU-1200V	1
HDMI-HDMI	DH-HD14ER50BK　5メートル	1
HDMI-HDMIMini	DH-HD14EM30BK　3メートル	2
HDMI-HDMIMicro	DH-HD14EU20BK　2メートル	2
HDMI-TypeC	CAC-CHDMI20BK　2メートル	6
USB-TypeC	USB3-AC20BK　2メートル	2
片耳ヘッドセット	HS-HP29TBK	10
片耳ヘッドセット	HS-HP30TBK	5

5 配信方法

Zoom を YouTube へ変換をし、配信した。

したがって、本校では、まずZoomへの配信を行い、その処理したものを YouTube にて公開を行った。

第４分科会

【研究主題】

「主体的に学び合い、ともに高まろうとする児童の育成」

～リーダー学習の取組を通して～

苫小牧市立樽前小学校

授業の様子

【公開授業１：第５・６学年】

【公開授業２：第３・４学年】

研究の概要

1　研究主題

「主体的に学び合い、ともに高まろうとする児童の育成」
～リーダー学習の取組を通して～

2　研究主題設定の理由

（学習指導要領から）

学習指導要領は、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、児童に生きる力を育むことを目指すこと」を求めている。

（学校の現状から）

本校は全て複式学級である。複式であるがゆえに学習の中で、児童が発言したり学習リーダーになって学習を進めたりする機会が多く、自主学習や集団学習を行う習慣を形成しやすい。

（児童の実態から）

全体的に明るく素直な児童が多く、学習にも真面目に取り組んでいる。家庭学習の定着率も高い。

一方で、

・前の児童が発言した内容につなげて発言すること。
・学習リーダーがマニュアルにとらわれてしまうこと。
・活用問題が苦手な児童が多い。

ことなどが、課題として挙がっている。

（リーダー学習を切り口に）

授業は、教師と児童が共に創るものである。リーダー学習を取り入れて、児童だけで授業を完結させることを目指してはいない。また学習リーダーに授業の進め方のマニュアルを手渡せばうまくいくものでもない。

リーダー学習を切り口にすることで、教師の授業観の転換や児童にどんな力が必要なのかを考えるきっかけとなる。そのことを通して、主体的・対話的で深い学びの実現を目指していきたい。

（教科の選定）

児童に生きる力を育むことは、学校教育の全ての領域や教科で求められることではあるが、教科としては「算数科」を選んだ。

・令和元年度から３年間算数科の研究を進めていて、その蓄積があること。
・教科書を使った授業の流れや学習内容の系統性が比較的明確なので、学習リーダーを育成しやすいこと。

が選定の理由である。

以上のことから、少人数の良さをいかし複式での学習指導を構築することで、子どもたちが主体的に学習を進め､互いの考えを伝えることを通してともに高め合うことを目指し、本研究主題を設定した。

３　道へき複第 10 次長期５か年計画研究推進計画との関連

学校・学級経営の深化・充実	研究課題１：確かな経営理念の確立と、家庭や地域と連携した確かな学びを創る特色ある教育課程の創造と推進
（本校教育との関わり） ・小規模、少人数の利点をいかし、地域に根ざした特色ある教育活動を計画する。 ・多様な体験を重視し、児童１人１人の個性や能力に応じた教育活動を推進する。	
学習指導の深化・充実	研究課題６：主体性を育てる学習指導過程の改善と充実
（本校研究との関わり） ・学習の見通しをもって、粘り強く課題を解決する。 ・つなげる発表を心がけ、発表の質を高める。 ・リーダー学習の確立を目指す。	

4　全体構造図

（学校教育目標）豊かな心でたくましく生きる樽前っ子の育成
- 自分から進んで学習する子
- いつも明るく思いやりのある子
- 心もからだもたくましい子
- ねばり強くがんばる子

（研究主題）主体的に学び合い、ともに高まろうとする児童の育成
～リーダー学習の取組を通して～

（研究内容）

めざす児童像		
主体的に学ぶ子	ともに高まろうとする子	学び合う子
研究仮説と検証方法		
（研究仮説１） 児童に目的意識や学びの見通しをもたせることで、学習に主体的に取り組み、学びの成果を実感できるのではないか。	（研究仮説２） 友だちとの関わり方や交流の仕方を工夫することで、児童はともに高まろうとするのではないか。	（研究仮説３） リーダー学習を取り入れることで、児童が学び合いを続けることができるのではないか。
（仮説検証１） □学習過程の構築 □目的意識のある課題設定 □効果的な振り返り ・数学的な見方・考え方を明確にした振り返り □基礎基本の定着	（仮説検証２） □ペア学習 □つなげる発表 □質を高める全体交流	（仮説検証３） □リーダー学習

授業を支える日常的な取り組み
- 樽前スタンダード
- 四則計算プリント
- 教室の掲示物
- ＩＣＴの活用
- 学習のやくそく

タブレットの活用→

5　研究内容

（仮説１）児童の主体性を育む学習展開の工夫
児童に目的意識や学びの見通しをもたせることで、学習に主体的に取り組み、学びの成果を実感できるのではないか。

（仮説検証１）

・主体的な学びには、「なぜ学ぶのか？」という学びの目的と、「できた」「わかった」という学びの実感が必要である。

↑解決の見通しをもたせる

①課題意識の高まりについて

・教科書には課題が書いてある。ただそれを自分事として考えている児童は少ない。児童に対して、課題に迫る発問をしたり解決の見通しをもたせたりする必要がある。児童の「やってみたい」「解いてみたい」という思いを引き出すには、様々な方法が考えられるが、大切なのが数学的な見方・考え方である。児童がどんな数学的な見方・考え方を働かせればよいのか、また児童にどんな数学的な見方・考え方を身に付けさせたいのかを教師が明確にしておくことで、児童も目的意識を焦点化することができる。

②学びの実感について

・まとめも教科書に書いてあるので、「今日のまとめは何かな？」と問いかけると、それを読み上げる児童もいる。ただ必ずしも児童の学びの実感がこもっているとは言えないこともある。児童１人１人が学んだことを能動的に振り返る必要がある。

やり方としては、

低学年→児童に「今日学んだことは何だったか。」を尋ねて、教師がまとめをする。

中学年→「今日学んだことをキーワードにするとどうなるか。」を尋ねて、教師と児童でまとめをする。

高学年→児童が主体となって、まとめをする。

と考えられる。

最初から教科書のような模範的な文章はできないかもしれないが、キーワードからでよいので、問いかけていくことが必要である。自分が今日学んだことはこれだ、としっかりと言える児童を育てていく。

③単元テスト後の時間の活用

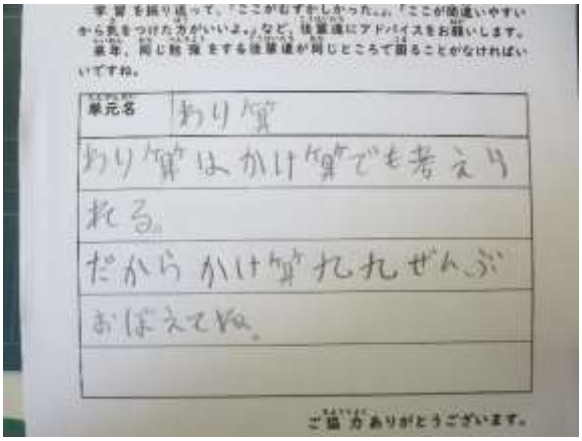
・主体的な学びには、学習の見通しと振り返りが大事である。そこで取組を２つ行う。

ア　後輩に伝える振り返り

・テストが終わった後に、「先輩として、後輩に伝えることはないだろうか？」と投げかける。「○○がむずかしいから気を付けて。」「○○を解くには、こうすれば

いいよ。」という児童の生の声を集める。児童が困ったと感じたことやつまずいたことは、樽前小の共有の財産となる。

次年度には、先輩達が自分たちに伝えてくれたこととして、受け止めて同じ轍は踏まないようにしようとするはずである。また一見、後輩に伝えるために振り返っているようだが、実は自分自身への振り返りでもあるので、「次は気を付けよう。」と考えるはずである。



↑　単元学習後の振り返り

イ　単元の見通しに関わって

・新しい単元が始まる前に、単元の終わりの「たしかめよう」の１番最後の問題を解いてみる。
　・全く手も足も出ない子
　・何とか解いてみようと、四苦八苦する子
　・すんなりと解ける子

など様々である。その児童が難しい問題にどう対応するかを見取ることもできるし、レディネスにもなる。

時間は５分程度で切り上げて、「解けなくも大丈夫だよ。」と伝えておく。児童は、これからこんな勉強をするのだと見通しがもてるし、単元の学習が終われば、当然その問題が解けるようになっているので、学びの成果を実感することもできる。

（仮説２）友だちと協働的に学ぶ交流の工夫
友だちとの関わり方や交流の仕方を工夫することで、児童はともに高まろうとするのではないか。

（仮説検証２）

①ペア学習の活用について

ペア学習の目的を　・全体交流の練習
　・単純な間違いの修正
　・解決のヒントをもらう

として考える。

誰と誰をペアにするのかというのも教師の工夫のしどころである。

↑全体交流の前のペア交流

②前の人につなげた発言

・話し合いとは、対話である。対話では、話し手と聞き手が交互に入れ替わる。前年度までの取組で児童の話す力はついているが、聞く力についても焦点を当てていきたい。「相手の話を聞いているよ」ということを示すためにも、発表が２番目の児童からは、「つなげる言葉」を使って発表させる。ここで言うつなげる言葉というのは、「つけたしで」とか、「別の視点で」という言葉である。この言葉を使うためには、前の児童の発表を聞いていなければならない。

・「□□さんの考えにつけたしです。○○という言葉を入れるともっとわかりやすくなると思います。」

・「ぼくは、□□さんとは、別の視点から考えました。それは・・・」

といった発表ができると、話し合いの内容が充実してくる。

↑ホワイトボードを使った交流

③質を高める全体交流

・これは、２つの側面がある。

１つは、それぞれが働かせた数学的な見方・考え方をもち寄って、よりよいまとめにしていく全体交流である。

例えば、

・「○○という理由で、□□さんの発表がわかりやすかったです。」

→発表の質を競う。（よい発表を評価する視点が必要）

・「□□さんと答えは同じだけど、こんな解決方法もあるよ。」

→解決への視点を広げる。

もう１つは、間違いにも価値を見い出す全体交流である。友だちの誤答に対して、単に「間違っている。」と言うのではなく、「どのように考えたのか。」「どんなところに気を付けると正解になるか。」と捉える姿勢を育てていく。間違いをだめなことと捉えるのではなく、みんなが気を付けるべき落とし穴と捉えるとクラスの共有の財産になる。「次からどうすればいいかな。」と投げかけると児童からいいアイデアが出てくるはずである。

そのためには、普段から失敗を受け止めたり、「わからない」と言えたりするクラスの雰囲気作りが大切である。

（仮説３）リーダー学習の確立

リーダー学習を取り入れることで、児童が学び合いを続けることができるのではないか。

（仮説検証３）

①　リーダー学習とは

・学級の児童を「学習リーダー」として、学習を進める方法である。

②　リーダー学習の必要性と期待できること

（教師側）
・児童を支援する時間を確保できる。
・児童の活動に空白の時間が生じるのを防げる。

⇒ リーダー学習 ⇐

（児童側）
・学習するのは自分たちだという意識が高まる。
・リーダーシップやメンバーシップが育つ。

・決して、教師が手を出さず児童の進行だけで終わってしまうような授業を目指しているわけではない。深い学びのために、教師による発問や揺さぶりは必要である。ただ、学習の主体を少しずつ児童に移していくことで、できることを増やし自分で学び続けられる児童を育てていきたいと考える。

また、リーダー学習が円滑に進むようになるには、児童にどんな力が必要なのかを考える過程の中で、授業のあり方や教師の役割などを見直すことも期待できる。

↑学習リーダーによる進行

③リーダー学習に必要な力

・リーダー学習を円滑に進めるためには、児童全員に次のような力を身に付けることが必要である。

ア　学習の流れを理解していること　｝　１年次の研究との関連
イ　一定程度の学力が身に付いていること　｝
ウ　わかりやすい発表ができること　｝　２年次の研究との関連
エ　児童同士で話し合いができること　｝

（アについて）
○児童の活動が止まってしまうのは、次に何をしたらよいかわからないからである。学習の流れをある程度パターン化し、進め方を児童が理解することで、学習に見通しをもつことができる。

（イについて）
○学習リーダーが、自分が出した答えに不安を感じているようでは困る。学習リーダーが自信をもって進めることができるように、どの児童にも算数の力をつける必要がある。ただ、すぐ忘れてしまう児童もいるので、学んだことが定着するような方策も必要である。

（定着のために）

・ペア学習を充実させる。

・家庭学習で、今日習った学習を復習する。

・既習事項を掲示し、いつでも確かめられるようにする。

・授業の冒頭で、前時に習ったことを振り返る。

・１分間四則計算プリントで、計算力の底上げをはかる。　　など

（ウについて）

○「わかりやすい」とは、

・簡潔であること

・「操作」の発表なら順序よく、「理由」の発表なら根拠が明確であること

・算数用語や数学的見方・考え方が入っていること

などが挙げられる。

また、声の大きさや言葉の明瞭さも大事である。

（エについて）

○具体的には、「学級会の司会ができる力があるか。」ということである。幸いにも本校は少人数のため児童は発表の機会も多く、高学年になれば縦割り班活動などで全員の前に立って話し合いを進めていくことがある。

算数科の時間だけでなく、様々な場面において自分たちで話し合って決定していく過程を経験させることで、先を見通して話を進めていく力やみんなの意見をまとめる力をつけさせていく。

６　これまでの成果と課題

（成果）

・学習への見通しという点では、学習の始めに「たしかめてみよう」の最後の問題を解くという取組は有効だった。解けなくても、これからどんな学習をするのか構えをつくることができるし、単元の最後に再び取り組むと解けるようになっているので、学びの実感を得ることができていた。

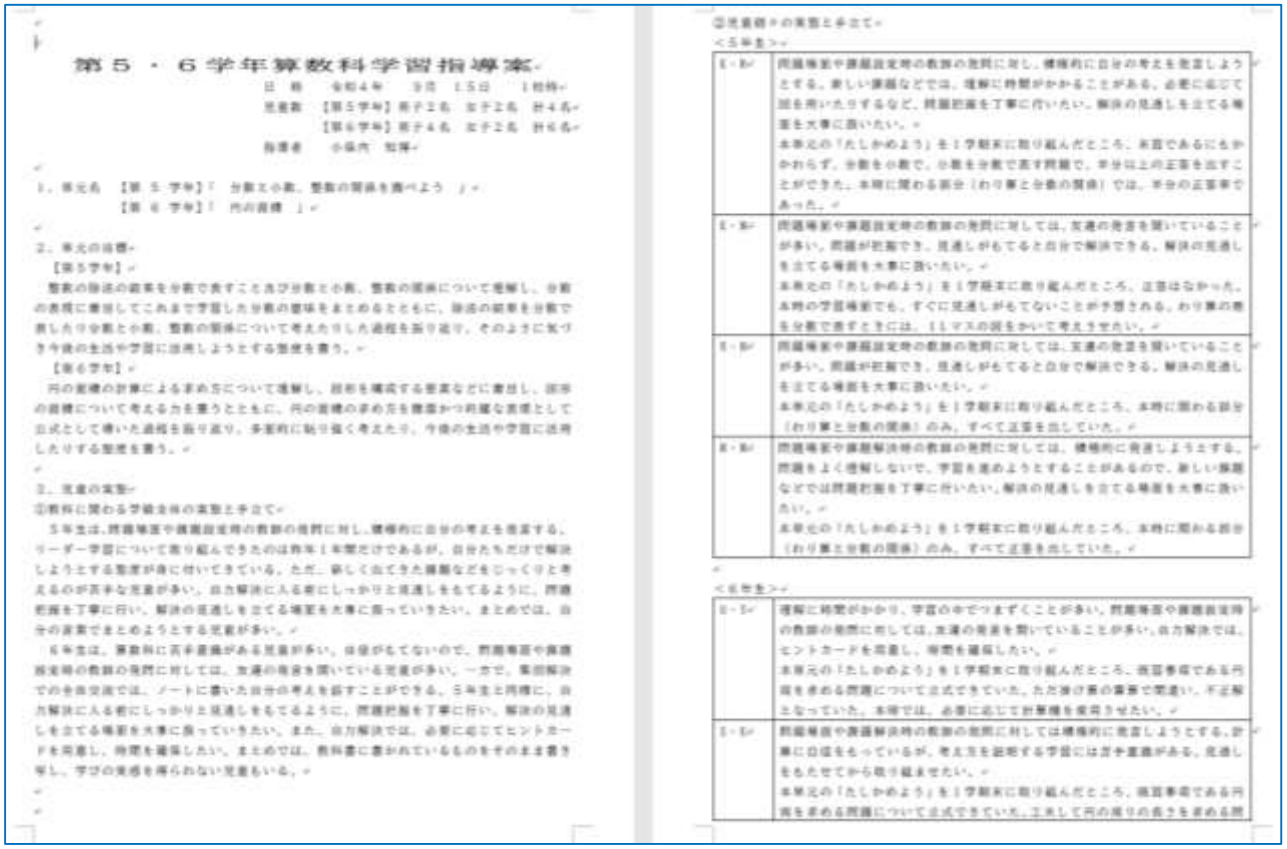
・単元の最後の振り返りでは、「後輩たち」という相手意識をもたせたことで、自分が何を学んだのか、何を伝えればいいのかと考えながら振り返ることができた。

（課題）

・リーダー学習の取組を通して、どの児童にも算数科の力を付けさせていきたい。ただ、児童には勉強の得意・不得意や学力差などもある。課題を立てたり見通しをもたせたりする場面では、いかに一人一人に自分事としてとらえさせるか、まとめや振り返りの場面では、他人任せにせず一人一人が能動的に思考していくようにすることが課題である。

どの児童もいきいきと学習リーダーができるようになることを目指していきたい。

7　指導案



第５・６学年算数科学習指導案

日　時　　令和４年　９月　15日　１校時
児童数　【第５学年】男子２名　女子２名　計４名
　　【第６学年】男子４名　女子２名　計６名
指導者　　小泉内　知輝

１．単元名　【第５学年】「　分数と小数、整数の関係を調べよう　」
　　【第６学年】「　円の面積　」

２．単元の目標
【第５学年】
整数の除法の結果を分数で表すことおよび分数と小数、整数の関係について理解し、分数の表現に着目してこれまで学習した分数の意味をまとめるとともに、除法の結果を分数で表したり分数と小数、整数の関係について考えたりした過程を振り返り、そのように気づき今後の生活や学習に活用しようとする態度を養う。
【第６学年】
円の面積の計算による求め方について理解し、図形を構成する要素などに着目し、図形の面積について考える力を養うとともに、円の面積の求め方を簡潔かつ明確な表現として公式として導いた過程を振り返り、多面的に粘り強く考えたり、今後の生活や学習に活用したりする態度を養う。

３．児童の実態
①教科に関わる学級全体の実態と手立て
５年生は、問題場面や課題設定時の教師の発問に対し、積極的に自分の考えを発言する、リーダー学習について取り組んできたのは昨年１年間だけであるが、自分たちだけで解決しようとする態度が身に付いてきている。ただ、新しく出てきた課題などをじっくりと考えるのが苦手な児童が多い。自力解決に入る前にしっかりと見通しをもてるように、問題把握を丁寧に行い、解決の見通しを立てる場面を大事に扱っていきたい。まとめでは、自分の言葉でまとめようとする児童が多い。
６年生は、算数科に苦手意識がある児童が多い、自信がもてないので、問題場面や課題設定時の教師の発問に対しては、友達の発言を聞いている児童が多い、一方で、集団解決での全体交流では、ノートに書いた自分の考えを話すことができる。５年生と同様に、自力解決に入る前にしっかりと見通しをもてるように、問題把握を丁寧に行い、解決の見通しを立てる場面を大事に扱っていきたい。また、自力解決では、必要に応じてヒントカードを用意し、時間を確保したい。まとめでは、教科書に書かれているものをそのまま書き写し、学びの実感を得られない児童もいる。

②児童観からの実態と手立て
＜５年生＞

Ｉ・Ｂ○	問題場面や課題設定時の教師の発問に対し、積極的に自分の考えを発言しようとする。新しい課題などでは、理解に時間がかかることがある。必要に応じて図を用いたりするなど、問題把握を丁寧に行いたい。解決の見通しを立てる場面を大事に扱いたい。 本単元の「たしかめよう」を１学期末に取り組んだところ、８割であるにもかかわらず、分数を小数で、小数を分数で表す問題で、半分以上の正答を出すことができた。本時に関わる部分（わり算と分数の関係）では、半分の正答率であった。
Ｉ・Ｂ○	問題場面や課題設定時の教師の発問に対しては、友達の発言を聞いていることが多い。問題が把握でき、見通しがもてると自分で解決できる。解決の見通しを立てる場面を大事に扱いたい。 本単元の「たしかめよう」を１学期末に取り組んだところ、正答はなかった。本時の学習場面でも、すぐに見通しがもてないことが予想される。わり算の商を分数で表すときには、１１マスの図をかいて考えさせたい。
Ｉ・Ｂ○	問題場面や課題設定時の教師の発問に対しては、友達の発言を聞いていることが多い。問題が把握でき、見通しがもてると自分で解決できる。解決の見通しを立てる場面を大事に扱いたい。 本単元の「たしかめよう」を１学期末に取り組んだところ、本時に関わる部分（わり算と分数の関係）のみ、すべて正答を出していた。
Ｋ・Ｂ○	問題場面や課題解決時の教師の発問に対しては、積極的に発言しようとする。問題をよく理解しないで、学習を進めようとすることがあるので、新しい課題などでは問題把握を丁寧に行いたい。解決の見通しを立てる場面を大事に扱いたい。 本単元の「たしかめよう」を１学期末に取り組んだところ、本時に関わる部分（わり算と分数の関係）のみ、すべて正答を出していた。

＜６年生＞

Ｉ・Ｓ○	理解に時間がかかり、学習の中でつまずくことが多い。問題場面や課題設定時の教師の発問に対しては、友達の発言を聞いていることが多い。自力解決では、ヒントカードを用意し、時間を確保したい。 本単元の「たしかめよう」を１学期末に取り組んだところ、既習事項である円周を求める問題について立式できていた。ただ後ろ側の事柄で間違い、不正解となっていた。本時では、必要に応じて計算機を使用させたい。
Ｉ・Ｓ○	問題場面や課題解決時の教師の発問に対しては積極的に発言しようとする。計算に自信をもっているが、考え方を説明する学習には苦手意識がある。見通しをもたせてから取り組ませたい。 本単元の「たしかめよう」を１学期末に取り組んだところ、既習事項である円周を求める問題について立式できていた。立式して円の周りの長さを求める問題についても、半分以上の正答を出すことができた。面積の問題については、正答はなかった。
Ｉ・Ｉ(Ｓ)○	問題場面や課題設定時の教師の発問に対し、積極的に自分の考えを発言しようとする。新しい課題などでは、問題把握を丁寧に行う、解決の見通しを立てる場面を大事に扱いたい。 本単元の「たしかめよう」を１学期末に取り組んだところ、正答はなかった。既習事項である円周を求める問題でも、正答はなかった。単元に入る前に、既習事項の復習をしたい。
Ｉ・Ｉ(Ｓ)○	問題場面や課題設定時の教師の発問に対しては、友達の発言を聞いていることが多い。課題に対してじっくり取り組むことができ、自分の考えを説明することができる。集団解決の場面の前に、自信をもって発言できるように声かけをしたい。 本単元の「たしかめよう」を１学期末に取り組んだところ、正答はなかった。既習事項である円周を求める問題でも、正答はなかった。単元に入る前に、既習事項の復習をしたい。
Ｓ・Ｓ○	問題場面や課題設定時の教師の発問に対し、積極的に自分の考えを発言しようとする。問題が把握でき、見通しがもてると自分で解決できる。見通しをもたせてから取り組ませたい。 本単元の「たしかめよう」を１学期末に取り組んだところ、正答はなかった。既習事項である円周を求める問題でも、正答はなかった。単元に入る前に、既習事項の復習をしたい。
Ｓ・Ｂ○	問題場面や課題設定時の教師の発問に対しては、友達の発言を聞いていることが多い。自信のもてないことがあり、考え方を説明する学習には苦手意識がある。見通しをもたせてから取り組ませたい。 本単元の「たしかめよう」は、欠席のため未実施となった。

４．授業者の主張
①研究内容１との関わり

研究内容１
児童の主体性を促す学習展開の工夫
・学習過程の構築
・目的意識のある課題設定
・効果的な振り返り
・基礎基本の定着

【数学科】
本校では、教科書を使った学習を行っている。教科書を使った学習を行うことで、児童が授業の流れを理解して、学習を進めることができる、流れを理解することは、リーダー学習を行う構成の学習形態において、有効であると考える。
目的意識のある課題設定として、問題把握から課題設定に向かうときに、教科書の課題をただノートに書くのではなく、課題を自分で考える活動を取り入れている。算数科に自信のない児童も多いので、考えた課題は隣同士のペアで交流してから、全体で課題設定を行っている。
まとめでは扱ったが分かったこと・できるようになったことを振り返り、学びの実感をもたせるようにしたい。まとめにおいてもペアで交流してから、全体でまとめていく形をとっている。学びの実感から、次の学びへとつなげていきたい。
基礎・基本の定着のために、単元に入る前には既習事項を振り返り、確認をしてから学習に入っている。また、計算力アップを目的に、全校で朝学習の時間に百ます計算の練習に取り組んでいる。

５．単元の指導計画
【第　５　学年】

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
評価規準	整数の除法の結果は分数を用いると１つの数で表せることや、分数と小数、整数の関係を理解するとともに、a÷bを a/b、a/b を a÷b とみたり、分数を小数で表したり、小数、整数を分数の形になおしたりすることができる。	分数の表現に着目し、分数を整数の除法の結果としてとらえたり、分数と小数、整数の関係をとらえたりするとともに、それらを分数や式を用いて考え表現している。	整数の除法の結果を分数で表したり、分数と小数、整数の関係を考えたりした過程や結果を振り返り、多面的にとらえ検討してよりよいものを求めて粘り強く考えたり、数学のように気づき学習したことを今後の生活や学習に活用しようとしたりしている。

・指導に生かす評価規準　○記録に残す評価規準

時	目標	評価の観点
１本時	整数の除法の商は分数を用いて表せることを理解することができる。	・【知・技】整数の除法の商は分数で表せることを理解している。
２	整数の除法の商を分数で表すことができる。	・【知・技】整数の除法の商を分数で表したり分数を整数の除法の式で表したりすることができる。
３	分数倍の意味について、整数倍や小数倍の意味を基に図を活用して考え、説明する。	・【思・判・表】分数の意味について、既習の整数倍や小数倍の意味と関連づけて考え、説明している。
４	整数の商を分数で表せることを活用して分数を小数で表すことができる。	○【知・技】分数を小数で表す方法を理解し、分数を小数や整数であらわすことができる。
５	小数や整数を分数で表す方法を考え、説明することができる。	○【思・判・表】小数の構成に着目して、小数を分数で表す方法を考え、説明している。

6	学習内容の定着を確認するとともに、数学的な見方・考え方を振り返り価値づける。	○【整理】単元の学習を振り返り、価値づけたり、今後の学習に生かそうとしたりしている。

【第 6 学年】

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
評価規準	円の面積について、求め方や計算で求められることを理解し、円の面積を求める公式を用いて円などの面積を求めることができる。	図形を構成する要素などに着目し、円などの面積の求め方を図や式を用いて考え、説明している。	円の面積の求め方を既習から円の確な表現として公式として導いた過程を振り返り、多面的に捉え検討してよりよいものを求めて取り強く考えたり、数学のように気付き学習したことを今後の生活や学習に活用しようとしたりしている。

・指導に生かす評価規準　○記録に残す評価規準

時	目標	評価の観点
1	円の面積の求め方を考えることができる。	・【整理】円のおよその面積を、単位面積の何二分の考えや円に外接、内接する正多角形などを基にして求めようとする。
2	円のおよその面積を求めることができる。	
3	円の面積を求める公式を理解することができる。円の面積を求める公式を、半径×半径に着目して読み取り、円周率についての理解を深める。	・【知・技】円の面積も計算で求められることを理解している。
4 本時	多様な方法で円を含む複合図形の面積の求め方を考え、図や式を用いて説明することができる。	・【思・判・表】円を含む複合図形の面積について、既習の求積可能な図形の面積を基にして分割して考え、図や式を用いて説明している。
5	単元の学習の活用を通して事象を数理的にとらえて論理的に考察し、問題を解決することができる。	○【知・技】学習内容を適切に活用して前述立てて考え、問題を解決している。
6	学習内容の定着を確認するとともに数学的な見方・考え方を振り返り価値づける。	○【思・判・表】数学的な機能点と考察の対象を明らかにしながら、単元の学習を整理している。 ○【整理】単元の学習を振り返り、価値づけたり、今後の学習に生かそうとしたりしている。

6．本時の指導

（1）本時の目標

【第 5 学年】

【知・技】整数の除法の商は分数で表せることを理解することができる。

【第 6 学年】

【思・判・表】多様な方法で円を含む複合図形の面積の求め方を考え、図や式を用いて説明することができる。

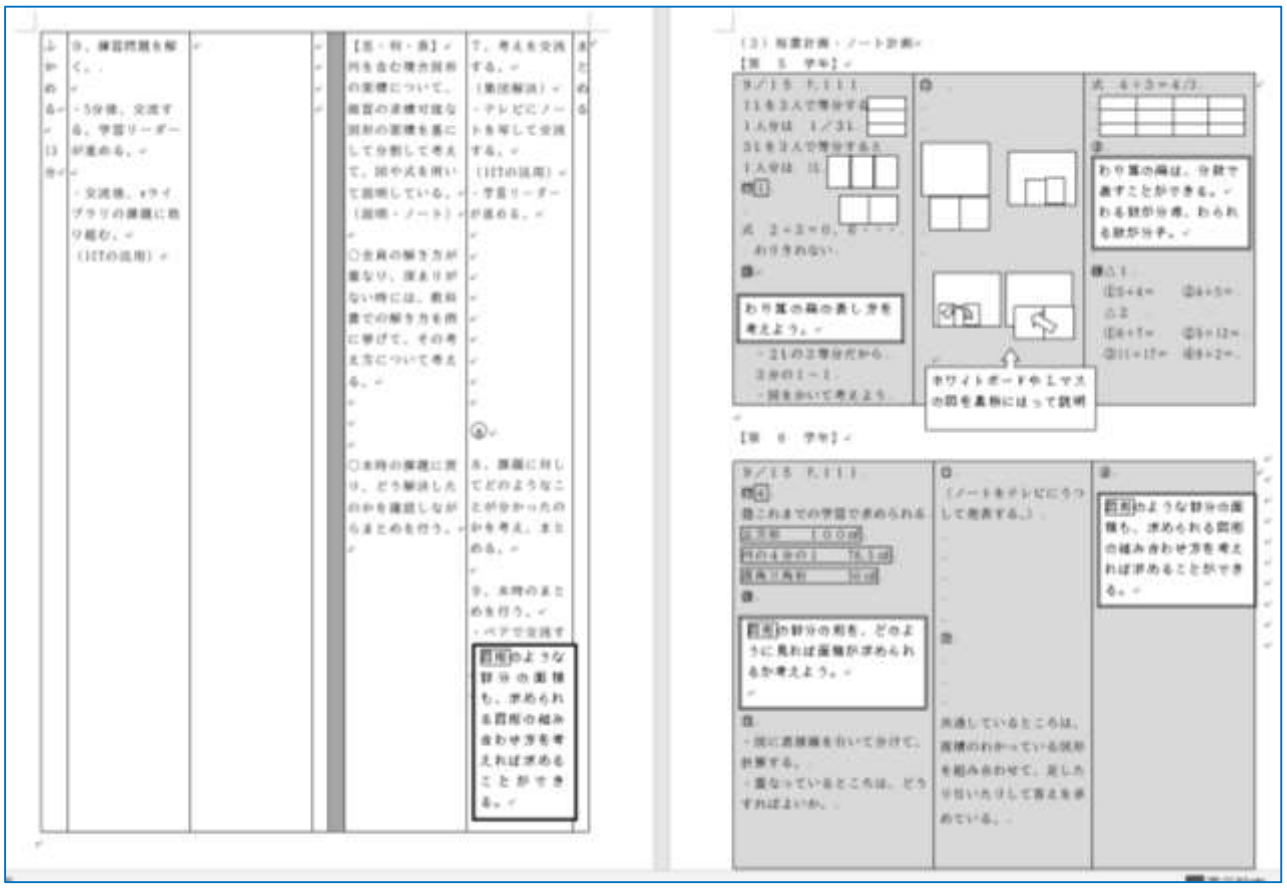
（2）本時の展開

【第 5 学年】　　【第 6 学年】

	学習活動	教師の働きかけ		教師の働きかけ	学習活動	
つかむ・みとおす 10分	1．端面の分数と小数、整数の除法を振り返る。 2．1の問題を主体で読み、問題をとらえる。 ・学習リーダーが進める 3．公式し、課題を考える。 ・ペアで定流をする。 4．課題の把握 わり算の商の表し方を考えよ 5．解決方法の見通しをもつ。	○時間をかけないで、分数が小数で表せること、小数が分数で表せることをおさえる。 ○数直線を提示する。 ○1L、3Lの時のようにわり切れないときは、どう表せばよいかという課題意識を引き出す。 ○これまでの学習から分数なら表せそうだという見通しをもつ。			1．前時までの学習に関わる復習問題について取り組む。 ・4分後定流する、学習リーダーが進める。 ・定流後、タライブラリの課題に取り組む。 （ICTの活用）	ふかめる

		商を分数で表す。 1L マスの図で考える。				
まとめる 12分	6．自分の考えをまとめる。 ・ノートとホワイトボードに自分の考えをまとめる。 ・まとめたら黒板にはりつけ、発表の練習をする。	○ノートに図を書いて考える。必要に応じて1Lマスの図を配布する。		○図を提示する。どんな図形が組み合わさっているかとらえられるようにデジタルコンテンツを使用する。 （ICTの活用） ○これまでの学習をもとにして考えそうな方法を確認する。 図習の面積を組み合わせれば、求められる。長方形、円の4分の1、直角三角形はすぐに求められる。	2．4の問題を主体で読み、問題をとらえる。 ・学習リーダーが進める 3．求め方の計算をたてる、面積が分かる部分を見つけ、その面積を求める。 4．課題の把握 ・ペアで定流をする。 図形の部分の面を、どのように見れば面積が求められるか考えよう。 5．解決方法の見通しをもつ。	つかむ・みとおす

まとめる 12分	7．考えの定流を行う。 （集団解決） ・ホワイトボードを使い、考えを説明する。途中の場合でも、書けたところ（説明できるところ）まで発表する。 ・学習リーダーが進める。 ・4＋3の問題を使って、確かめる。 8．課題に対してどのようなことが分かったのかを考える。 ・ペアで、定流する。 わり算の商は、分数で表すことができる。 わる数が分母、わられる数が分子。	○ホワイトボードにまとめている途中でも考え方の定流を行う。 ・【知・技】整数の除法の商は分数で表せることを理解している。 （説明・ノート） ○一般化するために、4＋3についても扱う。 ○本時の課題に戻り、どう解決したのかを確認しながらまとめを行う。		○作図する時間を確認するために図形をかいたものを用意して、ノートに貼らせる。	6．自分の考えをまとめる。 ・ノートに自分の考えをまとめる。 ・ノートに書き終わったら、発表の練習をする途中の場合も、書けたところ（説明できるところ）まで発表する。	とく・しらべる



【第 5 学年】

【第 6 学年】

第３・４学年算数科学習指導案

日　時　　令和４年　９月　15日　２校時

児童数　【第３学年】男子３名　女子４名　計７名

【第４学年】男子３名　女子０名　計３名

指導者　　吉良　幸雄

１．単元名　【第３学年】「　かけ算の筆算（１）　」

【第４学年】「　わり算の筆算（２）　」

２．単元の目標

【第３学年】

２位数や３位数に１位数をかける乗法の計算の仕方について理解し、確実に計算することや成り立つ性質について理解できるようにするとともに、数学的表現を適切に活用して、乗法の成り立つ性質を活用したり、計算を確かめたりしながら、計算した過程を振り返り、今後の生活や学習に活用しようとしている。

【第４学年】

２～３位数を２位数でわる除法計算について理解し、その計算が確実にできるようにするとともに、数学的表現を適切に活用して計算を正当したり計算の確かめをしたりする力を育うとともに、基本的な計算を基に考えた過程を振り返り、今後の学習に生かそうとする態度を育う。

３．児童の実態

(1)教科に関する学級全体の実態と予立て

３年生が男子３名・女子４名、４年生が男子３名の学級である。

３年生は、積極的に学習活動に取り組む児童がいる反面、算数への苦手意識から発言や活動に消極的な児童も多くいる。特に、問題把握から課題設定までの時間は、教師の発問に対して考えたり発言したりする児童と、やりとりをただ聞いている児童に分かれてしまう様子が見られる。この様子は本時のまとめをする場面でも見られ、教科書に書かれているものをそのまま読んだり、特定の児童の考えたものをそのまま写したりするだけで学びの実感を得られない児童もいる。

４年生は、どの児童も積極的に発言する様子が見られるが、問題把握や課題設定に対しては教科書に書かれているものをただ読んだり教師が提示したものをそのまま書き写したりすることが多く、「どういうことだろう？」と疑問をもったり深く考えたりする児童は少ない。教師の発問に対してはどの児童も自分の考えを発言しようとするが、課題を設定するという意識は薄い。まとめの際も同様に、自分自身で学習を振り返りまとめを考えようとする姿は見られない。

②児童個々の実態と手立て

＜３年生＞

I・T	問題場面や課題設定時の教師の発問に対し、積極的に自分の考えを発言しようとする。教科書のまとめを自分なりに解釈しようとする様子が見られる。「たしかめよう」は、これまで学習したことをもとに自分なりに考えていた。途中の考えを残すことも指導していく。
I・M	問題場面や課題設定時の教師の発問に対し、積極的に自分の考えを発言しようとする。まとめの際には、本時のポイントやキーワードを見つけて発言しようとする姿が見られる。「たしかめよう」は、たし算をもとにして考えていた。かけ算を使うことで計算がしやすくなることに気づかせ、活用できるようにしたい。
S・K	問題場面や課題設定時の教師の発問に対しては消極的で、友達の発言を聞いていることが多い。まとめも板書を写すだけで、学びの実感を得られないことが多い。その日の体調によって学習の取り組み方に差がある。「たしかめよう」は、たし算をもとにして考えていた。かけ算を使うことで計算が早くできることに気づかせ、活用できるようにしたい。
Y・M	理解に時間がかかり、学習の中でつまずくことが多い。問題場面や課題解決時の教師の発問に対しては積極的に発言しようとするが、発問を十分に理解していないために、的外れな発言をしてしまうことが目立つ。まとめは板書を写すだけで学びの実感を得られないことが多い。「たしかめよう」は、難しいという意識から取り組むことができなかった。既習事項を糸口としてやってみようという意識を育てたい。
Y・H	問題場面や課題設定時の教師の発問に対しては積極的に挙手するが、自信のなさも見られる。まとめの際には、本時のポイントやキーワードを見つけて発言しようとする姿が見られる。「たしかめよう」は全く手が出なかったが、取り組んでみようとする意欲は見られた。
Y・H	問題場面や課題設定時の教師の発問に対しては消極的で、友達の発言を聞いていることが多い。友達の発言に対し、自分の考えと同じときには大きくうなずく。異なる発言に対しては首をかしげるなどの反応を見せるが、挙手して自分の考えを発表することは少ない。まとめの際も同じような姿が見られる。「たしかめよう」は、これまで学習したことをもとに自分なりに考えていた。途中の考えを残すことも指導していく。
K・M	問題場面や課題設定時の教師の発問に対しては消極的で、友達の発言を聞いていることが多い。自信があるときは教師と目を合わせたり手を挙げようとしたりするそぶりが見られるが、挙手して発言することはない。まとめは板書を写すだけで学びの実感を得られないことが多い。「たしかめよう」は、予習したことをもとに取り組むことができた。本単元では、計算の工夫ができるよう指導していく。

＜４年生＞

U・T	理解に時間がかかり、学習の中でつまずくことが多い。問題場面や課題解決時の教師の発問に対しては積極的に発言しようとするが、発問を十分に理解していないために、的外れな発言をしてしまうことが目立つ。まとめは板書を写すだけで、学びの実感を得られないことが多い。「たしかめよう」では、問題文から計算に必要な数字が何かを読み取ることが難しかった。問題を丁寧に読ませ、必要な情報は何かを読み取る力を育てたい。
U・A	問題場面や課題解決時の教師の発問に対しては積極的に発言しようとするが、自信がないときや十分に理解ができないときには、課題やまとめの文章を考えることを人任せにしてしまう様子が見られる。「たしかめよう」では、これまで学習したことをもとに取り組むことができた。また、答えを見積もる力が育っている。
S・K	問題場面や課題設定時の教師の発問に対しては積極的に発言しようとするが、間違うことに抵抗があるため、自信のないときや友達の反応が予想と違うと消極的になったり考えることを諦めてしまったりすることがある。「たしかめよう」では、解決の見通しを持つことができた。問題文から計算に必要な数字が何かを考えることが難しかったため、必要な情報は何かを読み取る力を育てたい。

４．授業者の主張

①研究内容１との関わり

研究内容１
児童の主体性を育む学習展開の工夫
・学習過程の構築
・目的意識のある課題設定
・効果的な振り返り
・基礎基本の定着

【両学年】

児童の消極的な姿勢には、自信や興味のなさ、問題場面の理解が不十分であることなどが考えられる。そのため、まずは確実に問題把握させたいと考える。問題場面の把握の際には、学習リーダーに進めてもらい、全員で問題を読み、どのような問題なのかを確認する。その際、どの児童も問題場面を確実に理解できるように、必要に応じて具体物やパワーポイントなどを用いる。

次に、問題場面から課題設定へ向かう際には、前時までとの違う点や本時で解決しなければならないことを確認し、本時の課題を考える。全員で確認する前に、ペアや小グループで課題の中に入れるとよい言葉やどんな文章になりそうかを考える。それぞれが考えたものを交流しながら課題の文章を作ることで、自分たちで課題を考えている実感をもたせたい。

まとめを行う際は、一度、本時の課題に戻り、どう解決したのかを全員で確認することで、キーワードとなる言葉やポイントを思い出させ、それらを用いてまとめの文章を作っていく。課題をつくる時と同様に、全員で確認する前にペアや小グループでまとめの中に入れるとよい言葉やどんな文章になりそうかを考える。そうすることで、自分事として学んだことを振り返ることができるのではないかと考える。

５．単元の指導計画

【第 ３ 学年】

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
評価規準	２～３位数×１位数の乗法の筆算の仕方を理解し、それらを活用して計算することができる。	数の構成や既習の乗法計算に着目し、２～３位数×１位数の筆算について考え、説明している。	２～３位数×１位数の筆算の仕方について、乗法九九などの基本的な計算を基に考えたことを振り返り、数理的な処理のよさに気づき今後の生活や学習に活用しようとしている。

・指導に生かす評価規準　○記録に残す評価規準

時	目標	評価の観点
1	何十、何百に１位数をかける計算の仕方について１０や１００を基に考え、説明することができる。	・【思・判・表】何十、何百×１位数の計算を１０や１００のまとまりや既習の乗法九九に着目して計算する方法を考え、説明している。
2	何十、何百に１位数をかける計算の仕方について１０や１００を基に考え、説明することができる。	・【思・判・表】何十、何百×１位数の計算を１０や１００のまとまりや既習の乗法九九に着目して計算する方法を考え、説明している。
3 本時	２位数×１位数の計算について、数の構成を基に考え、説明することができる。	・【思・判・表】既習の乗法九九などに着目して、２位数×１位数の計算の仕方を具体物や図、式を用いて考え説明している。
4	２位数×１位数（部分積がみな１桁）の筆算の仕方について理解し、その計算ができる。	・【知・技】２位数×１位数の筆算の仕方を数の構成を基に書き方や手順を理解している。
5	２位数×１位数（一の位の数との部分積が２桁）の筆算の仕方について理解し、その計算ができる。	・【知・技】２位数×１位数（一の位の数との部分積が２桁）の計算が筆算を用いて求めることができる。
6	２位数×１位数（十の位の数との部分積が２桁、及び部分積がみな２桁）の筆算の仕方について理解し、その計算ができる。	・【知・技】２位数×１位数（十の位の数との部分積が２桁及び部分積がみな２桁）の計算が筆算を用いて求めることができる。
7	２位数×１位数（部分積を加えたときに百の位に繰り上がりあり）の筆算の仕方について理解し、その計算ができる。	・【知・技】２位数×１位数（部分積を加えたときに百の位に繰り上がりあり）の計算が筆算を用いて求めることができる。
8	３位数×１位数（部分積がみな１桁）の筆算の仕方について、２位数×１位数の筆算の仕方を基に考え、説明することができる。	○【思・判・表】２位数×１位数の筆算の仕方に着目し、３位数×１位数の筆算の仕方を考え、説明している。
9	３位数×１位数（部分積がみな２桁、及び部分積を加えたときに繰り上がりあり）の筆算の仕方について、既習の乗法の筆算の仕方を基に考え、説明することができる。	・【思・判・表】既習の乗法の筆算の仕方に着目して、３位数×１位数（部分積がみな２桁、及び部分積を加えたときに繰り上がりあり）の筆算の仕方を考え、説明している。
10	３つの数の乗法が１つの式に表せることを知り、乗法の結合法則について理解する。	・【知・技】乗法の結合法則を用いて５×２を先に計算するなど、工夫して計算することができる。
11	学習内容の定着を確認するとともに、数学的な見方・考え方を振り返り価値づける。	○【知・技】基本的な問題を解決することができる。 ○【態度】単元の学習を振り返り、価値づけたり今後の学習に生かそうとしたりしている。

【第 ４ 学年】

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
評価規準	既習の除法の筆算の仕方や数のまとまりを用いて２～３位数を２位数でわる除法の計算をすることができる。	数量の関係に着目して、２～３位数を２位数でわる除法の計算の仕方を考え、説明している。	２～３位数÷２位数の除法の計算方法を、既習の除法の計算を基に考えたことを振り返り、多面的にとらえ検討してよりよいものを求めて粘り強く考えたり、数学のよさに気づき学習したことを今後の生活や学習に活用しようとしたりしている。

・指導に生かす評価規準　○記録に残す評価規準

時	目標	評価の観点
1	１０のまとまりを用いて、何十でわる計算の仕方を理解し、説明することができる。	・【思・判・表】１０のまとまりに着目し何十でわる計算の方法を考え、説明している。

2	2位数＋2位数（仮商修正なし）の筆算の仕方を理解し、その計算ができる。	・【知・技】奇数の除法計算を基に2位数＋2位数の筆算を用いた計算をすることができる。
3	2位数＋2位数（仮商修正なし）の筆算の仕方を理解し、その計算ができる。	・【知・技】奇数の除法計算を基に2位数＋2位数の筆算を用いた計算をすることができる。
4	2位数＋2位数の筆算で、過大商をたてたときの仮商修正の仕方を理解し、その計算ができる。	・【知・技】商の見当を用いて、仮商をたて過大商のときの仮商を修正し計算することができる。
5	2位数＋2位数の筆算で、過小商をたてたときの仮商修正の仕方を理解し、その計算ができる。	・【知・技】商の見当を用いて、仮商をたて過小商のときの仮商を修正し計算することができる。
6	除数に着目して、2位数＋2位数の筆算で除数の切り捨てや切り上げを選んで仮商をたてて計算することができる。	・【知・技】除数の切り捨てや切り上げを用いて、仮商をたてて計算することができる。 ○【態度】これまでで書った数感覚を振り返り、学習に生かそうとしている。
7	3位数＋2位数＝1位数の筆算の仮商のたて方を2位数＋2位数の筆算の仕方を基に考え説明することができる。	・【思・判・表】商のたて方に着目して3位数＋2位数の筆算の仕方を考え、説明している。
8・本時	3位数＋2位数＝2位数の筆算の仕方を理解し、説明することができる。	○【思・判・表】既習の除法の筆算の仕方を基に、3位数＋2位数の計算の仕方を図や式を用いて考え、説明している。
9	2位数＋1位数＝2位数の筆算の仕方を用いて、3位数＋2位数＝2位数の筆算をすることができる。	・【知・技】既習の除法の筆算の仕方を用いて3位数＋2位数＝2位数の筆算ができる。
10	商に0がたつ場合（商が何十）の簡便な筆算の仕方や、除数が3桁の場合の筆算の仕方を既習の除法の筆算の仕方を基に考えて、説明することができる。	・【思・判・表】商の見当のつけ方に着目して、除数の桁数が増えても筆算の仕方が変わらないことを考え、説明している。
11	除法の性質について理解する。	・【知・技】被除数、除数の両方に同じ数をかけても両方を同じ数でわっても、商は変わらないという、除法の性質を理解している。
12	末尾に0のある数の除法の簡便な筆算の仕方を既習の除法の計算の仕方を基に考え、説明することができる。	・【思・判・表】除法の性質に着目し、末尾に0のある数の除法の簡便な筆算の仕方を考え、説明している。
13	学習内容を適用して問題を解決する。	○【知・技】基本的な問題を解決することができる。
14	学習内容の定着を確認し、理解を確実にする。	○【知・技】基本的な問題を解決することができる。 ○【態度】単元の学習を振り返り価値づけたり今後の学習に生かそうとしたりしている。

6．本時の指導

（1）本時の目標

【第　3　学年】

【思・判・表】2位数＝1位数の計算について、数の構成を基に考え、説明することができる。

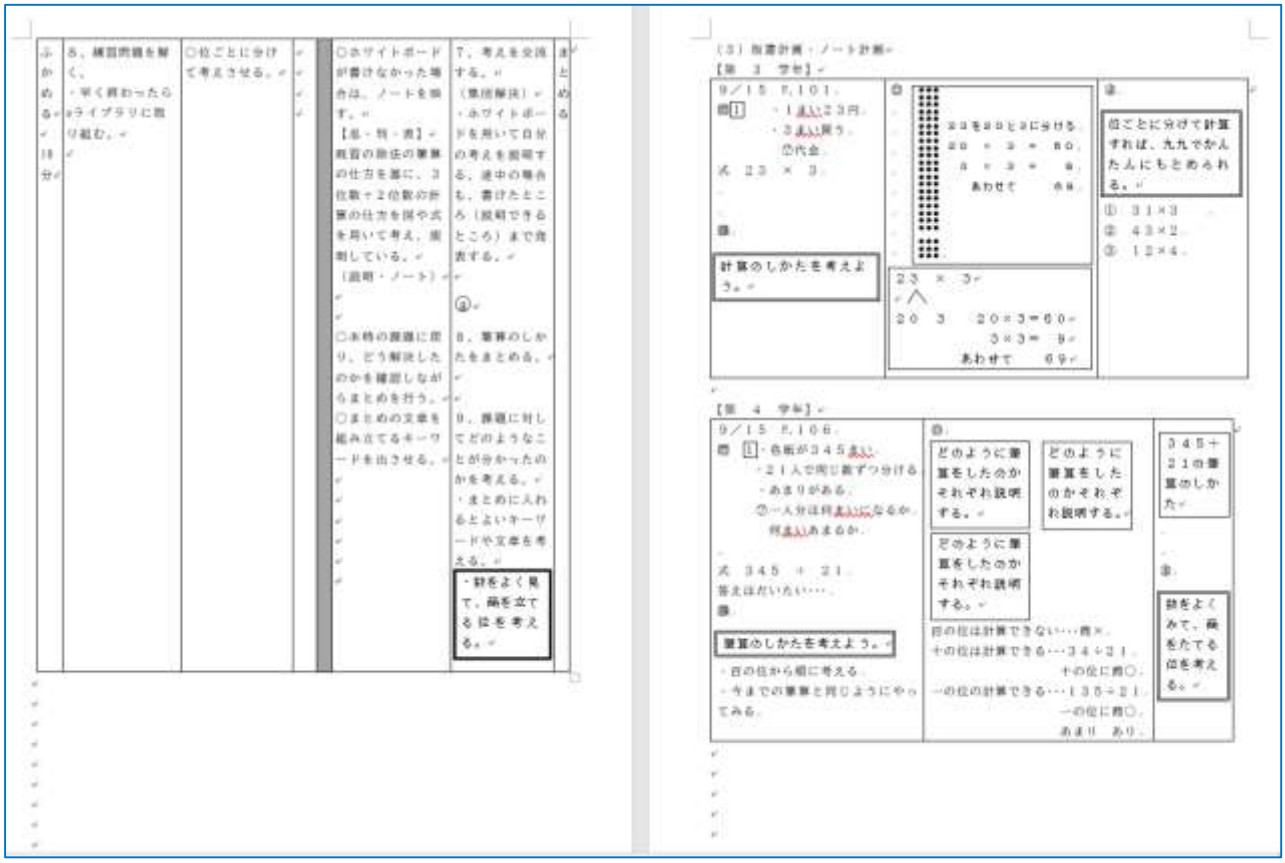
【第　4　学年】

【思・判・表】3位数＝2位数＝2位数の筆算の仕方を理解し、説明することができる。

（2）本時の展開

【第　3　学年】　　【第　4　学年】

	学習活動	教師の働きかけ		教師の働きかけ	学習活動	
つかむ・みとおす 18分	1．1の問題を全員で読み、問題をとらえる。 ・学習リーダーが進める。 2．立式する。 3．課題の把握 ・ペアで課題に入れるとよいキーワードや文章を考える。 計算のしかたを考えよう。	○必要に応じてパワーポイントを使って提示する。 ○問題場面からどのような式になるのか考えさせる。 ○ペアで話し合わせ、課題の文章を組み立てるキーワードなどを出させる。			1．前時までの学習に関わる復習問題に取り組む。 ・学習リーダーが進める。 ・早く終わったら、ライブラリに取り組む。	ふかめる
	4．解決方法の見通しをもつ。	○前時までとの違いを確認しながら本時の課題を明確にする。 ○これまでの学習から使えそうな方法を確認する。 23のままだと九九は使えないが位を分けると九九が使				
とく・しらべる 10分	5．自分の考えをまとめる。 ・ノートに自分の考えをまとめ、ホワイトボードに書く。 ・まとめたらペアの友達と発表の練習をする。			○必要に応じて具体物を提示する。 ○問題場面からどのような式になるのか考えさせる。 ○課題の文章を組み立てるキーワードを出させる。 ○前時までの学習との違いについて確認する。 ○これまでの学習をもとに、使えそうな方法を確認する。	2．1の問題を全員で読み問題をとらえる。 ・学習リーダーが進める。 3．立式し、答えを見積もる。 4．課題の把握 ・課題に入れるとよいキーワードや文章を考える。 筆算のしかたを考えよう。 5．解決方法の見通しをもつ。	つかむ・みとおす
まとめる 13分	6．考えの交流を行う。 （集団解決） ・ホワイトボードを使って、考えを説明する。途中の場合も書けたところ（説明できるところ）まで発表する。 ・学習リーダーが進める。 ・P．102の考え方のどれと自分の考えが似ているのかを確認する。	○ホワイトボードが書けなかった場合は、ノートをテレビに映す。 【思・判・表】 既習の乗法九九などに着目して2位数＝1位数の計算の仕方を具体物や図、式を用いて考え、説明している。 （説明・ノート） ○考え方の共通点を考えさせ、まとめにつなげる。		10の値を選びやも分けられる。	6．自分の考えをまとめる。 ・ノートに自分の考えをまとめて、ホワイトボードに書く。 ・書けたら発表にはり、発表の練習をする。さらに、友達の考え方の予想をする。	とく・しらべる
	7．課題に対してどのようなことが分かったのかを考える。 ・ペアでまとめに入れるとよいキーワードや文章を考える。 ほごとに分けて計算すれば、九九でかんたんにもとめられる。	○本時の課題に戻り、どう解決したのかを確認しながらまとめを行う。 ○ペアで話し合わせ、まとめの文章を組み立てるキーワードなどを出させる。				



ふかめる 18分	8、練習問題を解く。 ・早く終わったらライブラリに取り組む。	○位ごとに分けて考えさせる。		○ホワイトボードが書けなかった場合は、ノートを開き。 【思・判・表】 既習の除法の筆算の仕方を基に、3位数÷2位数の計算の仕方を図や式を用いて考え、説明している。 （説明・ノート） ○本時の課題に戻り、どう解決したのかを確認しながらまとめを行う。 ○まとめの文章を組み立てるキーワードを出させる。	7、考えを交流する。 （集団解決） ・ホワイトボードを用いて自分の考えを説明する。途中の場合も、書けたところ（説明できるところ）まで発表する。 ④ 8、筆算のしかたをまとめる。 9、課題に対してどのようなことが分かったのかを考える。 ・まとめに入れるとよいキーワードや文章を考える。 ・計をよく見て、商を立てる位を考える。	まとめる

（3）板書計画・ノート計画

【第 3 学年】

9／15 P.101

問1 ・1まい23円。
・3まい買う。
⑦代金。

式 23 × 3

答

計算のしかたを考えよう。

23 × 3
20 3 20×3＝60
3×3＝ 9
あわせて 69

23を20と3に分ける。
20 × 3 ＝ 60
3 × 3 ＝ 9
あわせて 69

位ごとに分けて計算すれば、九九でかんたんにもとめられる。

① 31×3
② 43×2
③ 12×4

【第 4 学年】

9／15 P.106

問 1 ・色紙が345まい。
・21人で同じ数ずつ分ける。
・あまりがある。
⑦一人分は何まいになるか。
何まいあまるか。

式 345 ÷ 21

答えはだいたい……

答

筆算のしかたを考えよう。

・百の位から順に考える。
・今までの筆算と同じようにやってみる。

どのように筆算をしたのかそれぞれ説明する。

どのように筆算をしたのかそれぞれ説明する。

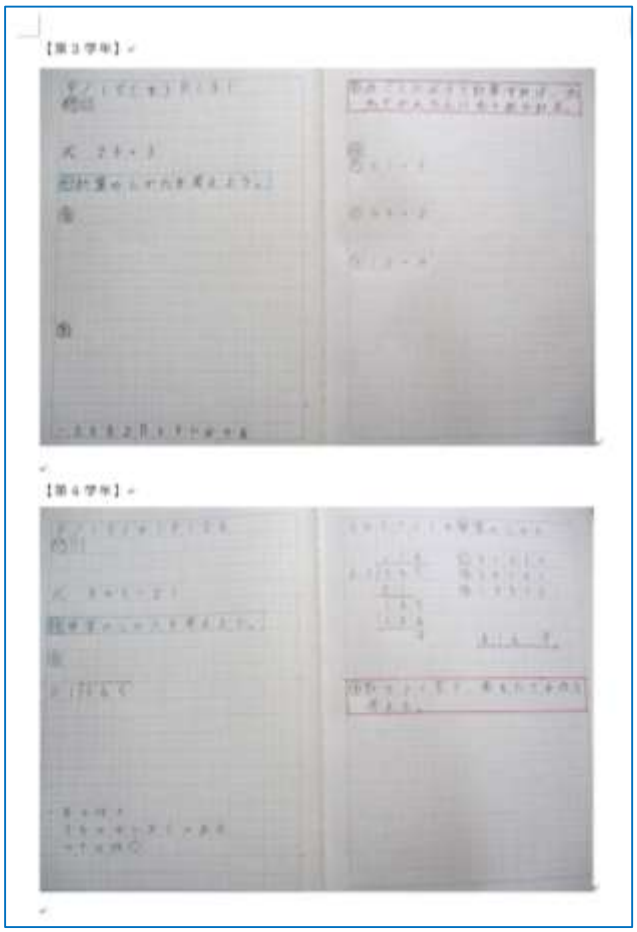
どのように筆算をしたのかそれぞれ説明する。

百の位は計算できない…商×。
十の位は計算できる…34÷21。
十の位に商○。
一の位の計算できる…135÷21。
一の位に商○。
あまり あり。

345÷21の筆算のしかた

⑧

計をよくみて、商をたてる位を考える。



【第3学年】

【第4学年】

８　研究協議

（１）授業者から

奈良　美里　教諭

【３年生】

○課題把握はスムーズにできた。普段口数が多くない児童もがんばっていた。

●十と一の位で分けて考えられなかった児童がいたので、もっと丁寧に見通しをもたせればよかった。

●児童からもう少しキーワードを出させてからまとめをしたかった。

【４年生】

●３人の考えがばらばらのままだった。一の位に商を立てていた児童もいて、見通しのところで、具体物を提示していれば、十の位に商が立つことが実感できていたのかもしれない。

○授業時間は少し過ぎてしまったが、子どもたちはがんばって学習に取り組んでいた。

小保内　知博　教諭

【５年生】

○単元の最初の時間。前学年の振り返りなど時間がかかるとおもったが、短時間でできた。自分達で本時の学習課題も立てることができた。

●図をかくときに、もっと細かい指示ができていればスムーズにいったと思う。

●提示した２Ｌの図がくっついていたので、児童が迷ってしまった。

○間違った答えも出ていたが、話し合いを通して解決ができてよかった。

【６年生】

○学習が進んでいたので、今日もすぐ見通しが立った。すぐに学習が始められた。

○図形が苦手な６年生ができていた。学習内容が理解できていたと思う。

○ずらしの時間に、教科書に載っているｄコンテンツを活用して、学習ができていた。

●プリントが終わった後の指示が抜けていた。授業者が言わなかったので、児童は黙って待っていた時間があった。

（２）協議内容

討議の柱１　目的意識のある課題設定 ・児童は既習事項や今まで身に付けた数学的な見方・考え方を生かしながら、課題を自分事としてとらえているか。

（３年生）

参観者：課題を考えるところで、児童同士で話し合いをしたり、先生がつぶやきを拾っていたりするところがよかった。

司会者：すぐ全体発表では抵抗を感じる児童もいるので、グループやペア交流をはさむようにしている。

参観者：既習事項を確認した上で今までと違うところを見つけさせたので、児童もどう考えたらいいか明確になり取り組みやすかった。

担任　：課題は教科書に書いているが、今日はどういう学習なのかはっきりさせるような問いかけ方をしている。

参観者：どんな問題かを把握する場面も学習リーダーが進めていた。

担任　：文章問題で分かっていることは何か、求めることは何かというのは必ず確かめるので、それを学習リーダーが問いかければ、自分たちで授業をつくっているという思いがもてる。

司会者：学習リーダーのマニュアルについてはどうだったか。

担任　：左と右に分けて、左がやることで、右がそのときの言葉というようにつくっている。マニュアルをそのまま読むのではなく、自分で言う言葉を考えている児童もいる。

参観者：課題を立てるときに「キーワード」を児童に出させようとしていたが、児童から出てくるのは文章になっていた。ホワイトボードにキーワードを書かせてその中から選んでみるのもいいのではないか。私の出した言葉が課題に使われたという思いになってくると思う。そのキーワードが、学習用語にもつながってくる。

参観者：ホワイトボードに書いたことを写真に撮っておくと、学習したことを振り返るときなどに使える。

参観者：どのソフトや機械を使おうとキーワードを記録に残す意義は大きい。ただ、ペアワークが機能しているからそのわいわい感も大事で、みんなが画面に注目しすぎるのはもったいない。

（４年生）

参観者：既習事項の振り返りなどが子どもたちの声で進められているところがよかった。

参観者：１時間の授業の中でもできるようになったことが実感できるようにもっていけるといい。

参観者：４年生も前時の学習のときに、本時と同じような具体物を使っておけば、前の学習を思い出して考えることができたかもしれない。

参観者：本時の評価規準は「思考・判断・表現」なので、折り紙の束を使って筆算の仕組みが話し合われたのはよかった。
参観者：私の学校では学習リーダーは輪番ではなく教科で固定している。リーダーだけが分かって進めるのではなく、周りと一緒に進めていくことを大事にしている。

（５年生）
●課題づくりを子どもたちが話し合って決めていた。
担任　：４人の中で決めていきたいと考えている。
今日の授業では、子ども達が課題を話し合って決めていた。
参観者：課題を自分で話して決めていくのは凄い。主体性を育てる手段の一つなのだと思った。
参観者：課題作りに大切な考え方は、「前回と違う」がキーワード。
参観者：これまでと違う部分を取り上げることが本時の課題作りにつながる。
参観者：本時のゴール（学習のまとめ）を先に見せてからだと立てやすい。
出だしの言葉（定型句）を使うと考えやすい。

●課題づくりの見通し
司会者：見通しについてはどうか。
参観者：ワークシートはうまくいかなかったと担任は言っていたが、子どもが課題に取り組む際に困らない状態＝始まったらすぐできる「よーいどん」の状態を丁寧に作っていたことがよかった。
参観者：既習事項の振り返りが丁寧だった。そこを押さえたので、子ども達は何を考えるべきかわかってできていた。
参観者：課題提示で、１Ｌが２つくっついていたから、児童の思考が２／３ではなくて、２／６になってしまった。
担任　：わたる前、課題設定前に２／３の定義の確認をやっておくべきだった。
参観者：教科書は２／３と２／３の図がくっついているが、「１Ｌ」も教科書の図に記載されているので、教科書通りに「１Ｌ」の提示をした方がよかったかもしれない。
担任　：教科書をそのまま使ったつもりだった。２／３と２／３を離して提示するのも一つの手。

（６年生）
担任　：全員発表させようと考えていた。ホワイトボードにかくと時間がかかるので、実物投影機を活用して発表をさせた。児童の中には図形が苦手で課題となっていた子もいた。前時までの既習事項の確かめをしても、学習内容に手がつかない感じの子もいた。前回の演習を覚えていない子もいた。そこで、面積の公式を学習した後、宿題を何回も出して練習させた。他の子達の中には、あの問題の形が出てきたときにすでに解き方の見通しができていた子もいた。

●リーダー学習と見通しについて

参観者：見通しについてだが、初めに説明する際、解法を説明していた感じもした。

参観者：私は、教科書を使って学習を進めている。この教科書は大変使いやすいので、リーダー学習に向いている教科書のつくりだと思う。教科書を見ると、見通しがもてる。今日の子ども達の中では、学習するページの後ろのページを見て１００％理解できていた子もいた。担任や誰かが教えてあげないとできない子もいるが、子ども同士で教えあうことで、できるようになるのではないかと思う。

参観者：リーダー学習を行うために、タイマー設定は自分達でさせている。まずは交流を行い、互いの考えについて理解を深める。その後、自分の考えを深める時間を作る。本日の流れについては、メモ書きでもいいから、黒板などに授業の流れを書いておくと、リーダーが司会進行をして学習することができる。

参観者：普段、自分のクラスでは特別リーダーは設けていない。授業中も自由に立ち歩いて交流している。できた人同士が交流するようにしている。とにかく考えを伝え合うことを心がけさせているし、間接指導の時間でもできている。

参観者：子ども達同士で助け合い精神が生まれて、学級経営的にもよくなるのではないか。

担任　：近くの人と話し合うことにしている。自力解決、振り返りでも相談している。

討議の柱２　効果的な振り返り ・児童は一人一人学んだことを能動的に振り返りながらまとめをしているか。

（３年生）

参観者：「位を分ける」というキーワードが随所に散りばめられていたので、まとめのときにみんなが納得できたのだと思う。

参観者：発表でニュアンスが微妙に異なることがある。いつも「同じです」ではなくて、別の言葉で言い直すことがあってもいい。

担任　：疑問に感じても言わないときがあるので、発表の指導もしていきたい。

（４年生）

参観者：リーダーとフォロワーのいい関係ができあがってきている。

参観者：間違ったことが共有できているところがよかった。まとめにもつながっていた。

担任　：子どもたち同士が間違っていても言いやすい関係になっている。

参観者：３人とも出た答えが違っていて、自分の答えが正しいとなっていた。友だちはどう考えたのかなと想像しながら聞けるようになるといい。

参観者：「自分の答えと違うけど何で違うのだろうね。」という投げかけがあるといい。

参観者：時間配分という点で、同時間接指導にしたり、単元計画で工夫できたりするといい。

（５年生）

●リーダー学習について

司会者：一人一人で自力解決していたが、相談する時間はどうだろう？

参観者：男女で話し合いのグループが分かれてしまっていたのではないか。ここはもっと男女が混ざって話し合いをした方がよいのではないか。何か意図があるのか。また、この時、リーダーの役割を受け持つ児童はいたのか？

担任　：今までの授業の中で、リーダー学習の中で進めるなど行ってきた。まだ５・６年生のリーダー学習の内容としては、正直進め方など定着していない部分もある。

参観者：３・４年生はファシリテーター役をしていた児童もいたが。

担任　：日替わりでやっていて、練習中である。児童によってはまだリーダーとしての力量には差がある状態である。

●ワークシートの活用について

司会者：ワークシートの活用方法については。

参観者：ノートやワークシートに書いたものを交流するためには、実物投影機をよく使っている。ホワイトボードに書きなおす場合、時間と手間がかかるので、大変である。また、そのままでは記録に残らないため、ホワイトボードに書いた場合は、その写真を自分で撮らせて、印刷は担任が行い、ノートに貼らせている。
今回、６年生は実物投影機でテレビに映像を映していたが、何を説明するのか？内容指示があいまいだったと思う。ノートをそのまま、見せることで、児童の思考の経路を見せることも効果的な活用と言える。

司会者：振り返りが音読だったのか？他にも児童の思考が深まる手立てとかは？

参観者：ホワイトボードの仲間分けを行うことも効果的である。黒板に貼る時に最初から振り分けて貼らせたり、黒板に貼ってからまとまりごとに仲間分けをして貼らせたりすると、思考の振り分けができ、児童の間にも交流が自然と生まれる。

司会者：思考が深まる手立ては？

参観者：説明するときには、まず何をしたのか、どんな方法で解いたのかを明確に。内容によっては、その部分で比較ができるので、思考を深めることができる。教室の掲示にあった「は・か・せ」の活用を自分のクラスでも行っている。まとめも友だちの意見を聞いたり、自分の考えを深めたりして、最終的に自分が納得できたものを振り返りで書かせることが有効である。答えというゴールは一緒でもそれぞれの児童によって解き方が違うことがあるし、解き方が同じであっても全く表現まで同じことはないので、表現方法のちがいにも着目させている。

参観者：復習とか振り返りとかは、児童に「前回は何を学習しましたか。」と問いかけることから入っている。そうすると、自然と前時のつながりを意識して、思考が徐々に深まっていく。それらを集約して、先生がまとめる。

参観者：児童からキーワードを引き出すことに時間をかけて取り組んでいる。

●教科書の図の活用について

参観者：分数でいうと上÷下。これは本時の中でも、それまでの学習の積み重ねで理解ができている。しかし、ここにきて、１Ｌを割るという量感に関する実感や意識が薄いのではないか。１／３について、水や重さなど、実際の量感と数（分数）とのつながりをもつことが必要である。

参観者：先ほどの話と同じですが、教科書に１Ｌと書いてある通りに押さえればよい。本時の学習において、何が大事か、何を提示すべきか担任が押さえておくとよい。知識・技能の目標課題と指導案に書いてある。であれば、今回の授業では、知識面では何を、技能面では何を押さえるべきなのかはっきりとすると指導につながる。

担任　：図を通して考える必要があったと考えていた。教科書の通り押さえていた。量感については、お話ししていただいたことは、そうなのかなと思う。学習内容をはっきりさせるためには、前学年からの学習の続きでもあり、内容を詰め込みすぎた感があった。盛沢山になってしまった。

（６年生）

●デジタルコンテンツとホワイトボードの扱い

司会者：デジタルコンテンツの効果的な使い方について情報交流を。

担任　：今日は見通しをもってできていた。自分達で進んで使う場面もあった。

参観者：アナログの図やデジタルの活用、どちらを使うかの選択肢があるのがいい。図やデジタルなどで使ったもので説明できるとよい。

参観者：今日の授業では、発表の時、テレビを使うことも指導案にあったが、普段、ノートに説明を書いたことを実物投影機などで発表に使うことはしているのか。

担任　：ホワイトボードには口頭で説明できることは書かない。必要なことを書くことにしている。

参観者：自分の学級では、デジタル教科書を使っている。何かしら見せながら授業に活用している。

司会者：発表する時に気をつけていることは。

参観者：「何で」発表するかではなく、「何を」「誰に」発表するのか、相手意識をもって、どうやって伝えるのかが大切だと思っている。

参観者：「途中でも発表すること」「相手と意見を合わせれば考えがまとまる」と指導している。

（３）参観者の声

１　公開授業について

・図やタブレット端末のソフトなど、自分の考えやすい方法で選択して考える姿が、さすが高学年だと感じました。
・課題設定の場面とまとめ振り返りの場面で、児童の主体性を育てようとする意図を感じる授業でした。
・今日の授業での課題設定や、子どもたちの声で学びが進む様子を見させていただき、とても勉強になりました。

２　研究内容について

・来年、リーダー学習について、さらに鍛えられた子どもたちを見るのが楽しみです。
・「たしかめよう」を先に取り組んで、自分事としてとらえているのがおもしろかったです。
・リーダー学習の課題点から、改善の手立てを探り研究をすすめている部分など、今後の校内研究に生かしていきたい視点がたくさん得られました。

（４）助言者より

【北海道立教育研究所研究部研究研修主事　佐藤昭彦　様】

リーダー学習とは､学級の児童が学習リーダーとなり主体的に学習を進める方法である。間接指導の際に児童が学びを深める一助となる。

課題設定や振り返りについては、学びの実感が重要である。①児童生徒の興味関心を高め②見通しをもたせる③自分事としてとらえ自分と結びつける④粘り強く取り組む⑤振り返って次へつなげる。その過程を通して、学んだ手ごたえとなり、学ぶ意欲から学ぶ意思につながっていくと言われている。

目的意識をもたせるには、学ぶ対象は何かが重要になる。実社会や実生活にかかわることや、体験活動を通して得たことをつなげていくと、横断的な学習にもつながるし、新たな学びをしたいという意思にもつながっていく。

自分自身の学びや変容を自覚できる場面を設定することも重要になる。自分の思いや考えを結びつけ、習得したり活用したりするというループができあがり、発展的な学習につながっていく。

二人の先生達は、児童と一緒に授業をつくろうとしていた。課題をどうするかということで、児童からキーワードをひろっていき、児童の学びの実感や意欲につながっていた。

児童が自己調整しながら学習を進めていくためには、教師がどのような手立てをとっていけばいいか。児童の特性や学習到達度に応じて、適切な指導方法をとり学習内容の定着を図っていくことになる。

指導の個別化の実践の１つとして､「計算問題が１番から１０番まであり、その問題の間違いやすい理由を考える」というのがあった。一人一人が注目した問題が違うので、いろいろな視点で振り返ることができていた。共有していく中で対話が生まれる良い実践だと感じた。

ＩＣＴの活用も注目されている。児童が、ＩＣＴを文房具として自由な発想で活用できる環境を整えて、その上で教師は授業をデザインしていく。ただＩＣＴ活用と言っても、効果的な使い方はどこなのか厳選して使っていくことが必要と言われている。書いたことを写真に撮って共有したり、発表を録画したりして共有することも考えられる。

学びを進めていくために、協働的な学びも重要である。１人１人の良い点や可能性を多様な他者と協働して深めていく。異なる考え方が組み合わさることで、よりよい学びが生み出されていくことになる。４年生が３人でわり算の筆算の解き方を話し合っていたが、間違っても大丈夫だよという学級風土がすばらしい。協働的な学びをリーダー学習と両輪で進めていくことでさらに子どもたちの力が伸びていくのではないかと思う。

個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させていくことが求められる。各教科の特性に応じて児童の実態をふまえて、カリキュラムマネジメントの視点で取り組むことが求められる。主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善が、持続可能な社会の作り手を育てることにつながっていく。

【道へき研究推進委員副委員長　今金町立種川小学校　黒川貴功　校長】

課題やまとめを児童が自分たちで行うということは、アウトプットすることを前提として学びが進むということである。アウトプットを通して児童の思考が深まる。

４年生の児童の発表は、間違っていたかもしれないが、自分の思考を伝えようとしていたところがすばらしかった。それに対して周りの児童も意見を重ねていた。

６年生で自分の言葉で課題を立てられている児童もいた。

リーダー学習の課題点を洗い出し、それに対する解決策が細かく丁寧に研究紀要の中にまとめられている。

授業研究で基本となることは、子ども達の思考に寄り添い、気付きやつまずきを教師が想定することである。

リーダー学習は間接指導時のみのものと考えられがちだが、先生がいても違和感なくリーダー学習が進められていた。リーダー学習への先生のサポートもできていた。

子どもたちの思考に寄り添った授業が進められている。子どもたちに安心感を与える授業展開になっていた。

リーダー学習は、小規模校だけでなく大規模校や中学校でも、主体的・対話的で深い学びを構築する上で１つの方法として位置付けられると考える。

9　成果と課題

（成果について）

①研究の方向性や取組について

・参観した先生達から、「持ち帰って取り入れてみたい」「来年、子どもたちがどう成長しているか楽しみだ」という声があった。研究の１年次ということで、少し不安があったが、自信をもって取組を進めていきたい。

②学びの見通しと学びの実感について

・課題や見通しについては、数学的な見方・考え方を意識することで、効果的な手立てがとられていた。それに合わせて、ＩＣＴを含め解決の方法がいくつか用意されていたし、教材の準備もできていて良かった。

③単元全体の見通しと振り返りについて

・単元の見通しとして、「たしかめよう」の最後の問題にチャレンジさせるのを続けていく。また、後輩に向けて書いた振り返りも蓄積していき、来年度に還元していく。

④配信について

・入念に準備を重ねたことで、当日は大きなトラブルもなく無事に配信することができた。オンラインの参加者から、もっとこんな映像が見たいということがあれば、できる限り対応していきたい。

（課題について）

①必ず全員が発表しなくてもいい

・参観した先生から「発表を聞いてない児童がいる。」との指摘があった。同じような発表をただ繰り返すだけでは、新鮮味がないし時間の無駄使いになる。
何を使って誰に向けて発表するのか、その目的を明確にして発表させるようにしていく。

②小わたりを入れる

・「待機時間が長い」という指摘があった。本校では、「同時間接指導」は取り入れていないが、必要に応じて小わたりも入れていく。
ただ、指示を出し忘れたりどうしても渡れないこともあったりする。学習リーダーを育てておくと、そういう事態にも対応できる。

③教科書の内容を吟味する

・図の提示不足で、５年生が２Ｌを３等分したら、６分の２Ｌになると答えてしまった。教科書では、２Ｌを３等分にしたあとさらにそれを１Ｌマスに入れるという手順を踏んでいた。
３年生の教科書では、２３×３の計算で、一旦、２０×３と３×３を書いて、その答えを合わせるという手順を踏んでいた。

教科書は児童のつまずきについても想定した内容になっているので、しっかりとその内容を吟味して授業をつくっていく。

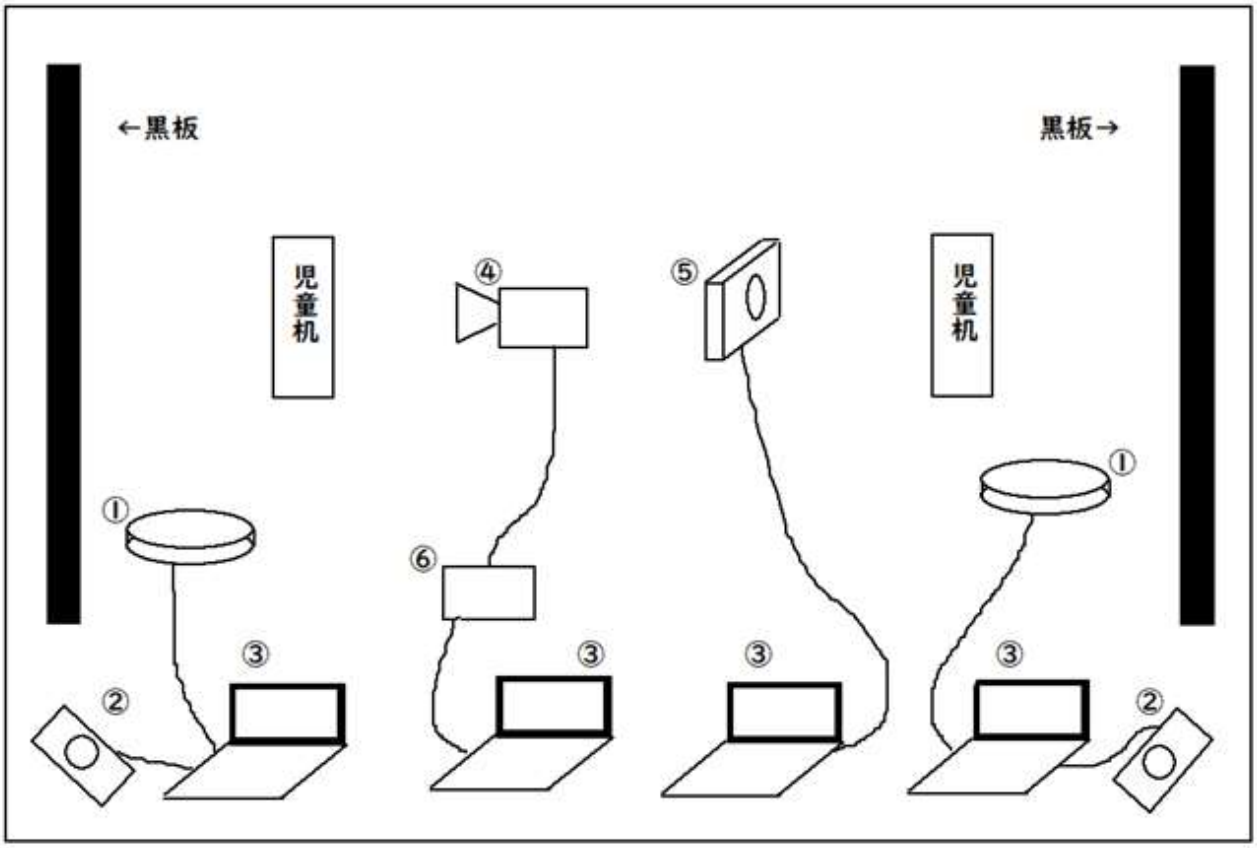
④計算力の向上について

・計算力は、算数科の力を下支えする大切な力であるが、一方で個人差も大きい。1分間計算プリントなどを用いて、個別最適な学びができるようにしていく。

苫小牧市立樽前小学校　配信状況

1　教室

（1）配信図



（2）配信内容・機材

記号	撮影内容など	機材
①	教師や児童の声を拾う	マイクスピーカー
②	児童の様子を映す	Ｗｅｂカメラ
③	ＺＯＯＭで配信する	ノートパソコン
④	黒板を映す	ビデオカメラ
⑤	黒板を映す	デジタルカメラ
⑥		ビデオキャプチャーボード

（3）配信方法および状況

①ハウリングをおこすので、教師がわたっているときだけスイッチをＯＮにするようにした。

②児童全員の様子が映るように壁に設置した。

③ＺＯＯＭでは４画面で映す。また、参観者が見たい画面を拡大できるようにもした。

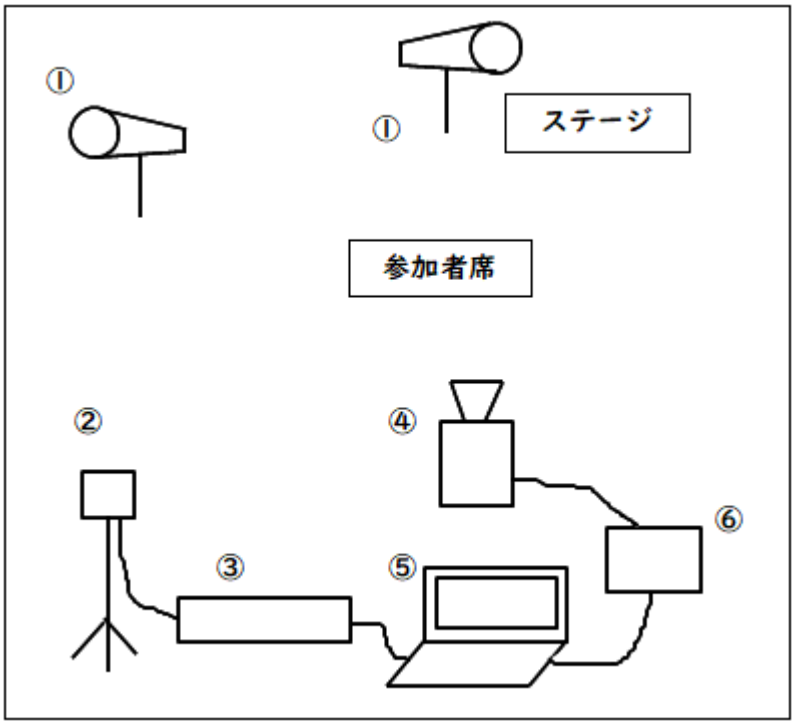
④Ｗｅｂカメラよりもきれいに映すことができる。

⑤Ｗｅｂカメラとしても使えるデジタルカメラだった。

⑥パソコンに映像を取り込むために、ビデオカメラとノートパソコンの間にはさんだ。

2　体育館

（1）配信図



（2）配信内容・機材

記号	撮影内容など	機材
①	ステージ用と司会者用	ワイヤレスマイク
②		ワイヤレスアンテナ
③		ワイヤレスチューナー
④	ステージ全体を映す	ビデオカメラ
⑤	ＺＯＯＭで配信する	ノートパソコン
⑥		ビデオキャプチャーボード

（3）配信方法および状況

②・③　①のマイクの音はチューナーを通すことにした。

（ビデオカメラから音声を拾うよりも明瞭になった。また、教室で配信する際に使用したマイクスピーカーを使うと聞きづらかったが、この問題も解消することができた。）

第 71 回

全道へき地複式教育研究大会 胆振大会

Ⅳ　胆振大会を終えて

第４分科会　苫小牧市立樽前小学校

第７１回　全道へき地複式教育研究大会　胆振大会ファーストステージを終えて　大会振り返り

1　研究大会について

（1）参加状況

今大会は新型コロナウイルス感染症の影響を受けながらも、「学びを止めない」の考えから、人数制限を考慮するなど感染対策を図りながら、参集型とオンライン配信並行のハイブリッド型で実施した。分散会参加者は 91 名（オンライン 35 名）、分科会参加者は 190 名（オンライン 46 名）となり、多くの皆様に参加いただいた。

（2）参加集約

コロナ禍による分科会の収容人数の制限を設けたため、道外、管外、管内と申込時期を分けてフォームにより受け付けた。このことにより、業務が複雑となり、参加集約に時間を要した。また、参加申込期限が、夏期休業期間と重なったこともあり、追加の申込も見られた。次年度は、フォームでの同時期一括受付とし、申込時期についても検討のうえで設定していく。

（3）大会運営

【1日目　全体会】

・洞爺湖文化センターを会場に、開会式、講演会、分散会を実施した。コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、交流会は中止とした。
・開会式と講演会についても、定点によるオンライン配信を実施した。
・分散会の運営は道へき研究推進委員学習指導部長が中心となり、事前のシナリオ提示や役割連絡、当日の運営など一切を行っていただき、スムーズに実施された。討議も熱心に行われた。オンライン配信もトラブルなく実施できた。次年度、参加者が増える場合は、会場の検討が必要となる。

【2日目　分科会】

・公開授業や各校研究の内容については、一定の評価とともに多くのご示唆を頂戴し、今後の各校および管内の研究の成果と課題の把握につなげていく。
・コロナ対策もあり、授業会場を体育館等広い場所に設定する必要があった。感染対策を講じたうえで参観者の密を避けるような会場設定が必要であった。
・オンライン参加者向けの授業配信は、洞爺湖文化センターを配信本部として実施し、大きなトラブルなく実施できた。ライブ配信では、オンライン参加者それぞれの視点で参観できるように各会場２画面または４画面で配信した。表情の見えづらさや声等音声の聞こえづらさはあったものの、概ね学習の様子や児童の思考を伝えることができたと考える。また、協議に参加できないオンライン参加者向けに研究協議の配信も実施した。

【配信関連】

・洞爺湖文化センターで、配信に関わるデータの一元管理を行った。トラブルがほとんど無かったことと分科会会場の負担軽減の面から、有効であった。
・必要機材の集約と手配をもっと早めに進めておく必要があった。（特に配信機器に関わって）

・全体会、分散会のオンライン参加者からの音声不明瞭の指摘があった。今後、協議中の音声について、集音マイク等の機材の整備が必要である。

【連絡手段】

・LINEworks による連絡・情報交換は、遠隔地でもタイムラグが少なく効果的であった。道へき・全へきとの連携を、これまでの大会よりも取る事ができた一因となった。

（4）運営費用

・本大会の運営は、道へき複連からの助成金および胆振へき複連からの運営費を基本に行った。その他、加盟校のある各市町からの補助金を運営費に充てた。各市町補助金については、胆振へき複連からの要請や管内教育長協議会への働きかけによるもので、今後も関係機関との連携の必要性を感じた。

・大会研究紀要の印刷製本や各校での研究紀要および指導案等の用紙等を含めた印刷費が当初の想定よりも大きくなった。道へき複連ホームページに、オンライン参加者向けの研究紀要や指導案等、大会後の研究記録を掲載することで費用削減を図った。

（5）その他

・今年度の胆振管内加盟校は 13 校であるが、来年度は 10 校の見込みとなり、この先も減少することが予想される。そのような状況で、これまで積み重ねてきた研究成果と新たな ICT 活用による取組を生かし、本大会を開催できたことは大きな意味があったと感じている。本大会の成果や課題を大会運営や各校の研究に反映させ、更なるへき地・複式教育の充実発展を目指し、来年度のファイナルステージに向けて取組を進めていきたい。

・配信技術や機材選定、映像の画面構成等の工夫などは大いに学びとなり、児童生徒にも還元できる部分が多いと思われる。音声対策をさらに工夫し、オンラインでの協議参加も模索できると良い。

2　各分科会の成果と課題

※各会場校の成果と課題の抜粋

第1分科会　とうや小	成果	・ICT を活用することにより、時短やスムーズな授業進行に役に立っていた。 ・児童が ICT に慣れることで、意見交流がスムーズに行えていた。自分の意見に自信がもてない児童にとっては友達の意見を気軽に参考にできる環境が作られていることはとても良い。 ・リーダーによる学習の進め方に子どもの成長が感じられる。リーダーを育てることで、複式で担任が離れたときにも学習が進む。
	課題	・ICT の活用方法は、交流だけに限らず、その他どんなことに活かしていけるのかを探る必要がある。 ・Jamboard の用意など、事前の準備が少し大変な面が感じられる。 ・Jamboard は考えを消しやすいため、児童が誤答を消してしまう面がある。全体で取り上げたい考えを、少人数の子どもの思考の中から見つけ出す工夫も大切にしていきたい。

第２分科会 大滝徳舜瞥	成果	・「めあて」「課題」の提示により、児童生徒が身に付けるべき学習内容を明確化させることができた。「ふりかえり」の時間に、適用問題に取り組んだり、学習について感じたことを発表したりすることで、学習内容の定着や今後の活用の見通しを持たせることができた。 ・他校との遠隔授業は、児童が多様な考えに触れることができる一つの方法として有効であり、自分の考えを形成し表現することもできていた。 ・スクールタクトやジャムボードの活用により、お互いの考えを比較する場面を取り入れることで、書くことを基にしたコミュニケーション活動の充実の一助となった。
	課題	・多様な考えに触れたり共有したりする場面を持つことはできたが、話し合いのような考えを深めていく場面を設定できなかった。自分と人の思いや考えを結びつけることで学びを深めることができるようにしていく必要がある。 ・ICT の活用場面を選定し、より効果的な活用を図る必要がある。また、使用時において、文字や記号の入力の仕方が分からない場合の対応やルールの徹底を行う必要がある。 ・端末とノートを目的や利点によってどのように使い分けるか考慮する必要がある。
第３分科会 虎杖小	成果	・主体的に判断し、行動し、児童がリーダーとなり、学習活動を行うことができるようになってきている。 ・課題解決へ向かう力を高めるために単位時間の「ゴール」を提示することで、見通しを立てて児童が学べるようになってきているので、今後も継続していきたい。 ・楽しさや達成感を感じる授業づくりのために、めあて・課題の設定を子どもたちが行ったり、ガイドに沿って授業をリーダーが進めたりしているので、今後も継続していきたい。その中で、より一層楽しく、達成感ある授業にしていくための検証を継続する必要がある。
	課題	・仲間と共に考える部分に関しては、児童同士が支え合ったり、助け合ったりし、課題を解決していく習慣はついてきている。今後も発達段階を踏んで、指導に努めていきたい。 ・自己の考えを「広げる」ことは、集団学びや交流の発表を通してできるようになってきているが、自己の考えを「深める」ことができるような研究をしていく必要がある。
第４分科会 樽前小	成果	・課題や見通しについては、数学的な見方・考え方を意識することで、効果的な手立てがとられていた。それに合わせて、ＩＣＴを含め解決の方法がいくつか用意されていたし、教材の準備もできていて良かった。 ・単元の見通しとして、「たしかめよう」の最後の問題にチャレンジさせるのを続けていく。また、後輩に向けて書いた振り返りも蓄積していき、来年度に還元していく。
	課題	・何を使って誰に向けて発表するのか、その目的を明確にして発表させるようにしていく。 ・本校では、「同時間接指導」は取り入れていないが、必要に応じて小わたりも入れている。ただ、指示を出し忘れたりどうしても渡れなかったりすることから、学習リーダーを育てていくことで、そういう事態にも対応できると考える。 ・教科書は児童のつまずきについても想定した内容になっているので、しっかりとその内容を吟味して授業をつくっていく。 ・計算力は、算数科の力を下支えする大切な力であるが、一方で個人差も大きい。１分間計算プリントなどを用いて、個別最適な学びができるようにして向上を図っていく。

第 71 回全道へき地複式教育研究大会に係る活動報告

〈令和2年〉

8 月 20 日	大会準備検討会議

〈令和3年〉

1 月 20 日	大会第 1 回準備委員会
4 月 26 日	大会第 2 回準備委員会
7 月 8 日	事前打ち合わせ
7 月 12 日～	実行委員会･研修会書面会議
7 月 30 日	大会第 1 回実行委員会･研修会
10 月 27～29 日	全国へき地複式教育研究大会宮崎大会　4 名参加
12 月 7 日	大会第 2 回実行委員会･研修会

〈令和4年〉

1 月 24 日	オホーツク大会事務局と引継
2 月 24 日	大会第 3 回実行委員会･研修会
4 月 26 日	胆へき総会　大会第 4 回実行委員会･研修会
5 月 13 日	道へき定期総会、第 1 回常任委員会（札幌）　実行委員長、事務局長
5 月 16 日	道へき第 1 回研究推進委員会（札幌）　研究部長
6 月 3 日	実行委員会 4 者協議（竹浦）
6 月 21 日	道へき第 2 回常任委員会（札幌）　実行委員長、研究部長
6 月 23 日	大会第 5 回実行委員会･研修会（洞爺湖）
7 月 4 日	道へき第 2 回研究推進委員会（札幌）　研究部長
7 月 6 日	実行委員会 4 者協議（竹浦）
8 月 1 日	道へき第 3 回常任委員会（札幌）　実行委員長、事務局長
8 月 4 日	大会第 6 回実行委員会･研修会
8 月 9 日	実行委員会 4 者協議（礼文華）
9 月 13 日	道へき第 4 回常任委員会（洞爺湖）実行委員長 道へき第 3 回研究推進委員会（洞爺湖）研究部長 大会実行委員会前日準備　顔合わせ
9 月 14 日	胆振大会 1 日目　講演会　分散会　歓迎交流会中止 道へき第 1 回評議員会
9 月 15 日	胆振大会 2 日目　分科会
12 月13日	実行委員会 4 者協議（虎杖）

〈令和5年〉

1 月19日	大会第 7 回実行委員会･研修会

各部

【総務部】

4 月 26 日	【第 4 回実委】 提案:①総務計画、②一次案内案
6月 9 日	大会 1 次案内決定稿　事務局送信
6月 15 日	洞爺湖文化センターへ借用物問い合わせ
6月 23 日	【第 5 回実委】 提案:①会場図、②二次案内案、③各管内取りまとめ用紙、④表示物計画、 ⑤各分科会場準備案
7月 7 日	Googleform による申し込みフォーム作成(道外参加者、一般大学参加者、管内参加者用)
7 月 12 日	大会2次案内最終稿決定
7 月 22 日	大会長に申し込みフォーム訂正のお願い
8 月 1 日	道外申し込み締め切り ＊申し込みフォームによる申し込み　道外11名、一般大学4名、管内6名 1日目弁当をキッチンひらおか(伊達市)に概数で発注
8 月 4 日	【第6回実委】 提案:①当日役割、②会場図、③表示計画、④機材配置計画 各会場校に配付:①道へき旗、②横幕・縦幕等、③グループ表示
8 月 18 日	道外申し込み者へ受付確認メール送信
8 月 24 日	分科会会場校へ「名札名簿・前垂れデータ」送信
8 月 26 日	全体会前垂れ内容を道へき役員に確認のため送付
9 月 5 日	歓迎交流会中止と懇親会の案内を道外参加者に送信 洞爺湖文化センターで会場打合せ(事務局長・総務部長)
9 月 6 日	1 日目弁当名簿送付
9 月 7 日	分科会会場校に受付名簿、名札、弁当領収書データを送信
9 月 9 日	実行委員に 1 日目会場準備に関わる要領を送信
9 月 14 日	大会1日目
9 月 15 日	大会2日目
9 月 17 日	1日目弁当代を業者(キッチンひらおか)に支払い
9 月 20 日	1 日目アンケート集計を事務局に送信

【研究部】

4 月 11 日	分科会一覧作成を会場校に依頼
4 月 28 日	研究主題・指導形態調査依頼
5 月 20 日	第 1 回研究推進委員会　関内
5 月 23 日	印刷業者に大会研究紀要等の印刷製本費等の見積もり依頼
6 月 23 日	大会研究紀要用基調報告提示
7 月 1 日	道へき事務局より分散会助言者確定の連絡
7 月 4 日	道へき研究推進委員宿泊確認 二次案内添付用会場校案内〆切
7 月 7 日	二次案内添付用会場校案内完成、総務へデータ送付
7 月 8 日	大会研究紀要用会場校の研究概要提出〆切
7 月 11 日	局助言者にも指導案を送付し事前指導を受けることが判明、各助言者に研究部長から連絡後、各会場校長には直接連絡を取り合う旨を伝達
7 月 13 日	胆振振興局に画像使用相談
7 月 14 日	大会研究紀要巻頭言等の依頼発出
7 月 15 日	大会紀要用会場校の研究概要校正終了
7 月 22 日	第 2 回研究推進委員会　関内
7 月 26 日	会場校受入可能人数確認
7 月 27 日	封筒原案提示
7 月 28 日	アンケート原案提示
7 月 29 日	分科会会場校の研究概要提出〆切 樽前小配信テスト
8 月 2 日	胆振振興局から画像データ使用許可および画像提供
8 月 4 日	道へき事務局へ借用 iPad 台数報告 開催要項原案提示 大会研究紀要最終確認依頼 会場 4 校配信テスト実施（午前）
8 月 5 日	大会研究紀要巻頭言、後書き提出完了（温泉委員長、前田委員長、針ヶ谷局長、安藤教育長協議会長、柴田副委員長） 道へき研究推進委員会学習指導部長と会場並びに受付体制について打合せ
8 月 7 日	大会研究紀要製本を印刷業者に依頼（データと 1 部印刷物を持込）
8 月 8 日	会場会の研究紀要校正終了し修正依頼
8 月 11 日	参加者数と会場定数を考慮し分散会場決定 分科会各校に研究紀要印刷指示（レールファイル式　部数は参加者＋20 部） 助言者 2 名に研究紀要と指導案送付指示
8 月 16 日	第 3 回研究推進委員会　関内 道へき研究部長に現段階の参加者名簿を送付
8 月 17 日	道へき事務局に確認用開催要項送付
8 月 18 日	局助言者（指導主事）に日程連絡および昼食弁当注文有無を確認し会場校へ連絡

8 月 19 日	分科会アンケート用紙原版を会場校に送付 道へき委員長から大会研究紀要巻頭言差替依頼
8 月 20 日	大会研究紀要と封筒のサンプル最終確認し印刷業者に発注
8 月 22 日	全体会・分科会オンライン参加者向けアンケート回答フォーム作成 開催要項掲載用の講師写真差替依頼受け修正
8 月 23 日	実行委員会分散会担当者を道へき研究推進委員会学習指導部長に報告
8 月 24 日	会場校に道へき研究推進委員の動き連絡およびアンケート用紙修正版送付 道へき研究推進委員長に感謝状贈呈について確認
8 月 25 日	事前録画（大滝徳舜瞥）
8 月 29 日	事前録画（虎杖小）
9 月 5 日	事前録画（樽前小） 分科会各校の研究紀要と指導案提出完了
9 月 6 日	分科会各校開催要項（参加者名簿付）を4者で確認 大会研究紀要（300 部）と封筒（5 種 420 部）印刷完了し受取 分散会後の閉会式のシナリオを道へき研推分散会担当者に送付
9 月 7 日	参加者確定により分科会開催要項を各校に送付 講演会資料印刷 会場校に開閉会式の流れや座席等につい連絡 道へき事務局に大会研究紀要と会場校研究紀要、指導案を送付し HP 掲載依頼
9 月 8 日	事前録画（とうや小）
9 月 9 日	刊行物送付先最終確認完了 関係機関（後援団体等）に大会研究紀要発送 会場校に主催者座席順訂正と感謝状に関する連絡
9 月 11 日	道へき HP で大会研究紀要等が閲覧可能 胆へき加盟校分の大会研究紀要仕分け
9 月 12 日	1 日目開催要項印刷 分散会閉会式で委員長挨拶代読原稿を担当実行委員に送付
9 月 13 日	前日準備、袋詰め作業
9 月 14 日	大会 1 日目
9 月 15 日	大会 2 日目
9 月 16 日	道へき研究推進委員へ大会アンケート送付 分科会各校に記録について原案提示
9 月 26 日	大会アンケートフォーム集約完了し関係者に送付
9 月 27 日	会場校に記録について作成指示 道へき情報誌の分散会原稿に係わり、分散会記録者に依頼
10 月 19 日	道へき情報誌の分散会原稿まとめ、道へき研究部長、研究推進委員会委員長、同学習指導部長に送付
10 月 20 日	道へき情報誌の分散会原稿を提出
10 月 28 日	道へき研究推進委員へのアンケート集約完了し関係者に送付

11 月 15 日	分科会会場校に配信状況作成依頼
11 月 28 日	分科会会場校研究記録校正完了
12 月 12 日～	大会記録校正
12 月 16 日	第 4 回研究推進委員会　関内 印刷業者に大会記録製本見積もり依頼
12 月 21 日	大会記録を印刷業者に依頼（データと 1 部印刷物を持込）
12 月 27 日	大会記録のサンプル最終確認し印刷業者に発注
1 月 19 日	大会記録完成、関係機関に送付および道へき HP 掲載

令和４年度　胆振へき地・複式教育連盟　加盟校一覧

令和4年5月1日現在

市町名	学校名	学級数	児童生徒数	へき地級	校長名	教頭名	1分野	2分野
豊浦町	大岸小学校	3(1)	16	1	南　正彦	牛島　夏陽	3	6
	礼文華小学校	3(1)	9	2	千葉　康弘	山岡　武志	1	4
洞爺湖町	とうや小学校	7(1)	60	2	山下　文人	田中　研吾	1	6
	洞爺湖温泉小学校	7(3)	36	2	柴田　暦章	市嶋　信一	2	5・6
白老町	虎杖小学校	5(1)	34	無	関東　英政	寺沢　圭司	1	5・6
	竹浦小学校	4(1)	23	無	前田　道弘	前田　朋寛	2	5・6
安平町	安平小学校	6(3)	19	無	中島　勉	草刈　昭斎	2	5・6
	遠浅小学校	6(5)	38	無	奥本　政一	森島　新	1	5・6
むかわ町	宮戸小学校	4(1)	10	無	金澤　堅一	山﨑　泰博	1・2	4･5･6
	穂別小学校	9(3)	74	1	中嶋　清人	溝渕　義弘	—	—
	穂別中学校	4	41	1	三品　秀行	佐々木　勤	—	—
苫小牧市	樽前小学校	3	24	無	深松　一宏	渡辺　奈美	1	6
室蘭市	喜門岱小学校	3	16	1	小野由美子	無量林高史	1	6
伊達市	関内小学校	4(1)	16	無	萩原　享	工藤　倫	3	4･5･6
	大滝徳舜瞥学校	4(1)	16	3	羽根　秀哉	立石　晃	1	5

令和４年度　第７１回　全道へき地複式教育研究大会　胆振大会

＜全国へき地教育研究大会北海道ブロック大会＞　　実行委員会　組織図

主　催
北海道へき地・複式教育研究連盟

共　催
全国へき地教育研究連盟

大会長（道へき・複研連委員長）
温泉　敏

副大会長（道へき・複研連副委員長）
小野田　年克　・　森　広明

後　援
北海道教育委員会
北海道教育大学
胆振管内教育委員会教育長協議会
洞爺湖町
SoftBank
各市町教育委員会
胆振管内小中学校校長会
胆振管内小中学校教頭会
胆振教育研究所
胆振PTA連合会

大会実行委員会

実行委員長　（委員長　前田道弘）
副実行委員長（副委員長　柴田暦章）
監査　（　同　金澤堅一）
〃　（　同　奥本政一）

事　務　局
事務局長　（事務局次長　千葉康弘）
事務局次長　（事務局次長　南　正彦）
（事務局長　中島　勉）
会計部長　（会　計　小野由美子）
会計部次長
（会計　無量林高史）
（喜門岱小学校　武田　久）
・推進の全体指示、調整。
・道へき連事務局、局・市町教育委員会との連絡調整。
・全体スケジュール、大会当日のスケジュール等の作成。
・講師・来賓等への案内、出欠確認、接待等外部対応全般。

総　務　部（総務担当）
部　長（副委員長　関東英政）
副部長（副委員長　山下文人）
副部長（副委員長　深松一宏）

※　会場・接待・広報
・各文書、資料等の作成・準備。
・各案内の準備、発送。
・大会参加者の集約、確認。備品等の購入。
・接待等外部対応全般。（事務局補助）
・全体会・提言発表等会場設営。
・分科会会場設営・運営方針作成、推進。
・弁当等の対応確認。

地区協力校
＊各地区の授業公開校以外の学校職員

研　究　部（研究担当）
部　長（研究部長　羽根秀哉）
副部長（研究推進委員長　萩原　享）
副部長（研究推進副委員長　近藤大作）
会場校研究担当者
・道へき・複連の研究推進計画に基づく基本的な研究骨子の提案、推進。
・研究推進上の共通事項の確認、周知。
・研究成果の蓄積（データ化）

研究推進委員会（４地区）
岡垣健一（洞爺湖地区）
足利敬史（伊達地区）
古村瞭汰（白老地区）
瀧川　明（室蘭・苫小牧地区）

地区ブロック実行委員会　＜委員長・事務局長会議＞

地区ブロック実行委員による、分科会推進の取組

○地区ブロック実行委員会は、役員と各地区ブロックの委員長・事務局長で組織し、全体運営・連絡調整にあたる。（管理職のみの構成）
○胆振管内を４ブロックに分け、４か所にて公開授業・研究協議を実施する。
＜洞爺湖地区、伊達地区、白老地区、室蘭・苫小牧地区＞
○各地区ブロックにて大会実行委員会・研究部との連携の下、研究公開校（会場校）を中心に、分科会運営に向けた取組を推進する。（４ブロックでの共通理解）
・分科会に向けての準備計画、役割分担、会場設定、研究内容（提言・授業内容）等の確認
＊研究公開校は研究内容の提言、授業公開に専念し、公開校以外の学校が事務的な準備作業や当日の運営を行う。

※　基本的には総務・研究の２部制とする。（会計は事務局の中に含める）
※　研究部は従来の研究推進委員会をベースとし、各市町の会場校の研究担当で組織する。